
召喚師 屍魍己

田吾作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚師 屍魘己

【Nコード】

N0431L

【作者名】

田吾作

【あらすじ】

授業が終わって帰ろうとした時、転校生の黒井から奇妙な警告を受けるが、無視して帰る途中で、堅気でない男と出会ってから事件に巻き込まれた。

第1話 逢魔ヶ刻（前書き）

この作品は以前に企画してお蔵になったTRPGのシナリオに手を加えた作品です。

内容は、フィクションであり、実在もしくは歴史上の人物、組織、地名などとは、一切関係ありません。また特定の思想、信条、宗教を擁護、または『批判』する目的は、ありません。

第1話 逢魔ヶ刻

「さて、授業も終わったし早く帰らないと」

俺は、立ち上がるとロッカーに向かう。掃除当番は先週だったので急いで帰り支度を終わると教室を出た。廊下では、他のクラスの連中が所々に集まってお喋りしている。授業が終わったのんびり出来る時間でもある。

「「深町」」

振り向くと同じクラスの武原直之と倉橋一也だった。

「俺達は、掃除当番なんだが、もし終わるまで待ってくれたら駅前のゲーセンで遊んでいかねえか？」

箒を持った倉橋が言つと首にタオルを巻いた武原も眼鏡を掛け直して頷く。

「以前、店で貰ったチラシによると新作のバイオマスターが今日、入る予定なんだ。で、俺達は、さっそくプレイしようと思ってな」

武原が誘ってくれるが今日だけは、都合が悪い。俺は周囲を見回すと小声でいかにも『非常』に申し訳無いと表情をして二人に事情を話した。

「実は、な……ほらっ以前、三人で秋葉原のPCショップのイベントで応募した例の『あれ』が当たったんだよ……」

「おいっ！ーマジかよ！ー！」

「スゲーじゃん！！俺なんか当たらないぞ！！いいなー！」
「シーー！！二人とも声がでかいってば」

大声で話す二人に周囲の生徒が俺達を見る。慌てて俺は、二人の背中を押して教室の中に押し戻した。幸い、教室内の連中は俺達に関心を払っていない。

「……と言う訳なんだ。ゲーセンなら明日付き合つよ」
「まあ、それじゃ仕方無いよな。……もし俺だったら待ちきれず仮病でとつとと早退するぜ。なあ、そうだろタケ？」

倉橋が同意を求めるように言うと武原は、肩をすくめる。

「そりゃそうだ。で、明日でもいいから絶対に俺達にも触らさせてくれよな、な」

「おK、了解した。でも学校に持ってくるのは、ヤバイから俺んちでな。では、また明日」

「じゃあな」

「おう、明日楽しみにしているぜ」

二人の声を背にしてそそくさと階段に向かった。倉橋と武原は、中学からの親友で同じ趣味仲間だ。

俺達の教室、二年C組は二階にある。急ぎ足で降りると昇降口で、上履きから通学用の革靴に履き替えようとした時だった。

「深町君」

「なんだ黒井さんか……俺、急いでいるんだけど」

いつの間にか同じクラスの黒井日菜子が立っていた。艶やかなセミロングの黒髪で前髪を眉毛の上で切り揃えている。端正な顔立ち

は、へちやむくれ顔の女子連中の中では、人一倍目立つ。そしてなにより目立つのは、着ている制服が真っ黒のセーラー服とスカートで黒のストッキングを履いている。

黒のリボンタイにボタンが付いている、ジャケット型のセーラー服だ。離れて見ると全身黒づくめで某マンガの敵キャラみたいだ。ちなみに、この制服は、男女共に紺のブレザーで水色のネクタイだ。男は、グレーにチェック柄が入ったスラックスで女子は、グレーのチェック柄ジャンパースカート。俺が脳内で描写していると黒井は、腕を後ろに組んで俺の前に来た。ほのかな香水の香りが鼻腔を刺激する。

背の高さは、やや小柄な俺より少し低いだけで女子生徒の中では平均だ。まるで獲物を狙うような鋭い目で俺を見つめる。

「もっ、もしかして俺に愛の告白かとじゃないよな……たぶん」
「……」

俺の冗談に黒井は鼻で笑うかと思ったが、視線を向けたまま短く囁く。

「今日は、何処にも寄り道しないで帰りなさい」
「なっ！..!」

黒井は、背を向けると階段に向かった。他の奴なら笑って済ませるけど、あいつに言われると非常に気になる。追いかけて腕を掴むと一瞬、不愉快そうな目で俺を睨む。

「それ、どういう意味だよ？」
「今日の昼休みにタロットカードで占った結果だけど深町君は、運命の岐路に立っていると出たのよ。当選したんでしょ？例の『あれ』」

「

「なっ、何で分かったんだよ？」

「もし当選から外れていたのなら……占いも違う結果が出て、私もここまで追いかけて警告なんかしないわよ」

「……」

俺が無言でいると黒井は話を続ける。

「普通の生活を続けたいのなら、学校を出てから誰からの頼みや手助け求めてきても無視して家に帰りなさい。一晚過ぎれば今迄通り、平凡だけど普通の生活が送れるわ」

それだけ言うと黒井は、階段を上がりだした。

「もし……警告を無視したらどうなるんだ……？」

あいつは、俺に背を向けたまま。

「悪魔との戦いに巻き込まれて最悪、深町君に死が訪れる」

「なん……だと……」

黒井は、立ち去った。いつの間にか昇降口の周囲は静寂に包まれて誰もいない。まるで俺一人が取り残されたみたいだ。

「つたく、あの女何様のつもりだ！！悪魔なんているわけねーよ！これだから嫌だねー占いオタクは」

校門を出てゆるい坂道を下りながら心の中で毒づく。

秋も１１月下旬を過ぎるとかなり肌寒くなり、さすがに制服の上着だけでは辛くなってくる。

先月まで明るかったこの時間帯は、今ではかなり薄暗くなってき

た。夕暮れ時は、『逢魔ヶ刻』と言い、昼から夜に移り変わる時刻で、眠りから覚めた魔物と出会う確率が高くなるそうだ。

『涼太や、逢魔ヶ刻までには、家に帰るんだよ』って死んだ婆ちゃんと言ったな……ってあいつのせいで、よけいな事思い出しちまったじゃねえかよ……

黒井日菜子。今年の九月に転校して来た生徒で、美人だが近寄り難い雰囲気があって当初は孤立していたが、昼休みにタロットカードで占いを始めると興味を持った倉田由香と町田園子が話しかけてから今では、複数の女子生徒に囲まれている。彼女達の話だと結構的中するらしい。

俺達の通う光陵高校は、東京、世田谷区の上用賀にある。いつもなら駅前のゲームセンターで遊ぶか書店に入ってコミックや雑誌の立ち読みをするが、今日は『あれ』が届いているので、寄らずに真っ直ぐ家へ向かって早足で歩く。学校から自宅迄は、徒歩で約20分だ。

ふっ、一日がこんなに長く感じたのは久しぶりだぜ。『どこでもドア』が欲しいよ全く……

家の近くまで来ると日は暮れて周囲の住宅街は夕闇に包まれ、点灯した街灯が寂しさを強調する。まさしく逢魔ヶ刻だ。『あれ』の事を考えながら最近竣工したアパートの角を曲がった時に、他人とぶつかってしまった。俺もぼんやりしていたので悪かったが、その人も急いでいたみたいなので互いに顔を押さえて尻餅を付いた。

「痛っううう、だっ大丈夫ですか？」

『その人』は、黒のソフト帽を被り、黒のスーツを着ている。ガツシリした体格で髪は短く精悍な顔つきの男だ。左の頬に切り傷の跡がはっきり分かる。歳は30代から40代位だろうが、どう見てもサラリーマンに見えない。時々新聞を賑わす『あの業界』の人だ。

（オワタ）

俺は、この人に良くて怒鳴られ殴られるだけ済むか、最悪は事務所に連れて行かれ、法外な慰謝料を請求されるのかと想像して身震いした。

選択肢を一つ選びなさい。

？ とにかく低身低頭、ひたすら謝る

？ 万難を排してでもその場から逃げて近くの交番に飛び込む。

？ 通りすがりの親切なおじさんが助けてくれる

第1話 逢魔ヶ刻（後書き）

拙い作品ですが、今後とも宜しくお願いします。

第2話 遭遇

俺の選択肢は、？だ。常識なら？だけどとにかく関り合いたくないし家に帰りたい一心の気持ちでいっぱいだ。？を期待するほど甘くない。

とにかくこの場から離れようとした、が。

「うひゃらっ！！」

男に腕を捕まれ、情けない声を出した。その厳つい外見に相応しい力強さの手で掴まれて、逃げられない。

「ごっ、ご免なさい、ご免なさい、ご免なさい、ご免なさい、事務所に連れてくのは勘弁してください。死にたくないです……」

頭がパニックになって恥も外聞も無く謝り続けた。そんな俺を見て男は怒鳴るところか呆れた目で見てくれている。

「……」

男は、ゆっくりと立ち上がるが左脇を押さえている。怪我をしているのかもしれない。無言で俺を見ているが何か決心したのか頷く。周囲は夕闇に包まれ、こんな時に限って誰も通らない。

「お前の……名は？」

「ふっ！深町涼太です。高校生やってます。はい……」

男の声は低いが充分にドスが効いて有無を言わせぬ迫力がある。と、とにかく怖い。

「学生か、俺は浦木だ。新宿の……でしている……」

浦木と名乗った男は、上着の内ポケットからボールペンと名刺を取り出して何か書いている。俺は、ジッと黙って見ただけだ。

「こいつを今、名刺に書いた名前の男に渡して欲しい……」

いきなり刑事ドラマに出てくる台詞を言われても困るよ、オッサン。俺が黙っていると浦木さんは前より辛そうな表情をしている。

「今の俺には、届ける力が無い……お前なら俺の……これをあいつに渡してくれ……」

「警察に持つていけ」「サツは、ヤバイ!! 奴らが……」

鋭い口調で遮られた。

ポケットから何かを取り出して俺の手に握らせた。見ると折り畳んだB5サイズの茶封筒に硬いものが入っている。俺が関わり合いたく無い表情をしているのが分かるのか浦木さんは、奇妙な笑みを浮かべて悪魔の囁きをする。

「無事に届けてくれたら謝礼が出る。本来なら俺が受け取る筈だが……お前に全額を渡すように名刺に書いた」

「了解しました。万難を排してでもお届けします」

またやってしまった……駄目な俺……

「頼む、それがあれば奴らに一泡吹かせてやれる……これで俺は、……」

厳つい表情が緩み、どこか遠くを見ているようだ。突然、周囲の景色が消えた。

「えっ？ えっ！？ 何！？」

「チツ遅かったか！！」

浦木さんは、鋭く舌打ちをした。街灯に照らされた住宅街が消え、黒い霧らしきモノが周囲を渦巻いている。まるで空間から切り離されたみたいだ。俺はただ見ているだけ。

「俺から離れんじゃねえぞ！！」

「はっ、はい！！」

懷から、お札らしい物を取り出して身構えた。

そんな時は、身を隠すんだ！！ って誰かが言ってたな……全く。

何かが俺達を囲うように近づいて来る。そして黒霧の中から小柄な人影が現れて、ビツクリした。

そいつらは、背丈は、子供だが手足が極端に短く腹が異常に膨らんでいた。肌が異様にドス黒く、目だけ異様に輝いて俺達を見ている。数は、6〜8体で鋭い牙と爪が怖い。友好的どころか、獲物を目にして今にも飛び掛ろうとしている。

「うらっ！！ 浦木さん……こっこいつらってまさか……あれっ！
！ あれ？」

「ああ、こいつらは幽鬼の一種で『餓鬼』だ」

浦木さんは何故か嬉しそうだ。

地獄の亡者が何でこんなトコにいるんだよ!!

「フツ、こんな雑魚で俺を殺れると思ったのか!!」

浦木さんが何か唱えると札は青白く輝き、光が近くの餓鬼に命中した。

餓鬼は、奇怪な絶叫を上げて消滅。続けて『破魔!!』と唱えると2体の餓鬼が消えたが、お札も消えた。まっまずいよ!! 浦木さんは、両手を合わせ、印を結ぶ動作をした。

「マハ・ザン
魔破斬!!」

凄まじい衝撃が発生して残りの餓鬼達をバラバラに引き裂く。そして悲鳴を上げる間もなく消滅した。

「すごつ!! 凄すぎる!!」

「はぁ、はぁ……」

浦木さんは肩で荒い息をしている。今の『術』は体力、精神力を激しく消耗するみたいだ。小説、マンガやゲームに出てくる『魔法』を見て、夢でも見ているようだ。俺は体の震えが止まらない。

黒い霧は、消えて、夕闇に包まれた住宅街が戻った。

「クソツたれが!! 餓鬼は囃か!!」

車が2台、俺達を挟むように近づいて来た。ヘッドライトが眩しい。

「俺が奴らの囃になるから、お前は逃げろ!!」

「で、でも……」

「馬鹿野郎！！ 死にてえのか！！」

躊躇する俺を突き飛ばす。浦木さんは、ホルスターから自動拳銃（コルト45オート？）を抜くと俺を見た。まるで獰猛な獣のようだ。

「必ず、竜也に渡してくれよ」

「は、はい必ず！！」

「早く行け！！」

俺は聞きたい事があるけど、その場から逃げ出した。背後で車の激突音と叫び声が響いたが、構わず家に走った。

「たっだいま……みつみず……」

俺の家は二階建てのプレハブ住宅で築20年以上経っている。玄関を開けて靴を脱ぐと奥から香ばしいカレーの匂いとお袋の声がする。台所に向かって冷蔵庫から麦茶を出して飲むと一息ついた。

「お帰り。どうしたの？ もうじき夕ご飯が出来るわよ」

「分かったよ」

二階に続く階段を上がろうとした時、お袋が呼び止めた。

「今日、涼ちゃん宛に荷物が届いていたので机に置いといたわ。通販でまた変な物買ったんじゃないわよね？」

「んなモン、わざわざ買わないよ。昨日、言っただろ？ 応募した例の『あれ』が当たったんだよ」

「本当かしら？」

疑わしそうな目で俺を見る。まあ前科があるから仕方ないか。

「マジだつてば、後で現物を見せるから」

俺は、お袋の声を無視して自分の部屋に入った。アニメキャラのミーシャが最高の笑顔で迎えてれる。

机の上に小包が置いてあるが、俺はベッドに寝転んで天井を見た。あんな事、現実には有り得ない。性質^{たち}の悪い夢だよ全く。

浦木さん無事かな……？

非常に気になるが再びあの場所には行きたくないし、それにこんな事、他人に話しても信じてくれないだろう。軽く10分ほど目を閉じて考えたが良い考えが浮かばない。

着替えもしないで椅子に座る。包みを破ると化粧箱が現れたので震える両手で開けると、ついに『あれ』とご対面した。

『あれ』とは、サイバース・コミュニケーション社が来年、全世界に向けて発売する最新鋭のCommunication Player『COMP』と呼ばれる携帯モバイルである。

サイバース・コミュニケーション社は通信事業では、最大手の多国籍企業で文字通り世界規模で販売を展開している。（自慢では、無いが俺の使用しているパソコンは自作だがマザーボードと、ビデオカードは、サイバース社製だ）

『COMP』は、従来のスマートフォンを遥かに凌ぐ高性能で低発熱、省電力の中央演算処理装置と長寿命のバッテリーで基本スペックは、1世代前のデスクトップパソコンより遥かに上だ。

画期的なのは、専用のヘッドバイザーを接続して使うと《画面が立体的に表示される》事だ。立体テレビは販売されているが、まだ大画面のみ対応で高価格だ。『COMP』は、操作も専用リモコンを使い画面がヘッドバイザーに表示され、視線を変えずに文字入力ができる。

テレビ通話機能は、当然、装備されていて本体に付属のカメラがオプションのデジタルカメラで会話できる。

サテライト・ナビゲーション・システムも有り、ゲーム機能も当然対応して『家庭用ゲーム』からオンラインゲームまで楽しめる。

もちろん、欠点と言うべきか短所を挙げると、

『専用』のプロバイダーに加入しないと立体機能とテレビ通話の恩恵を受けられない事である。

サイバースのメンバーに登録するのは当然として、別途に年会費が掛かるとの事だ。（インターネットをしている人は、プロバイダーを二つ持つ事になる）

具体的な金額はまだ発表されていない為、不明だけどネット内の噂では、かなり高額になるらしい。

現在、俺が手にしている『COMP』は、発売に向けての最終完成品で抽選によって特別モニターに選ばれた者にだけ送られた製品だ。モニターは、世界主要国12カ国で計13名。

つまり俺は、世界で選ばれた13人の内、1人という訳だ。倉橋やタケが羨ましがするのも無理は無いよ。浮かれた気分で送付案内書を見る。

拝啓、深町涼太様。厳正な抽選の結果、特別モニターに当選されましたので、弊社が来年発売する『COMP』を送らせて頂きました。ご使用につきましては、最初に会員登録をお願い致します。

登録が完了されませんとご使用は、出来ませんので予めご了承下

さい。

尚、特別モニターの期間中は、その間の弊社プロバイダー及び会費は、無料ですのでご存分に堪能して下さい……

俺は、『COMP』を手にとるとニヤつく笑みを押さえられない。本体のカラーは、とても渋い木目調で、手触りはまるで木製の製品みたいだ。重さも今使用している携帯より『少し重いかな』って感じで、違和感はない。

大きさも携帯ゲーム機とほぼ同じで、ズボンのポケットに入れにくい専用ケースが付属しているのでベルトに通せば問題無い。

ヘッドバイザーは、未来的なデザインでヘッドホン・マイクにスポーツ・サングラスを足した感じで、眼鏡を掛けていても圧迫感はない。グラス部分は角度の調節が可能で使用しない時は、上に跳ね上げる事が出来る。

ヘッドバイザーを被ると早速、バッテリーを本体にセットして電源を入れると軽快な音楽と共にサイバース社のロゴが飛び出た。

「スッ！！ スゲーじゃん！！ 本当に飛び出てるぜ」

感動していると艶のある女性の声が響いてきた。

《……ご購入頂きましてありがとうございます。お客様の登録をお願い致します……》

見るとユーザーナンバーとパスワードの入力画面が現れた。説明書の最後に載っているで迷わず入力するが初めての感動と緊張に慣れないリモコン操作で手早く入力出来ない。

「涼ちゃん、ご飯出来たわよ」

下からお袋の声が響いた。俺は、返事をするそのまま台所に降りた。

「当たったのは、これだよ!!これ」

俺は、お袋に案内書を渡した。

「嘘っ!! 本当に当たったのね。まだ信じられないわ、まさか当たるなんて……」

驚いているのか呆れているのか分からない声で俺と案内書を見比べている。

俺は、カレーライスを食べながらフンと鼻で笑う。自慢じゃないが、この世に生まれてから懸賞とかで当たった事が一度も無い。むしろ親父とお袋の方が当たっている回数が多いぐらいだよ。

「やだ、まだ着替えてないの?」

「飯、食ってから着替えるよ」

「あっそうそう、涼太が帰ってくる前に京子ちゃんから電話があったわよ」

「qあwせdrftgyふじこlp?!」

俺は、盛大に食べてたカレーを吹き出して激しく咳き込む。

「あっあいつが何の用だつて?」

「クリスマスに遊んであげるから感謝しなさいって言ってたわよ」

お袋は、最高の笑みを浮かべてくれるよ全く……

「涼太を心配してくれる女の子は、京子ちゃんだけなんだから……感謝しなさいよ」

「冗談じゃねーよ」

思わず声を荒げてお袋に文句を言う。

「そんな事言うんじゃない」

「あいつが俺の姉貴になったら人生真つ暗闇だ！！ どーせ男に振られた腹いせで俺に八つ当たりでもすんじゃないのー！！」

言うだけ言っただけ俺は、自分の部屋に戻った。着替えながらあいつの事を思い出して不愉快になり、当選した感動が霧散しちまいた。った。

京子

私立の女子校に通う三年で俺より1個年上だ。

お袋の妹の娘。つまり俺の従姉だ。小さい頃は泣かされていた……幼い頃から空手を習っていて今では空手部の主将になり大会に出て何度か優勝している。

最近は同人誌に手を出してサークル活動している（俺は、関わり合いたくないが……）

お袋の前では、いい子ぶっているから性質が悪い。

あいつ曰く『かわいい弟を可愛がってるんだから感謝しろ』って言いやる。

あだ名は、スケ番お京で制服のセーラー服にスカートの長さが足の踝まである事から由来するらしい。

年配の先生には懐かしい目で見られているそう。

1980年代じゃあるまいし今時、そんな奴いねーよって言いたい。

あいつ曰く『短いスカートが主流だけど、これからはロングが流行るのよ。アタシは、その先駆けってワケよ。オホホホホ！』だとき。

あいつの事は一旦忘れて『COMP』の初期設定を続ける。パスワード入力後は、住所、氏名、年齢、ニックネーム、職業の入力欄が現れた。全て入力しないと設定の完了が出来ない。

「やった！！ エラー無しで無事再起動した！！」

俺は、システムのカスタマイズを始めた。サイバース社にある俺専用の仮想サーバーにデスクトップパソコンのデータを転送する設定をした。今後『COMP』で直接、データを扱える様になり自宅のパソコンを使わなくても済むのである。

「そうだ、AT-LOWさんとレッドマンさんに当選した事を教えなきゃ」

俺は設定したDDS-NETを立ち上げ、ログインする。

>こんにちは、レッドマンさん。ついに例の『COMP』が届きました、そこからメールを送ってます。こいつは凄いです、最高です感動の連絡です。

続いてAT-LOWさんに同じ内容を送信すると、返信が来た。

>おめでとうございます（＾o＾）／まつたけごはんさん。世界で13人の1人ですか、大変羨ましいです。自分も応募したのですが外れました（T-T）

もしよろしければ使用した感想のスレッドを立ち上げてみたらど

うでしょうか？

楽しみにしています（＾―＾）

>おめでとうー！！ まつたけごはん。羨ましいぜ畜生！！ オフ会の時に持つて来いよ。俺が分解してやるよってのは、冗談だ。俺を含めて友達は外れたんだ……クソッ！！ 本当に羨ましいよ全く

……

何か分からない事があったらメールくれよな！！

じゃまた（＾―＾）／

まつたけごはんは、俺のハンドルネームだ。そしてDDS・NETは、数あるネットの中で老舗の一つで面白いフォーラムが多くある。特にゲーム、アニメ、オカルト関係では、トップクラスの情報が充実している。

AT・LOWさんとレッドマンさんは、ネット仲間で、一番親しいので喜んで（羨ましい）くれたので俺は、何か暖かい物を感じた。二人とは、リアルで逢った事は無いけど昔、ネット内で『教えてくん』だった俺に親切だったので特別だ。

スレ立ては、他の人が立てるだろうし、サイバースの公式サイト内にレポートの項目があるから様子見にしよう。

とにかく立体画面は感動的だ。取説を読んでいると、いつの間にか帰宅した親父が部屋に来た。

「涼太、風呂が沸いたから先に入れっ……おっ！！『COMP』が当たったのか？ 凄いな。父さんの会社でも応募した人はいたが、誰も当たらなかったぞ」

「風呂は父さんが先に入れば？ 仕事で疲れている筈だろ」

「俺は、一杯やってるし母さんは、かたづけがあるから最後でいいって言うからな」

「じゃあ俺が入るよ」

「ところで涼太、今、楽しくやってるか……」

「なっ！！なんだよ急にそんな事言って……どうしたの？」

俺は顔を背けてぞんざいな口調で言う。

「いや、何がって言うと、『事故』で助かる為とはいえ、お前の身体は……」

親父は辛そうな目で俺を見る。親父とお袋の気持ちは、よく分かるよ。

「気にしてないってば、あの処置があつたからちよつと不便な事はあるけど、生きていられるから感謝してるよ。でも今になってそんな言つの？」

「昼休みにニュースで特集していた青少年のいじめや自殺、猟奇犯罪が多発してる統計を観てちよつと憂鬱になったんだよ。父さんの子供の頃にもいじめや自殺はあつたが今ほど酷くない……」

真剣な目だ。俺がこの身体のせいで、いじめられていると思ったのだろ。心のどこかでキリキリと痛いよ全く。

「俺は、この身体が原因でいじめられたりしてないし、自殺したいなんてこれっぽっちもないよ。姉さんの分も生きるんだから大丈夫！！」

俺がガッツポーズすると親父は嬉しそうだった。

「すまん、父さん達もお前の為に頑張らなければならぬな」

部屋から出て行った。

親父には、ああ言ったが全く気にしていないのは嘘だ。それに風呂に入るのは今でも精神的な苦痛がある。風呂で裸になると自分の身体が普通で無い事を思い知らされるからだ。

そして姉さん……

風呂から出てパジャマに着替えて、ニコリ動画でゲーム攻略の動画を観ながら思い出す。帰る途中、出会ったガラの悪そうなオッサンの事だ。『COMP』とクソ京子の件ですっかり忘れていた。制服のポケットから預かった物を出して机の上に置き、折り畳んだ茶封筒から取り出した。薄くて長方形の形をしている。何かの部品らしい。

「これってSSDじゃねーか？」

SSDは、パソコンに使われるメモリディスクで従来のHDDに替わる記憶装置の一種だ。

以前は、容量が少ない割りに高価格なのと書き込み回数に上限があったが色々と改良されて現在では、主流になっている。

中に何が入っているのか非常に気になるのでパソコンに接続して確かめる、が。

ヤツパ無理か……当然だわな

モニターには、パスワード入力画面が表示されている。

プロテクトが掛かっているのでコピーも不可能だ。

さて、これをどうするか。

「親父とお袋に話せば警察に届けろって言う筈だ。それが無難だけ

ど……浦木さんは、マズイって言うし……名刺に書いてある人まで届けるか……って住所は、げっ歌舞伎町かよ!!」

(有) 如月商会 如月竜也 新宿区歌舞伎町9-11……

学校が終わってから歌舞伎町に向かうと完全に日が暮れてしまう。あの繁華街は、夜になると別世界になるから行くのがちょっと怖い。日曜まで、あと4日あるから早く届けたい。

明日、学校をサボッて届けるか。倉橋とタケに付き合ってもらおうかそうすると謝礼が……メールを入れとけば問題無いよな……

その夜。不思議な夢を見た。

巨大な劇場の座席に座っていて他に誰もいない。突然、スポットライトがステージを照らすと1人の男が現れた。

車椅子に座ったグレーのスーツ姿の男で眼鏡を掛けている。知的な雰囲気があり学者みたいだ。髪色からして日本人では無い。

「はじめまして、深町涼太君。私の名は、Steven。君が浦木の依頼を受諾した為、普遍的無意識の世界を通して介入させてもらった。現在、君の住む世界、東京で異変が起きつつある。そして君は悪魔達との戦いに巻き込まれ、命を失うだろう……」

Stevenと名乗る男は、とんでもない事を言う。

これは、以前やったゲームのオープニングですね、よく分かりません。

「君は、浦木の意志を受け継いで戦うなら、悪魔に抗う術^{すべ}を与えよ

う。どうだね？』

『いきなりどうだね？って言われても困るよ、メガネのオッサン』

ま、夢だからどーでも良いだろうと思いい、『承諾』の意思を示した。Stevenは、満足気に頷く。

『それでは、君の『COMP』にあるプログラムを送ろう。悪魔と戦うには、悪魔の力を利用する事だ。それと……スに『ナー』を…

…う。きつと君の力にな……だ』

『トナーって？』

『……であるから……ほろ……』

そこで俺の意識が消えた。

第3話 如月商会（前書き）

美味しい話には必ず裏があります。

第3話 如月商会

翌朝。

新宿駅に行くには、新玉川線（田園都市線）で渋谷に出て山手線に乗り換えなければならない。倉橋と武原には用事が出来て休む旨を担任に伝えてもらう為、二人にメールをする。さっそく返信が届いた。

俺は、『夕方にネロンガで落ち合おう』とメールすると二人から了解した、と来たので一安心だ。ネロンガは俺達が利用しているネットカフェである。

朝の満員列車に乗るのは精神的苦痛がある。何が辛いかと言うのは俺の股間をまさぐる痴漢と痴女には我慢がならない。

いくら俺が女顔だからといってそりや無いだろうっ！！

通勤ラッシュでJR新宿駅は混雑している。制服姿で歌舞伎町に行くとは補導に引かかるのでトイレで普段着に着替えた。バッグは、邪魔なのでコインロッカーに預ける。

（やっぱ直に行くより事前に届ける事は連絡しておくかな？）

新宿駅東口側の地下にあるコーヒESHOPで考えながら携帯の時計を見ると8時20分だった。大半の会社は、9時から始まる所が多いって親父が言ってたのを思い出す。時間潰しにと持って来たラノベ（ライトノベル）を読む。

時間だ。よしっTeellすっか

浦木さんから貰った名刺を財布から取り出して電話する。数回の呼び出し音で相手が出た。

『如月商会でございます』

女性の声だ。女子社員かもしれない。

『あの、深町涼太と言いまして実は浦木さんの件についてですが』
『少々お待ちください』

いきなり待たされた。携帯の通話料は高いからとつと出るよ、とイライラしながら待つ。

『お待たせ致しました。浦木の件についてですが、詳しく教えて頂けませんか』

さつきとは違い何か高圧的な口調だ。一瞬、ムツとしたが昨日の出来事を伝え、わざわざ届ける為に学校を休んで新宿駅に来ている事を話した。

『当社の場所は非常に分かりにくいので、社の者を迎えに行かせます。現在いる場所と貴方の服装を教えてください』

『はっはい……』

俺は今いる店の名前と着ている服の色を話すと、その社員はすぐに電話を切った。途端に期待と不安に襲われた。

謝礼の為とはいえ、学校サボってこんな事しなきゃ良かったかな

……

不安な気持ちでは、持って来たラノベの続きを読む気にならない。時間がとても長く感じる。

周りを見るとスーツ姿のサラリーマンだらけで当然だが制服を着た高校生は、殆どいない。コーヒーマシーンをもう一杯頼んで携帯のメールを見ようとした時。

「深町……涼太君ですね？」

「え？」

振り向くと黒いスーツ姿の女性が立っていて、にこやかな笑みを浮かべていた。歳は、20代前半位で茶髪のショートボブカットが似合う美人だ。スタイルのよさがブランド物のスーツを通してよく分かる。仕事が出来るカッコいい大人のオンナだ。

「はじめまして。私、如月まどかと申します」

「深町涼太です」

如月まどかと名乗った女性は、名刺入れから一枚取り出して俺に手渡した。俺も、皺になった浦木さんの名刺を彼女に渡した。

「確かに浦木さんの名刺だね。信じられない……あの人が……」

悲しげに上を向く。

「事務所に案内するから付いてきてね」

「はい」

颯爽した足取りで店から出た。ハイヒールなのにかなり早足で俺は遅れがちになる。

地上に出て靖国通りを横断するとそこは歌舞伎町だ。朝なので多

くの店は、シャッターを降ろしている。開店しているのは、24時間営業のファミレスかコーヒーショップくらいだ。それに人通りも少ない。

「深町君は、歌舞伎町には、よく遊びに来るの？」

「いえ、映画を観るくらいです」

遊ぶといっても渋谷か秋葉原に二子玉川くらいだ。

「ここは、面白い街よ。以前は治安が悪くなかったけど今は安心して遊べるわ。表通りは、ね」

じゃあ裏は変わらないのかよ

裏路地に入ると雰囲気が一変して昔ながらの古い街並みになった。ゴミが散乱して、読めない漢字や外国語の看板が雑居ビルの壁に貼ってある。路面は石畳で雑居ビルばかり目につく。中華街が更に退廃した妖しい雰囲気醸し出している。

「はぐれると迷子になるわよ」

振り向かずと言う。突然、背後から男の怒鳴り声が出た。

「オメエは、メス犬なんだよ！！　メス犬ならメス犬らしくしゃがれっ！！」

「あうう」

何か叩く音がして女のうめき声が出た。振り向いたら信じられない光景を見た。

「うつ！　嘘だろ！！」

俺は、ゴクリと喉を鳴らす。

一組の男女がいた。男は禪姿で女は、全裸で四つん這いになって首輪を着けられていた。紐は、男が握っている。反対の手にある鞭が女の背中を叩いている。男は腹の出たキモい中年男。女は20代後半か30代のオバサンかもしれないがかなりの美人だ。男のニヤニヤした顔と女は恍惚に喘ぐ表情で俺を見た。

ヤバ！！　目が合っちゃったよ……

二人は、反対の角に曲がり姿を消した。

「どうしたの？」

「へ、変な二人がいたんです……」

「あっそう、こっちでは、普通よ」

事も無げに言うので反論できない。それならアンタも異常だよ。歩いていると目的地に着いた。

「このビルの四階よ」

戦前に建てられたのか蔦に覆われ赤レンガで造られた四階建ての雑居ビルだ。中に入ろうとした時、入り口に1人の女性が現れた。

「はああいまだかぁ、お元気してるう？」

「私は相変わらずよ。それよりアケミはどうなのかしら？　滞納するとビルから叩き出されるわよ」

「分かってるてばぁ……大丈夫う今度も身体で払うからぁ……あははははは」

ケバイ化粧をした年齢不詳の女で俺達をニヤニヤ見ている。ヤクでもやってラリっているみたいだ。

着ているのは身体にピッタリ張り付いた袖無しの真っ赤なワンピースで、胸元が大きく開いて胸の谷間がはつきり見える。丈もギリギリのラインで黒の網タイツに金色のピンヒールを履いていて挑発的な服装だ。胸と右腕と左足に色鮮やかな、悪魔と妖精のタトゥーを入れている。

「でえ、この坊やは、もしかしてえこれえなのお？」

指を立てると、まどかさんは、鼻で笑う。

「違うわ、この子は、浦木さんの代理人とでも言うべきかしら」

「そうだったの……あんないい人があ……こんな子供がここに来るなんて妙なものねえ」

「そうかもね……」

「アンタ女の子みたいだわあ。お化粧させてドレス着させればウチの店でトップになれるわあ……うふふ」

俺を見てニタニタ笑う。全く失礼なオバサンだ。

「ああ、新鮮な男のミルクが飲みたい……」

俺達にヒラヒラと手を振って千鳥足でビルから離れた。

「あの人は、？」

「彼女は、盛りのついた宿無しの野良猫よ。悪さをして、この街でしか生きられない……哀れな猫」

まどかさんは、哀れな子を見るようだ。

古いエレベーターに乗るとまどかさんは、四階のボタンを押した。ガタガタと音を立て今にも壊れそうだ。

四階に着いてドアが開くと薄暗い廊下を目にした。誰もいない廊下を進み右に曲がると両開きのドアが見えた。右側にネームプレートが貼られ『有限会社 如月商会』と表示されている。

「ここよ。中に入って」

「失礼します」

まどかさんに続いて入る。

入って右側に来客用ソファとテーブルが置いてある。反対側に社員用の事務机があり、机は四つで上にパソコンが置いてある。出かけているのか俺達以外誰もいない。窓側の正面に両袖の机がある。

「お茶でも淹れるからソファに座っててね」

「あつ、はい」

俺が座るとまどかさんは奥の給湯室に入った。殺風景な事務所で何の仕事をしているのかちょっと気になる。突然、男の声が響いた。

「このガキは、何だ？」

いつの間にか黒のシルクスーツを着た男がいた。ネクタイも黒色だ。ボサボサの髪にサングラスを掛けていて表情が見えないが何かデンジャラスな雰囲気だ。ズカズカと歩いて俺の反対側に座ると懷からタバコを咥えると顎をしゃくる。

「おい！！」

「は？」

「は、じゃねえよ！！ 火を付けんのがわかんねえのかよ！！ 最近のガキは、全部言わねえと理解出来ないのか！！ ったく」

虫の居所が悪いのか俺に悪態をつく。サングラスを外すと蛇のような鋭い目つきをしている。

あの浦木さんと同じ暴力的な雰囲気がある。

な、何だよこいつ……こ、怖いよ……

「駄目よ竜也、こんな子供相手にイラついて大人気無いわよ」

給湯室からまどかさんが戻って来て、竜也たつやと呼ぶ男をたしなめた。三人分のお茶が入った湯飲み茶碗をお盆を手にしている。

「チツ、こいつがウチのモンだったらヤキ入れてるトコだぞ！！」

「この子は、堅気の学生よ。アンタの若衆じゃない……」

「んな事分かってる。最近のクソガキは、甘やかされて躰がなつてねえ！！ ったくよう……」

何か恐ろしい単語が出てきて身震いする。こ、この事務所は、ヤバイ……！

苛立たしげに煙を天井に吹くと吸ってたタバコを灰皿に押し付けた。まどかさんは、男の横に座ると浦木さんの名刺を彼に渡した。

「確かにあいつのだ……おい、預かったブツがある筈だ。それを出せ」

ドスの効いた声だ。俺を値踏みするように睨む。

「はっはい、これです」

俺は、上着のポケットから茶封筒に入ったSSDを竜也に渡そうとしたが受け取らず、まどかさんが受け取った。

「まどか、それをパソコンに接続して確かめる」
「分かったわ」

まどかさんは、立ち上がって机の上にあるパソコンに接続する。

「お前が浦木と出会った経緯を教えろ」

俺は、震えそうな声で昨日の出来事を話すと竜也はしばらく無言だった。

「そうか、ブツは、奴らに奪われず、謝礼に目が眩んだお前さんが無事届けてくれたって言うわけか」

「……」

「中身は見たか？」

「気になって見ようと思いましたパスワードの設定があつて無理でした。あっあとコピーも出来なかったです」

俺は正直に話した。嘘をついてもすぐバレるからだ。

「そうだろうな。もし見たら無事には、済まないぜ」

俺が怯えたのが分かるのか竜也は、ニヤツと笑う。

この場から帰りたいよ……

「竜也！！ 例のファイルが出たわ！！」

「そうか、これであいつも無駄死になら無いわけだ……」

「あの、もしかして浦木さんは……」

「ああ、奴らに殺れたよ。ウチの中では、腕利きだったのにな……」
「もしかして浦木さんとは、友達だったとか……」

竜也がタバコを啜えると、俺は、すかさずマッチで火をつけた。

「ダチだ。出会った頃は、よく喧嘩ばかりしていたが……ってそんな事よりもだ。謝礼がまだだったな。まどか」
「用意してあるわ」

俺は緊張しながら厚い封筒を受け取った。

「確かに渡したから無くさないでね。後、この受領書にサインして、深町君の名前でいいわよ」

「まっ辞退しても構わんがな……ククク……」

緊張と興奮で俺は、竜也を無視して言われるままに受領書にサインした。

「オッケーこれでいいわ。本来は、浦木さんが受け取る筈だけど……遺志を継いだ君が受け取った……」

竜也さんは、俺を見て意味有り気な感じでニヤニヤしている。

「これで手続きは終わりだ。まどか、このガキを近くまで送ってやれや」

「分かったわ。行きましょう、深町君」

「はい」

立ち上がって事務所から出ようしたら竜也さんが呼び止めて俺に名刺をくれた。

「まあこれも……何か縁かもしれんが……ありえないとは思うが、困った事があつたら俺に相談しろや。じゃ、あばよ」

竜也さんは、振り向かず手を振って戻って行った。

「ごめんなさいね深町君。竜也の性格と口の悪さは、昔からなんで気にしないでね」

「いえ、気にしてませんから……」

俺は、もう二度と会わないから気にしていない。それに『懐が熱い』からだ。ビルを出てから路地に向かう。さっきの悪趣味ケバ女は、いない。

「あれでもあいつは、面倒見が良くて、この街の住人から慕われているのよ」

「へえ、そうなんですか？ そんな風に見えないですが……」

「竜也が君に、名刺を渡したのもそうなのよ。でも一般人には滅多に渡さないわ」

男のツンデレなんですかね。あんまりよく分かりたくないです。

来た道とは違い、飾り窓の多い路地を歩く。人影は無いけど視線を感じるのは、気のせいなのかな？ やがて10メートル前方に大通りが見えてきた。

「ここまでくればすぐ大通りに出るから。じゃ、元気でね」

「はい、有り難うございます。如月さんもお仕事頑張って下さい」

俺は、頭を下げて礼をすると、まどかさんはにっこり笑う。大通りに出て振り向くと彼女の姿は見えなかった。

しかし信じられない、まるで夢を見てるみたいだ……

時計を見ると10時を過ぎていた。あれからそんなに時間が過ぎていない。夢みただけと二人の名刺と謝礼が入った封筒があるので夢では無い。

落とすとヤバイので歌舞伎町にある銀行に向かう。人に見られない様にしてATM自分の口座に預け入れをして残高を確認すると二ヤつく。

金額は597、500円を表示している。元の残高は、97、500円だったから浦木さんが受け取る謝礼は、500、000円だ。普通の高校生が簡単に手にする金額では無い。あの時、浦木さんの頼みを断っていたら手にしていなかったし。まどかさん達と会わなかっただろう。偶然とは恐ろしい。

人助けってのは、いいモンだよなって……あいつは、黒井？

浮かれ気分で人混みの中を新宿駅に向かう途中で、黒いセーラー服姿の黒井日菜子が歩いていた。

とっさに店の影に隠れたが黒井は、俺の方を見たが、気がつかず歌舞伎町に向かった。

あいつも学校サボっているのかよって、俺も人の事言えねえよな

……

黒井の姿を見失ったので再び、駅へ向かう。

倉橋と武原と合流するまで、時間は充分ある。さてどうしようか？

第4話 囃

最初は秋葉原に寄る予定だったけど、如月商会での件が強烈な為、とてもそんな気分にならない。

まだ時間があるが早めに行つてのんびりと待つつもりだ。ネロンガは、東側出口駅ビルの2階にある。平日の午後、利用しているのは仕事をサボっているサラリーマンか後は大学生くらいだ。今日は個室でなくテーブル卓に座つて2人を待つ事にした。とりあえず2人に、先に着いた事をメールした。ゲーム雑誌を読んでいるとCOMPにメールの着信マークが表示されている。

ヘッドバイザーをしていなかったたので今まで気がつかなかった。

メールが一件届いていた。

送信者はSteven、俺の知らないハンドルネームだ。

件名を見ると『悪魔召喚プログラム』なんだこりゃ？

深町涼太君へ、最新版の悪魔召喚プログラムを送らせてもらった。これを有効活用して生き延びて欲しい。使い方は、テキストファイルを参照の事。

圧縮ファイルが添付されていた。名前からして怪しさ大爆発だが、もしウィルスだとしたら、わざとこんな名前は付けないだろう。ホラーゲームのタイトルにも見えるけど、こんな名前のゲームは知らない。

COMPのセキュリティは堅固だが念の為、ウィルスチェックに掛けたが異常は無い。

とりあえず解凍するとインストーラーが起動し、ディレクトリの設定とファイルを作成、インストールが完了した。画面に悪魔召喚プログラムのアイコン、DDSが表示されていた。

こいつをクリックすると起動するのだが怖くて出来ないよ。何か取り返しのつかない事になりそうだ。DDS-NETにログインして検索したが見当たらない。サイバーズ社の公式サイトやググったりアタツたりしたが出て来ない。あとAT-LOWさんとレッドマンさんにメールをしてみる、もしかしたら何か知っているかもしれない。

悪魔召喚儀式……ファンタジー小説やホラーゲームではおなじみだ。祭壇と生贄を用意して床に魔法陣を描き、悪魔を呼び出し使役する。もし制御に失敗すると悪魔に殺されるか魂を奪われる……背徳的な儀式で人の道を外れた悪魔崇拝者が悪しき魔女が行なうと言われる。

テキストを読んでいると入り口に倉橋と武原が見えたので手を上げると、2人は俺に気づいた。

「よお、お待たせ」

「早くから待ってたみたいだ、な」

「いやいや、コミック読んでたら時間なんてすぐだよ」

揃ったので俺達はネロンガから出た。

「先にゲーセンに行こうか？」

「ああ、バイオマスターをやってから深町の家に行こうぜ、な倉橋？」

「オッケー、昨日プレイしたが凄いぜ」

「あれは、ヤッバイぞ」

俺達は歩きながら学校での出来事やゲーム、アニメの話をする。

「ところで深町、今日何でサボったんだ？」

「そうそう、お前が休むなんて珍しいからな。メール見て驚いたぜ」

2人が言うが、まあ当然だよな。俺は少し脚色して説明する。

「へえ、そうだったんだ。俺達に言ってくれりや付き合っただったのに。なあ、倉橋」

武原が言つと倉橋も。

「タケの言つとおりだよ。しかし謝礼の為に休むなんて大胆だな……
…てつきり『病院』に行くのかと思つたぜ」

「もし三人で休んだら『あいつら絶対に怪しい』ってなるじゃないか」

「まあ、そりゃそうだけどよ……」

「じゃあ、今の深町クンは懐が暖かいつてワケですね。よく分かります」

目をキラーンと光らせた武原がニヤニヤする。俺は肩をすくめた。

「分かつたよ。ゲーセンで二人に全額奢るってば！！ それでいいよな？」

「さすが深町クンは、気前がいいですね」

「よっ！！ 憎いねえ大統領！！ 俺達に出来ない事を平然とやってのける。そこに痺れるう！！ 憧れるう！！」

茶化すなよ、ゲーム代なんてまあ安いモンだ……全く。

ゲームセンター内は、学校帰りの生徒で混んでいた。三人分のカップ麺を買ってお湯を入れると、お目当ての台に座り食べ始める。これが俺達3人の日課みたいなもんだ。

バイオマスターを夢中でやっている、倉橋が何か思い出したのか俺を見る。

「あっそつだ、今日帰る途中、佐藤が言っただけで校門で変な奴に声を掛けられたんだってさ……」

「佐藤が？」

プレイしながら訊く。佐藤は、同じクラスだがあまり親しくない。チラッと見ると倉橋が何か言い難そうな顔をしている。

「この学校に深町涼太が在籍しているか？　って訊かれたらしい」

「えっ？　アツーーーー！！」

うつかりミスってゲームオーバーだ。

「で、佐藤は『あいつは今日休んでる』って言ったな」

俺は一瞬背筋が寒くなった。倉橋と武原は顔を見合わせる。

「まさかと思うが、昨日の件かもしれない……だってそれしか心当たりが無いよ……」

「そうだとすりゃお前、ヤバイ事件に巻き込まれたんだぞ！！ど、どーすんだ？」

「こりゃマジヤバだぜ！！」

ポケットから携帯を出して自宅へ電話した。直ぐにお袋が出た。

「はい、深町です」

「もしもし俺だけど」

「あっ涼ちゃんなのっ！！　ちようど電話しようと思ったのよ！！」

「もしかして誰かが俺を訪ねて来たとか？」

「そっそうなのよ！！ 2人の刑事さんが来て、事故の件でお前に訊きたい事があるって言うのよ！！」

お袋は、ひどく興奮しているが事故と言われりや無理もない。倉橋と武原は、無言で見ている。

「息子は、学校に行ってまだ帰って来ませんって答えると出て行っ
たわ」

「で、あと何か言ってた？」

俺の鼓動が激しくなる。ヤバッ！！ 学校サボったのがバレちま
う。

「特に話して無いわ。それより事故ってどういう事なの？ 説明し
なさい！！」

「帰ったらするよ」

何か言っているお袋を無視して電話を切った。

「で、おばさん何だって？」

「二人の刑事が来たってさ……」

「それってゲキヤバじゃね？」

「そうだ、ニュースを見ようよ」

携帯を操作してニュースのサイトを見るが殺人事件の項目には、
浦木さんの名前は出ていない。

「じゃ、事故の項目は？」

武原がアドバイスする。事故の項目を検索するとビンゴだ。

「多摩川下流で泥酔した男性の遺体を発見……本日、午前7時頃通学途中の生徒が発見し通報。身分証からフリーライターの浦木浩一さん31歳と判明……遺体から大量のアルコール分が検出され、玉川警察署は急性アルコール中毒が原因で川に転落と発表……こここの人だよ」

「間違いないだろうな？」

すっかり俺達は、ドン引きだ。

「もし事故で処理されていたら、わざわざ刑事が家に来ないよ」
「そーだよな。じゃあ、お前んちに來た奴は、偽刑事ってか？」

倉橋は、誰かと携帯で話中だ。

『そうか、分かったよ。サンキュー』

電話を切って俺と武原を見た。

「佐藤に確認したんだが、やっぱ2人組の男で刑事って言ってたよ。警察手帳も見せてくれたって。人相と服装は、黒いスーツにサングラスだとさ……」

「とんでも無い事に巻き込まれたよなあ……で、これからどーすんだ？」

「そ、そーだよな……」

サスペンスドラマならワクワクするけど実際、自分の身に起きたら怖い。俺は如月商会で貰った二人の名刺を思い出して会社に電話した。

「クソッ留守電になってやがる　!!」

次は、竜也さんの携帯にするがこつちも留守電だよ、畜生　!!
焦りながらまどかさんの携帯に電話するが呼び出し音が響くが
出してくれない。頼むから出てくれよ!!と祈りながらリダイヤルする。

『はい、如月です』

三度目のリダイヤルで出てくれた。この時、まどかさんの声が天
使の声に思えたよ。

『もしもし、深町です!!』

『あら、深町君どうしたの?』

『あの実は、困った事になって助けてほしいのですが……』

事情を話してる最中、まどかさんは無言で訊いてる。走行音が
するから車で移動中らしい。2人は、成り行きを見ていた。

『——と言うワケなんです!!』

『事情は分かったわ。折り返し連絡するから待ってて』

『お願いします!!』

電話を切った。ふうつと一息ついた。

「「どうだった?」」

「折り返し連絡するってさ。自販機でジュースを買ってくるよ……」

「俺、コーラ」

「タケがコーラなら俺は、アイスコーヒー」

「オッケー把握した」

入り口脇の自販機で買うと二人に渡して飲む。しばらくして着信音が響いた。

『もしもし、深町です！！』

『竜也と話したのだけど、あいつが言うには、己の尻は、己で拭け
つて……』

『……』

『浦木さんの件も謝礼を渡して終わってるから、あのガキがどうなる
うと知ったことかって言うのよ。ごめんなさいね』

『……』

『もしもし深町君、聞いてるの？』

『はい』

絶望で言い返せないよ。

『だけど私達に協力してくれれば助けてやろうと言うけど、どうす
る？』

どうするって言うけど他に選択肢は無い。

『協力しますので、どうすれば？』

『今、どこから電話しているの？』

『用賀駅前のゲーセン、アバドンからです』

『今、車で環七通りを目黒方面に走っているから上馬で国道246
号に入って用賀に向かうわ。そこから動かないで』

『はい待ってます！！』

外を見ると日が暮れていた。3人で新型の台を占領していたので
他の客が睨んでいる。とりあえず俺達は別の台に移動する。本当に

時間が経つのが遅い。

しばらくしてからゲームセンターの入り口にまどかさんの姿が見えたので、俺達が駆け寄ると彼女は苦笑した。

「また会うとは、思わなかったわ。その2人は？」

「俺の友達です」

「倉橋です」

「武原です。タケって呼んで下さい」

まどかさんの美貌に2人は、緊張している。

「貴方達は、すぐ帰りなさい」

一瞬、2人は顔を見合わせたが猛然と抗議する。

「そんなっ！！俺達だって協力するよ！！」

「ふざけんな！！深町だけ置いて帰れないツスよ！！」

「貴方達は、部外者だから巻き込む訳にはいかないのよ。深町君は無事に帰すから私を信じて！！」

「俺、怖いけど、まどかさんを信用するから頼む！！なっこの通りだ」

俺が拜むように言うと2人は、完全では無いが分かってくれたみたいだ……

「お前がそこまで言うなら帰るよ……」

「如月さんだっけ？深町になんかあったら絶対に許さないからな！！」

「分かってるわ」

「解決したら必ずメールするから心配しないでくれ!!」

2人は、手を振って帰った。

「深町君は、良い友達を持っているのね」

「ええ、まあ、そう言われると恥ずかしいです。それで俺は、どうすれば？」

「彼等みたいな友達は大切にしなさいよ」

これからの事を訊く。俺の命が掛かっているからだ。

「とりあえず家に帰ってもらうわ」

「それだと2人の刑事に捕まっちゃうのでは？」

「そうよ」

「もしかして俺が囮になるんですか？」

急に不安になる。

まだかさんの話によると例のSSDのデータを手に入れた事を、奴らは気づいていないらしい。

それで彼らは捕らえた浦木さんの記憶から俺の存在を発見して探していたらしい。

ちなみに警察は事故と発表してどこの部署も動いていない。

2人の刑事は偽者で本物は、すでに処分されているから恐ろしい話だ。

作戦は俺を囮にして連中の活動拠点を壊滅する。無謀に思えるが、奴らは一般人を見下しているから成功率はかなり高いと言われても不安は拭えない。

まだかさんは、俺に家族への説明の方法を教えてくださいと、超小型の高性能発信機を俺の靴底にセットした。これで俺を見失わない。それとSSDが入った茶封筒を持たされた。データーの中に凶悪な

ウィルスが入っているとの事だ。

ゲームセンターを出て家に向かうが憂鬱な気持ちで足が重く現実逃避したい。

予想通り、家のすぐ近くにいた2人の男が俺を見ている。ここで逃げる訳にはいけない、震えを抑えるように歩くと男達を見た。2人ともスーツの上にコートを着て黒のサングラスを掛けていて、個性を消した無機質な雰囲気漂う。

「深町涼太君だね」

「そうですか？」

男の口調は有無を言わせぬ強さがある。警察手帳を提示するが本物が偽物の区別は俺には分からない。

「我々は、玉川署公安課の者だ。浦木浩一の件で同行してもらいたい」

「ちょっと待ってください。あの人は、事故で亡くなったのでは？」
「刑事課では事故処理になったが、我々公安課では、極秘のチームを結成し、浦木が悪魔崇拝者の重要メンバーである情報を掴み、その背後関係を捜査しているのだ」

「彼を尾行中、君と出会って、我々に奪われまいと重要な証拠を渡している筈だ」

悪魔崇拝者の話は嘘だ。まどかさんや竜也さんと話を聞いていなかったら信じていただろう。逆らうと立場が悪くなるので黙っていた。

「分かりました。親に事情を話すので少し待って貰えないでしょうか？」

相手を怒らせないようにかなり丁寧に話すと2人は、顔を見合わせる。

「いいだろう。10分だけ待ってやる。もし遅れたら遠慮無く踏み込むからな」

「りよ、了解です」

開放されて家に入る。

「ただいま」

「説明しなさい！！ いったいどういことなの！？」

お袋は、かなり興奮している。突然、刑事が家に来たので無理は無い。俺は、まどかさんに言われたとおりに説明したら納得してくれた。

「そうだったの……お母さんビックリしてどうしようかとオロオロしていたのよ……良かったわ、お前が事故と無関係で……もし巻き込まれたのかと思うと……」

お袋の涙声はこっちがとても辛いよ。

「これから警察署に行って話をすれば終わりだから大丈夫だよ」

「刑事さんにちゃんと話すのよ」

「ああ、帰りは遅くなるけど警察に送ってもらえるから心配しないで」

これから俺の勝負だ。自分の部屋に入ってバッグを置いたが着替える時間は無い。COMPを持っていくか迷う。一般人は見下し

ているから身体検査されて取り上げられる可能性は少ないと言うが

……

？もしかして取られると困るので持っていけない。

？悪魔召喚プログラムが俺を助けてくれるかも一応持っていく。

家を出ると男達に連れられ、用意してあった黒い国産のセダン車に乗り込む。運転席は別の男が待機していた。俺達3人が後部座席に座ると動き出した。外を見ていると玉川警察署とは、別方向に走っている。

「警察署と反対方向みたいですが……」

男達は無言だ。重苦しい雰囲気には窒息しそうだ。

まどかさん達は、発信機で俺達を追っている……心配無い

自分に言い聞かせる。突然、視界が真っ暗になった。

「えっ！！」

突然、俺は目隠しされ動揺する。

「着くまでの辛抱だ」

落ち着け！！ 涼太。まどかさん達を信じろ！！

どこをどう走ったのか分からないが目的地に着いたらしい。
車から降りると目隠しを外され、周囲を見ると4階建てのビルが密集している。一瞬団地かと思ったが違う。人の気配は無い。

どっかの工場が研究施設にも見えるな。

男達に挟まれて建物の中に入る。中は、暗く非常灯が寂しく点灯していた。

エレベーターに乗ると地下三階に降りて通路を歩く、ドアが開いて明かりが漏れている部屋に入ると照明が眩しい。部屋は以外に広く電子機器特有の匂いが漂う。

どうやら電算室かサーバー室みたいだ。奥の壁際にコンソールデスクがあり、1人の男が座って俺達を見ている。服装は黒いスーツを着てサングラスを掛けている。

「ようこそ、深町涼太君。わたしは山田一郎と申します。君に来てもらったのは、浦木氏が我々から奪ったSSDを返して貰いたいのですよ」

「……」

「それと彼が君に何を話したのかわたしに直接教えてほしい。簡単ですよ」

人を小馬鹿にした口調で何かムカつく。俺は、無言で茶封筒に入ったSSDを渡した。山田はデスクの上にあるパソコンに接続した。

「確かに本物ですね」

「ここは、どこですか？」

時間稼ぎの為尋ねる。

「わたし達の活動拠点の一つですよ。計画が始動したので近日中に引き払う予定ですが、君も家に帰りたいなら我々の事は詮索しない事。浦木の二の舞になりたいですか？」

俺は首を横に振る。山田はサングラスを外すと満面の笑みを浮かべた。一見すると大手の銀行員に見えるけど目つきが何かキモい。

「そうでしょう。わたしは紳士なので物事を穏便に済ませられるのなら手荒な真似はしない。君は、前途ある学生だ。こんな場所で命を失いたく無い、そうですね？」

俺は首を縦に振る。そして出会った時の経緯を山田に話す。

「なるほど、彼のバックに如月商会が動いていたんですね。小賢しい、如月ごときが我が組織に抵抗しても所詮、螳螂の斧。無駄、無駄なのですよ。ククク……」

「それでは君の意識を読ませてもらいますよ。大丈夫、痛くないですから……」

山田は右手の手袋を外した。それを見て悲鳴をあげてしまった。

人間の手では無い。奇形なのか鱗に覆われた三本指の鋭い鍵爪だ。思わず逃げようとするが二人の刑事に腕を押さえられ動けない。山田は嗜虐心で満ち溢れた笑みで近づく。

「ククク、この手が怖いですか。いいですねえ、その怯えた表情……君はわたしの好みですよ。ウィッグを被らせて化粧をさせれば素敵な女性になる。そしてわたしがベッドで激しく攻め立てて男の快楽を教える……うふふ、ゾクゾクしますねえ」

おぞましさに鳥肌が立った。こっこいつ最低最悪の変態野郎だ、吐き気こみ上げて来る。

「わたしはね、女装させた可愛い男の子が必死に抵抗して、屈服させるのが趣味なのですよ、そして自分から腰を振ってわたしのモノ

にしゃぶりつく過程がもう！！たまらない〜さあ……」
「いやっ！！ 嫌だあ！！」

どこかで爆発音が響いた。

第5話 仲魔

爆発音が響くと同時に、周囲が闇に包まれた。

「何事ですか？」

「山田様！！ 発電室が爆破されました！！」

「キサラギの一味が侵入して見張りが殺^{やら}れています！！」

走りまわる足音と銃声が響く。これは逃^{チャンス}げる機会だ。

「落ち着きなさい。予備発電に切り替え、封じていた『悪魔』どもを放ちなさい」

リーダーらしく山田は、冷静に指示を与える。俺を押さえていた男は指示を受けたのかいない。腰を屈めてゆっくりと部屋の外に歩く。今度捕まったら、殺されるか人質にされてしまう。息を押し殺してドアに向かう。暗闇だが出口の方向は大体分かる。

「山田様！！ 子供がいません！！」

「あのガキ、始末しましょう！！」

「まだこの近くにいますはずです」

男達は慌てているが山田の声は冷静だ。

「子供は放っておきなさい。異界化させたのでこの建物からは逃げられせんよ。それにこの暗闇で身動きが取れないでしょう、それより侵入した彼らを歓迎するのが先です。小林君と木村君はわたしと一緒に来なさい」

「はっ！！」

どうやら俺の事は後回しらしい。これで生き残る可能性が増えた。後はまどかさん達に合流すれば一安心だ。通路に出たのはいいけどエレベーターは動かないだろうし、この暗闇では階段を探すのが難しい。

「あつそうだ、COMPがあるじゃないか」

こんな事もあるうかと思って持って来たが正解だよ。上着のポケットからヘッドバイザーを取り出して被ると起動させた。索敵・暗視モードを起動させると暗闇の視界から周辺が見える。このCOMPは便利な機能があつて助かる。もしかして通話も出来るかなと、まどかさんに連絡する。

「嘘!!マジつながつたよ」

『もしもし!! 深町君なの?』

圏外になるのが常識だから、まどかさんもビックリしているよ。

『深町です。暗くなつてすぐ逃げたんです』

『よかったわ。発信機で君の位置は把握できるから、その場から動かないでね』

『そうですけど、いつあいつらが追つて来るかも知れないですよ?』

『隠れていればオッケー、むしろ動く方が危険よ』

『何で?』

『エネミーソナーがピンピンに反応するの、無闇に歩き回ると悪魔と遭遇するわよ』

『あつ悪魔つて!!あの』

昨日、浦木さんが戦った餓鬼を思い出した。

『餓鬼みたいなのですか？』

『あんなのは雑魚よ。もしかしたらもつと強いのが出てくるわよ』

『マジで脅かさないでくださいよ』

もう足と背中が震えているよ。

『だから動かないでね、って言うのよ！！』

ブチッと通話が切れてしまった。念の為、自宅へ電話しようとするが圏外の表示が現れている。目の前が暗闇と静寂に包まれて不気味だ。時々、銃声と叫び声がかすかに聞こえる。

こ、怖いよ……暗闇がこんなに怖いなんて……助けて姉ちゃん……

通路に座り込み膝を抱え半泣きで、いない姉を呼ぶ。

涼ちゃん、諦めて泣いたら、恐ろしい魔物が涼ちゃんを魔界に連れて行っちゃうから泣かないで、ねっ私の可愛い弟、愛しているわ

美人で清楚で優しく、でも怒らせると恐ろしい姉。あの事故で俺なんかを庇って命を失った。

涼ちゃんをいじめる奴は、絶対に許さない……それが神や悪魔なら私は戦う。だからお姉ちゃんだけを見て、お姉ちゃんから絶対に離れないで、いつも傍にいるから……

独占欲が強くちよっとヤンデレ気味だった姉。涙を袖で拭くと立ち上がる。

「そうだよな泣いても解決しないよな。こんな時は武器になる物を探さない」と

RPGゲームだとダンジョン内に宝箱が置いてあって、武器やアイテムが手に入るが現実には甘くない。他の部屋はドアにロックが掛かっていて入れない。銃声は聞こえないが獣のような咆哮が響く。震える両足で、ゆっくり歩くと階段が見える。

「うわああ!!」

突然、目の前に餓鬼が1体現れた。俺は腰が抜けて動けない。気のせいか股間が湿っぽい。

餓鬼は襲い掛かって来るかと思ったが俺に近づくと匂いを嗅いでいる。

「ウゲゲ、オ、マエシ、ノニオ、イオレク、エナイ」

獣が人語で話しているみたいだ。地獄で最も貪欲な餓鬼に食えないって言われるのは、何か複雑な気分だよ。餓鬼は俺の周りをヒョコヒョコと、うろついているが動きを止め、光る目で俺を見ている。

「ウガオ、レナ、カマ。オ、マエフ、シギヤツ、ドウル、イイ?」

襲う気が無いのは分かるけど、はっきり言ってくれないと分からないよ。

何と無く、俺、仲間、お前、不思議な奴、同類?でおK?

選択肢

?俺とお前は同期の桜だ!!

？あっち行け！！

？を選ばと餓鬼は嬉しそうにはしゃいでいる。

「オレ、ガキ、ツヨイ、オレ、サイキョウ、コンゴ、トモヨロシク」

餓鬼は光の粒子になって俺のCOMPに吸い込まれた。ど、どうなっているの教えてよ！！

ヘッドバイザーに表示されている悪魔召喚プログラムのアイコンが点滅している。とりあえずクリックする。

『悪魔召喚プログラムを起動します』

艶のある女性の音声が耳に優しく響く。

メニューリスト

1・仲魔リスト 2・召喚 3・帰還 4・削除 5・リカバリ

↓ 6・悪魔全書（使用不可）

ヘッドバイザーの左上に、月齢時計が表示されていて今は新月らしい。それと周辺のマップも映し出されて便利だ。右上にマツカとマグネタイトの数量が表示されている。

マツカは現在0マツカでマグネタイトは残り100か。でもマツカとマグネタイトって何だろう？

仲魔リストをクリックすると一覧が表示された。1から12まで番号が振ってあり、さっきの餓鬼は1番目だ。12番目に読めない名前が出ている。

悪霊って何かヤバそうだけど赤字で表示されているから無理なのかな？

階段を上がった時、また餓鬼が現れた。今度は3体も出たよ。

「なっ何か用か？こつちには、お、お前らの仲間がいるんだぞ！！」

どもりながら言うと、餓鬼達は俺を見つめている。

「ウガガナカ、マイル、ダイジ、スル、コ、レヤル」

餓鬼から小さい石を一つ貰った。

「マ、セキ、オレノタ、カラ、ナカ、マヨロシク」

餓鬼達は消えた。どうやら同じ仲間がいると見逃してくれるらしい。これなら餓鬼が現れても大丈夫だよ。さらに上がって地下1階にきたが、階段はここで終わりだ。ここから通路を歩いて別の階段を探すしかない。この階のドアもロックされている。前方に人影が現れた。

「ヤバ！！ 隠れなきゃ！！」

金髪のロングヘアで派手な女の人だ。身体にピッタリした丈の短いピンク色のワンピースを着て、鎖みたいなベルトを腰に巻いている。年齢は20代くらいでまどかさんの仲間かもしれない。

「まどかさんの仲間の方ですか？」

「まどか？ 知らないわ、そんな子。それよりアタシにイートさせてよ」

身体をクネらせて歩く姿が何か不自然に見える。彼女の顔はモデルみたいにかわいいが顔色が悪い。

「まつまさか!!」

「そのま・さ・か・よ美味しそうなボーヤ」

逃げようとした俺の腕を掴むがヒンヤリする。

「久しぶりの獲物だから絶対に逃がさないワケ」

獲物を手に入れて舌なめずりしたが俺の匂いを嗅ぐと顔をしかめた。

「なつなに、この子？ 食べられない」

女ゾンビにまでに言われるとかなりショックだよ。そつと逃げようとしたが腕を放してくれない。

「もしかしてアンタ、屍鬼じゃなさそうだし……もしかしてデビルサマナーなワケ？」

「デビルサマナーって何ですか？」

「何って？ 悪魔召喚師の事なワケ。アンタが持っているCOMPを使ってアタシらみたいな悪魔と会話したり召喚して、使役するんじゃない。そんな事も知らないでここをうろついてるなんて、アンタよっぽど度胸あるのか馬鹿じゃないの？」

良く見ると映画のゾンビみたいに、グロくないのと話が通じそうなので事情を説明した。

「へえー、あのオッサンから逃げて、ガキを仲魔にしたって言うワケ？ 食い意地張ったガキを仲魔にするなんて……アンタ！！ ちょー気に入ったワケ！！」

俺の背中をバシバシ叩かないでよ。もう俺、身体弱いんだから。

「じゃあこのナオミ様がつて……アンタつて名前は？」

「深町涼太です」

「いい名前ね、『悪魔召喚プログラム』についてレクチャーするけど、アンタ宝玉か魔石は持っていないの？」

宝玉は知らないけど魔石は餓鬼に貰ったこれの事だろうと思って1個ナオミに渡した。

「サンキュー！！悪魔召喚プログラムについてレクチャーするわよ」

悪魔召喚プログラム。

文字通り、悪魔を召喚するためのプログラムである。

1986年、東京の吉祥寺にある十聖高校へ通う中島朱実が開発した。彼はコンピュータープログラマーおよび魔術師としての天賦の才に恵まれていたが、悪魔を召喚して大事件を起こしその後行方不明になる。後にSTEVENと名乗る人物が改良したプログラムをDD S - N E Tに流して今に至る。

悪魔召喚の儀式は、祭壇の設置や生贄の手配、月齢の調整、魔法陣の作成にと事前準備に手間がかかる。

召喚するには経験豊富な知識と強靱な精神力が必要とされ、複雑かつ高度な手順を要求されるが、悪魔召喚プログラムは、コンピュータ上で儀式をシミュレートすることによって、迅速かつ気軽に召喚を可能としている。

また、悪魔の言語を人間の言語に変換したり、契約時に行うべ

き対価の支払いの自動化などの機能を有していて、魔術的な素養が乏しくても悪魔の召喚が行えるようになっていた。

特に言語変換は、交渉時に魔法陣や精神感应を使わずに済む為、悪魔からの精神汚染の危険を著しく下げると言われている。

プログラムがインストールされているCOMPを扱う者はデビルサマナー（悪魔召喚師）と呼ばれている。召喚した悪魔そのものを制御できるかどうかは召喚者の力量にかかっている為、それだけの力がない者が扱うのは大変危険である。

テキスト見ながらのレクチャー乙ですナオミさん。ファンタジー世界の召喚師が知ったら噴飯ものの超便利プログラムなんですね、非常によく解りました。

「アタシってチョー物知りでしょ！！ 次は涼太くんが持っているCOMPについてだね」

悪魔召喚プログラムを内蔵したコンピューターの事。アームターミナル型が主流中には銃型、傘型、メリケンサック型、聖書型などある。最近では携帯電話機が携帯ゲーム機型が主流になっている。主な機能として。

- 01・拡張メモリー用スロット搭載
- 02・全周波数対応の衛星通信・傍受機能
- 03・索敵・暗視モードシステム
- 04・マグネタイト・バッテリー・システム
- 05・オート・ナビゲーション・システム
- 06・エネミーソナー
- 07・ステータス・チェッカー

- 08・悪魔会話システム（DCS）
- 09・悪魔識別システム（DAS）
- 10・悪魔召喚プログラム（DDS）

「と言うわけで現代の悪魔召喚師はハイテク・デビルサマナーかも知れないけど、COMPがないとただの人になっちゃうから絶対に壊したり無くしちゃだめなワケ」

「マツカとマグネタイトって言うのは何？」

「それ知らないと悪魔達からバカにされるから覚えてね。魔貨^{マツカ}とは魔界の宰相、ルキフゲ・ロフォカレ様が鑄造した悪魔通貨の事。世界の富の管理を、永遠に偉大なるあの御方より任されているメツチヤ偉い悪魔なワケ」

おいおい、なんか凄い名前が出てきたよ。

「マグネタイトはアタシらが、人間界で実体化するのに必要な生体エネルギーの事よ。通常、悪魔達は霊的な存在で肉体を持っていない。当然、実体化している間はマグネタイトを消費し、悪魔の位が高い程、高品質で莫大な量が必要なワケ。

人間の身体に含れ、まれに多く持っている人は悪魔達の標的よ。それと召喚中は消費し続けるからサマナー達は、契約した仲間の悪魔『仲魔』の為、マグネタイトを確保するのに苦労しているワケ」
「なるほど、もしマグネタイトが無くなったらどうなるの？」

「無いと悪魔を召喚できないし、実体化している最中だったら身体の維持が出来なくなって最後に消滅しちゃうワケ」

「手に入れる方法は？」

「マツカに余裕があれば専門店で買うのがベストだけどね。悪魔と交渉して分けてもらうか、倒して奪うしかないワケ」

ナオミはニヤニヤ笑う。

「一番簡単なのは人間を殺して手に入れるワケ。マグネタイトは死亡と同時にその体から失われていく為、殺して食うよりも生きたまま食らう方が摂取量は多く、効率よく摂取する為、より多くのマグネタイトを含む存在、即ち人間を食うことになる。ダークサマナーなら当たり前にやっているワケ」

「そんな事したら殺人と死体遺棄で指名手配になんじゃないか。それだけは絶対ダメだ!!」

「食べ残すとマズイけど骨までマルカジリすればオツケーよ」

「それでも却下!!」

俺は外道呼ばわりされたくないよ。

「涼太くんは、まじめそうだから、マッ力を貯めて買うか、他の悪魔から分けてもらうしかないわよ。ま、他の種族がどーなろうとアタシの知ったこっちゃないってワケ。はあ、話すの疲れたあ」

これだけ話すゾンビは、映画にもいないよ。これで顔色が良ければエロくてかわいいんだけどなー

「とにかく話を聞いてくれてありがとうなワケ。他に分からない事があつたらググッてちょうだい。アタシの話に付き合ってくれたお礼に、涼太くんの仲魔になつてあ・げ・る」

「マジすか？」

仲魔が増えるのは心強い。ナオミは妖しい笑みを浮かべた。

「アタシらダーク系悪魔は人間の言う事なんて聞く耳持たないからね。でも涼太くんは特別なワケ」

「ダーク系って？ 悪魔は皆、そうじゃないの？」

「悪魔にも属性があつてライト・ニュートラル・ダークに分かれているけど、アタシら屍鬼や幽鬼のガキの他、外道、悪霊、怪異、妖獣、妖樹、邪鬼、凶鳥がいるワケ」

「そんなにいるんだ。でも俺が特別つて？」

「何ていうのか、親近感で胸がキュンとするワケ。それに死の匂いがあるから食べる気にならないワケ」

「アタシは屍鬼ボディコニアンの『ナオミ』。これから一緒に頑張ろうね！！」

ナオミは光の粒子になつて消えた。

これで二体目が仲魔になつた。さらに進むと前方に餓鬼が2体、背後に3体のボディコニアンが現れ、普通なら絶体絶命だが、今度は落ちていてショートヘアの彼女に話しかけた。

「へええ、あのナオミが人間の男と一緒になんて、アンタやるわねえ」

「でもこの子、チョーカワイイから羨ましいよ」

「三人でバリバリ食べるつもりだったけど、ナオミの男だから見逃して上げようよ？」

「そーだね。この子どうせ食べれないし」

話に参加出来ない餓鬼達は俺達の周りをうろついている。彼女達から魔石を2個手に入れた。

他の部屋に入れないかとドアノブに手を掛けるがロックされている。ゆっくり歩いていると十字路が見えてきた。右に曲がろうとしたら背後から肩を捕まれた。

「うひゃ！！ 助けて！！」

「こらっ！！ 動くなつて言ったでしょ！！」

振り向くとまどかさんが俺を睨んでいる。強行軍だったのか自慢のスーツはヨレヨレになっていた。

「君が動き回るから大変だったのよ。おまけに悪魔が徘徊しているから地下3階まで降りて上がるのは疲れたわ」

「すみません」

「まあ仕方ないわ。でも、丸腰なのに良く無事だったわね？」

俺はここに連れて来られてからの事を話すと、まどかさんは驚いたような呆れた目で見してくれる。

「君って子は、サマナーの素質があるわよ。屍鬼と幽鬼はひねくれていて会話じゃ絶対に仲魔にならないから、ビギナーズラックだとしても凄いわ」

「ははは……まどかさん達は何人で来たのですか？」

「私と竜也を合わせて10人よ、突入しようとしたら異界化して分断されたわ。入れたのは私と3人だけど1人は屍鬼の群れに襲われ、2人は山田に殺されたわ」

苦々しい顔で壁を叩く。途端に明かりがついて眩しい、瞬間に暗視モードがオフになった。

通路が明るくなつて雰囲気が変わった。

「どうやら電源が復旧したらしいですね？」

「ええ。しかし、ここの指揮官がダークサマナーの山田一郎とはね……あいつが、浦木さんを殺したのなら有り得るわ」

「そんなにあいつヤバイですか？」

「サマナーとしては一流だけど性格に問題あってね、猜疑心の強い変態サディストで殺し方が惨いのよ」

「うは」

あの嫌らしそうな台詞を思い出して吐き気がした。

「どの道、あいつを倒さないところから出られないわ」

「でつても他に黒スーツの男達がいるのでは？」

「私が全て始末したから残っているのは、ダークサマナーの山田だけよ。あいつは地下にあるサーバー室で、私達が来るのを待っている筈」

「私の武器はこの銃（グロック21）と予備マガジン2つ、破魔札に各種類のアイテム。深町君は？」

「俺ですか？ 魔石2個とCOMPだけです」

「COMPですって？ 見せてくれないかしら？」

まどかさんは羨ましそうに俺を見つめる。

「はあ、悪魔召喚プログラムを一般人の君がよく手に入れたわねえ。

あら、これはサイバーズ社の最新型よ！！ まさか！！」

「そのまさかです。当選したんですよ」

「君って本当に運がいいわねえ。で、仲魔は屍鬼と幽鬼に悪霊ってこれじゃダークサマナーよ」

話し合った結果、俺が会話で交渉して戦闘を回避するかアイテムを貰う。

エレベーターは壊されていて動かない。幸い俺の仲魔にした以外の悪魔は、現れないので順調に地下三階にあるサーバー室前に辿り着いた。

第6話 対決

まどかさんと俺は、サーバー室の前に辿り着いた。中から異様な妖気が漂ってくるのが、ド素人の俺でも分かるほどだ。

「さすがダークサマナーね。中に入ったら、あいつを倒すまで出られないわ。覚悟は出来ている？」

「は、はい大丈夫です。いよいよボス戦ですね」

不安そうな顔をしている俺に比べてまどかさんは、余裕の表情だ。おそらく数々の修羅場をくぐり抜けて来たに違いない。

「私の後ろでサポートを頼むわよ」

まどかさんは、ドアを足で蹴って開けて入ると俺も後から続いた。発電機が復旧したのでサーバー室は明るい。奥にあるコンソールデスクの前に山田一郎が腕を組んで立っている。

「お久しぶりですねえ、まどかさん。パートナーの竜也君は一緒にや無いのですか？」

「竜也がいなくても私だけで充分よ。今すぐ降伏して異界化を解けば半殺しで許してあげるわ」

「それは遠慮しますよ。そんな趣味は無いですからね」

二人は知り合いらしい。気楽に話しているみたいだけど、お互いのスキを窺っているみたいだ。

「おや、まどかさんの後ろに隠れているのは、涼太君じゃないですか？ わたしのモノになれば助けてあげよう。さ、早くこちらに来

なさい」

「ふ、ふざけんな！！ アンタみたいなド変態と一緒にいられるかよ！！」

山田は、深い溜息をついて肩をすくめる。

「やれやれ、わたしの崇高な嗜好が理解出来ないとは、君の為に用意したウィッグとドレスが無駄になってしまった。キツイお仕置きをしなければならぬわたしは悲しいよ」

「うわっ！！ やっぱこいつイカレテやがる！！」

「お喋りは飽きたからこちらから仕掛ける！！」

ホルスターからグロックを抜くと立て続けに発砲した。45口径の弾丸を食らえば即死、だが悪魔が現れて山田の盾になって防いだ。ボディコニアンは、大ダメージを受けて消滅した。

「相変わらずエゲツないやり口ね」

「褒め言葉として受け取りましょう。それでは彼らと遊んでもらいますよ」

隠れていたのか5体の悪魔が俺たちの背後に現れた。あらかじめ召喚していたみたいだ。

「餓鬼3体にボディコニアン2体、会話で説得出来ないますか？」

俺が小声で言うとう首を横に振る。

「サマナーに使役されている悪魔は無理よ」
「そんな」

まどかさんは懷からお札を取り出して構えた。

「破魔!!」

餓鬼の1体が光に包まれ消滅した。もう1体の餓鬼が鋭い爪を光らせ襲い掛かってきたが、紙一重で避けてお札を直接当てると餓鬼は絶叫を上げて消えた。

「如月特製の破魔札は一枚で二回攻撃出来るのよ」

「やりますねえ、彼女達を後回しにしたのは裏目に出たようですよ」

2体のボディコニアンは狂ったように高笑いすると、2体の悪魔を召喚した。1体は餓鬼。もう1体は赤黒い肌で頭に角が一本生え、口から鋭い牙を剥き出しにしている。凶悪な面構えで悪役レスラーみたいに筋骨逞しい巨漢だった。

右手に持っている棘のついた極太の金棒がとても凶悪だ。あれで殴られたら即死だよ。

「彼女達の高笑いは、わたしの仲魔をランダムで召喚するのですよ」
「うっ嘘だろ!! あれって昔話に出てくる鬼さんこちらの」

「そっ、妖鬼才ニよ。あいつには物理攻撃がほとんど効かない。ここで魔法は使いたくないけど……」

「ナオミを召喚して彼女のダンスで足止めます」

「頼むわ」

俺は悪魔召喚プログラムを起動させ屍鬼ボディコニアンのナオミを召喚した。

DEGITAL DEVIL SUMMON SYSTEM OK
MAG BATTERY OK

CONDITION OK
SUMMON OK
GO

召喚魔法陣が青白く輝き、ナオミが実体化した。

「はぁーい、おまたせって？ ……ゲッ！！ もしかして戦闘中なワケ？」

「それもボス戦よ、あなたのダンスでオニをメロメロにして！！」
「ふん！！ アンタの命令は聞かないよ」

ナオミが無視しているとオニが体当たりして来た。

「うわっ！！」「きゃあ！！」「あぐう」

俺とナオミは間一髪で避けたけど、まどかさんはモロに食らって壁に叩きつけられた。

「まどかさん！！」

まどかさんは、とっさに受身をとったが苦しそうだ。

「頼む！！ 得意のダンスでオニを魅了してくれっ！！」

「涼太クンの命令なら何でも聞くよ。はぁーいオニさんこちら！！」

ナオミのダンスを見るオニの表情が変化した。例えると鼻の下を伸ばした中年オヤジみたいだ。

「あいつらをやっちゃえ！！」

オニはフラフラして仲間のボディコニアンに近寄ると金棒で滅多打ちにしてから餓鬼を一撃で倒した。

「ほほう、彼がサマナーだったとはさすがのわたしも気づきませんでしたよ。しかもプライドの高いボディコニアンを仲魔にしていたとは……」

山田も驚いたみたいだ。

「おや、君がつけているのはヘッドバイザーみたいだが、そうかＣＯＭＰを持っているのか？ 君みたいなのが当選してたとは、チツ！！ やってくれましたね」

忌々しそつだが最後の言葉は俺以外に向けたらしい。

「アギラオ！！」

炎の塊が現れてオニに直撃すると絶叫を上げて倒れ、消滅した。残り１体のボディコニアンがステップを踏み出したが、まどかさんがグロックを発砲すると倒れた。

「ほほう、その銃の弾丸はもしかして」

「如月特製の神聖弾。ダーク系悪魔には絶大な威力を発揮するわ」
「もう、あんたには仲魔がないぞ」

山田は気味の悪い笑みを浮かべた。

「今までののは余興ですよ。これからが本番、逝きますよ」

携帯電話を懐から取出して操作すると青白く輝く召喚魔法陣が連

続して現れ悪魔を召喚した。

正面はオニ2体で、背後には初めて見る女性型悪魔が3体現れた。左側は白いレオタード姿に蝙蝠みたいな羽を持つ女悪魔でちよつと可愛い。中央に金髪で腰まで届くロングヘアの美人で胸元が大きく開いた黒のロングドレスを着て宙に浮いている。右側は上半身が裸で後ろ手に縛られ、下半身が巨大な芋虫の女悪魔。こいつはちよつとキモイよ。

「鬼女リヤナンシー、夜魔リリムに幽鬼オキクムシ……さすがダークサマナーってところかしら」

「マジやば！！ アタシより強いのはっかりなワケ！！」

ナオミも驚いている。すぐに仕掛けてくるかと思ったがこちらの出方を見ているようだ。

「あいつは楽に勝てると思ってるわね。誰に喧嘩を売ったのか教えてやらなくちゃ」

「長期戦になるとこつちがギリ貧になるわ。私が一気に5体を始末するから深町君とナオミは、あいつからCOMPを奪つか壊すのよ」
「そ、そんなの出来ないっスよ！！」

ケンカもまともにした事が無い俺に、無茶言ってくれるよ。この人。

「私だと警戒しているから無理だけど、深町君の事は舐めきっているから成功するわ」

「た、確かに、そうかも……しれないですけど……」

「面白そうじゃん、あいつアタシらをコキ使ってくれて、前から気に食わないワケ」

ナオミは爪を伸ばすと口を歪めて笑う。俺もあいつに一泡吹かせたい。

だから……こうして……と俺達はヒソヒソ話をする。

「ただし、チャンスは一回だけよ、失敗したら同じ手は使えないから」

「はい」「オツケー」

「作戦会議は終わりましたかな？ まどかさんでもわたしの仲魔には勝てませんよ」

「あら、逆転サヨナラ勝ちと言う言葉はご存知かしら？」

まどかさんはスーツのポケットに手を忍ばせている。

「ふ、そんな戯言知りませんよ。オニ共はタル・カジャと暴れまくり、リヤナンシーはマカ・カジャ、リリムはマハ・ジオ、オキクムシはマハ・ムド。そし……うおっ！！」

凄まじい閃光が発生して周囲は見えない、山田と仲魔達は動揺している。そのスキに俺とナオミは飛び掛った。

「このヤロ！！」

「今までの礼なワケよ！！」

不意を突かれた山田を思う存分、殴り蹴り引つ掻いてまどかさんの後ろに隠れた。

「アバズレにクソガキめ！！ よくもわたしを傷つけたな！！ こっこれは！？」

光の嵐が収まると悪魔達は消えて、五枚のトランプカードが宙に浮かんでいた。

「魔力魔法のシャッフル……クズノハ以外に使える人間がいたとは……」

「切り札は最後に取って置く物よ。それに敵前逃亡用のくらしの玉は、こんな使い方もあったりして」

「クッ!!」

まどかさんは凄いよ。余裕こいていた山田は悔しそうだ。

「そして、マハ・ラギ」

巨大な炎の渦が現れ、カードを焼き尽くした。

「さて、お次はどんな仲魔を出してくるのか楽しみですね。山田さん」

「さすが元マジシャンと言ったところですか、次に出す悪魔はさらに強力で……ん？」

山田は何か探しているみたいだ。

「探し物はこれなワケ？」

サングラスを掛けたナオミの手に携帯が握られていた。

ナオミ……スリで飯食っていけるよ

「きつ貴様！！それを返せ！！」

ナオミはニヤツと笑うと携帯を逆折にする。『バキッ！！』と音がして真つ二つになった。

「おつおのれ！！よくわたしを怒らせたな！！こうなればお前達を皆殺しにしてやる」

山田は何かブツブツと呪文を唱えている。まどかさんから余裕の表情が消えた。

「まさか！！」

「えっ？」

何なのか分からない。

「早く！！ここから離れて！！」

「おつと逃がしは、しませんよ。呪緊縛！！」

「うわっ！！」「きゃっ！！」「いゃん」

俺達は見えない縄で縛られたみたいで動けない。つまずいて床に倒れると、何か巨大な円形で意味不明の文字が描かれている。

「これって魔法陣？」

「そうです。それも呪殺魔法陣ですよ。一瞬にして即死させる必殺の魔法。屍鬼には無効だが、人間には絶大な威力です」

「うわっ！！マジババじゃん、まどかさん！！」

まどかさんは山田を睨みつけているが動けない。

「それでは死んでもらいますよ。発動、マハ・ムドオン!!」

魔法陣が一瞬、光ると、どす黒い瘴気が包み込んで俺達の命を奪う筈だが、なんと無い。

「バツ馬鹿な!! そんなありえん!!」

冷静な山田が動揺している。いい気味だ。

「こんな事もあるのかと、呪殺を無効にするデビル・コルセットを着けているのよ。彼が無事なのはアンタがヘマしたって事よ。広範困の呪殺魔法は絶大な威力だけど成功率が低いわ」

いつの間にか動けるようになった。

「だからこそ念入りに準備したのに……それを……」

「さて、次は何かしら？ 氷結系、電撃系、メギド系かしら、それとも封印系？」

「クソッ!!」

懐から銃を抜こうとしたが、まどかさんの方が早かった。頭に二発、身体に二発、確実に相手を殺すコロラド撃ちだ。頭が半分吹っ飛び、全身血塗れになってコンソールデスクに吹っ飛んだ。

「任務完了」

「ウッ!! グロイ死に方ですね……」

スプラッタ状態でとても見られない。オーバーキルですよ、まどかさん……

まどかさんは、平然とグロックのマガジンを交換する。

「やったじゃん、これで仲間達もここから開放されるワケ。アタシら時間を忘れて踊りたいだけなのに、ここに封じられて警備みたいなことをやらされて皆、頭にきてたのよ。でもこれで以前のように踊り続けられるワケ」

「そうか良かったね」

「でもアタシは涼太クンの仲魔だから、これからもずっと一緒。ヨロシクネ」

ナオミに抱きつかれても何か複雑な気分……でもこれで家に帰れる。時間は10時を過ぎていた。

そう思うと急に空腹になって腹の虫が鳴った。

「これで部屋から出られるわ。竜也達と合流してから引き上げましょう。途中で軽く食事して、家まで送っていくわ」

「有り難うございます」

俺はナオミを帰還させ、サーバー室から出ようとしたが出られない。

「ドアが開かないですよ」

「そんな筈は、ウツ!!」

銃声が響き、まどかさんは右腕を押さえてしゃがみ込む。全身血塗れで頭が半分吹き飛んだ山田だったモノが拳銃を構えていた。

「ウェツ!!グ、グロすぎ……」

とても描写なんて無理。正視に耐えないよ。

「キサマラカトウナサルノブンザイデヨクモグロウシタナソノツミ

バンシニアタイスル」

「こっこいつ、人間じゃない!!」

「まさか!! 悪魔に乗っ取られていたなんて……」

さすがのまどかさんも驚きが隠せない。俺も仲魔を召喚するのを忘れて呆然とする。

「コノウラミノコモツタジュウデシネエエエエエエエエエエエ
!!」

「駄目だやられる!!」

銃声は響いたが俺とまどかさんは無事だ。目の前に銀髪に黒装束の女性が現れ日傘? で銃弾を弾いたらしい。山田だったモノは右手を押さえている。拳銃は床に落ちていた。

「キツキサマハ!! ナゼジャマスル?」

「その美少年は主の所有物ですよ。とっとと危害加えると我が主の敵と認識致しますのよオツケー?」

山田だったモノは問い詰めるがその女性は、平然と受け流す。後ろ姿で分らないけど、この声どこかで聞いた様な感じ。誰だっけ?

「グヌヌヌ、イイダロウキサマニメンジテコノバハミノガシャル、サルドモイノチビロイシタナ」

山田だったモノは消えた。銀髪の女性は振り向くと見覚えがある。

「ヒロ子さん助けくれてありがとう」

「礼必要ない。涼太は主の物だからとっとと死ぬ困る。ただそれだけだ」

ヒロ子さんは先生の助手でいつもは白衣を着ているが、今は漆黒の着物姿だ。どうやってここに俺がいる事を知ったんだろう？

まどかさんは彼女を無言で睨んでいる。

「主からの伝言『早く診せるボケ』の事だ。以上とつとと帰る」

ヒロ子さんがサーバー室から出ると入れ替わりに竜也さん達が入って来た。

本日の戦利品

8950マツカ、2730マグネタイト、餓鬼玉、コンサバスーツ、ダンシングヒール、黒蝶ドレス、フェアリー・ウィッグ、デモンズ・チョーカー、デモンズ・コルセット、デモンズ・ブーツ、壊れた携帯電話、南部十四年式自動拳銃（後期型）

第7話 出会い（前書き）

データー吹っ飛んで困っていました

第7話 出会い

翌日。

眠いのを我慢して授業を上の方で聞いているが辛い。窓の外を見ると快晴だが俺の気分はどんよりして雨が降りそうだ。

あんな事があっても一夜過ぎれば、夢幻か……この世に悪魔がいるなんてね……

昨日のアレは現実起きた事で決して絵空事でない。

俺が黒スーツ姿の偽刑事達に拉致された場所は、世田谷区内にある倒産した電子部品メーカーの工場だった。工場は家から歩いて30分の場所にあり、封鎖事件の影響による経済不況の為、業績不振に陥っている企業に買収されたい。その買収した企業については、竜也さんは俺に教えてくれない。

There is no need to know. (知る必要が無い) と言う。

サーバ室から『山田だったモノ』が消えて、竜也さん達と合流した。

この件は、「絶対に誰にも言うな」と脅されたけど、どうせ話しても信じてくれない。

まどかさんは一般人の俺が囷になってくれたお礼代わりにと、マッカ、マグネタイトと装備アイテムを譲ってくれた。

壊れた携帯電話は別にして一番欲しかった十四年式自動拳銃は、駄目と言われた。携帯は修理して山田に関する情報入手と悪魔データーの復旧の為だが、銃は一般人に持たせない為と、銃自体が『呪い

憑き』なので、所持していると肉体と精神が蝕まれると言われたので諦めるしかない。

女物のドレスとか靴、アクセサリー類は、はっきり言って貰っても嬉しくない。

まどかさんには、『あら、深町君だったらお化粧して着れば似合うわよ』とからかわれて恥ずかしいよ、全く。

ネットオークションに出せば高く売れるだろう。

竜也さんの仲間達は魔術用の道具を用意すると結界を張った。山田がいなくなつて開放された悪魔が出没し、一般人に害が及ばないようにする為である。

竜也さんの車で家まで送ってくれたが、当然、親父とお袋には色々と問い詰められ、帰ってくるまで、お袋は泣いていたらしい。俺がまどかさんに言われた通りの事を話して落ち着いた。とにかく精神的に疲れたので昨日は風呂に入らず眠った。

今日は休もうかと思つたが、ズル休みした後ろめたさから学校に行く事にした。

黒井の占いは当たつたが最後は外れた。俺は、生きて普段の生活に戻つた筈だけど憂鬱な気分に陥っていた。

午前の授業が終わつて昼休みになると教室内は賑やかになる。弁当を食べたり携帯でメールをチェックしたりしてのんびり出来る幸せな時間だが、俺は弁当に箸をつけていない。出るのは溜息だけだ。

「どうしたんだよ？ 深町。朝から落ち込んでお前らしくないぞ。勉強の遅れはどうにもならないからな」

倉橋が俺の卵焼きを食べやがる。色々あるんだよ身体のことか……

「で、昨日のアレは解決したんだろ。まっ、気分的に疲れてるのは

分かるけど。これからはいつもの通りの生活に戻るんだから元気だせよ。あっこれ頂き、ウィンナーうめー」

武原も心配してくれるのはありがたいが、俺のおかずをパクつくのは勘弁してくれよ。

俺は教室のドア側で飯食ってる黒井達を見た。仲の良い倉田由香と町田園子とお喋りしながら食事をしている。時折、俺を見るがすぐ目をそむける。

「本当にどうしたんだよ。弁当に箸つけてねーじゃん」

「ったく、一難去ってまた一難なんだよ、なんで俺が……何したって言うんだよ」

俺は机に腕を組んで溜息をつく。神様、仏様、この憂鬱な気分をどーにかしてくれ！！

「こりゃ重傷だ」

「まさか黒井に告って振られたんじゃないのか？」

「黒井もちよくちよく深町クンを見つめていたからな。モテマスネ
色男」

二人がニヤニヤする。お前ら何勘違いしてるんだよ。言うべきか言わぬべきか迷っていたが、黙っていると恋煩いと勘違いしているみたいだから話す事にした。

「二人とも俺の話を聞いて鬱になるなよ。実はな……」

俺は登校する時に起きた事を話し始めた。

朝、いつものように校舎に入って昇降口で靴を履き替えていたら。

黒井が俺の横に来た。

「へボ占い師さんの占いは最後に外れましたよ」

嫌味っぽく言つと黒井は平然としていた。

「あら、それは良かったわね。3年の大門さんが深町君に話があるつて言うから今日の放課後、体育館の裏の倉庫に来いって」

俺は凍りついた。この学校ではその名を出すのは3年の沼田グループでもタブーになっている。

「大門つて……もしかしてあ的大门、さん……？」

「三年で大門つて言えばこの学校では1人しかいないじゃない」

当たり前のように言ってくれるよ、黒井曰菜子さんってば。

「じゃ伝えたからね」

俺は教室に向かって行く後姿を茫然と見ているだけだった。

「と言うわけだ。俺が憂鬱なのが分かるだろ……」

予想通り、2人は驚いてどこをどう突っ込めば良いのか分からないって感じた。

「いや、その、あの、あの人が何でお前なんか話があるんだよ？」

武原は動揺している。まあ無理は無いよ。

「まさか深町！？　なんかやらかしたんじゃないのか？」

「そんな事ねーよ、だいたい俺とあの人で何の接点があるって言うんだよ？」

「だよな、俺達とあの人とは世界が違うからな……」

倉橋も頷く。大門さんと俺とでは世界が違う。

「呼び出される理由が分からないから憂鬱なんだよ。もう勘弁してくれよ……」

「倉橋、やっぱ聞かなきゃ良かったぜ……」

「俺もそう思う……」

俺達はその日の昼休みは口数が少なかった。

そして運命の放課後。

いつもと違い憂鬱な気分だった。午後の授業がアツという間に過ぎた。

時間よ止まれ。

時の神を呪いたい……

このまま、机でうつ伏していたいよ……

「そろそろじゃないのか？」

「だよな。遅れるのは絶対にマジでヤバイぜ」

俺を見かねて武原が言う。一緒に行こうかと言ってくれるのは、ありがたいが二人を巻き込む訳にはいかない。

「じゃ逝くよ……時間が分からないから先に帰っていいよ」

体育館では部活の練習の為照明が点いているが、裏側の資材倉庫

は暗く普通の生徒は絶対に近寄らない。悪名高い沼田グループの溜り場でもあるからだ。

ガラの悪そうな連中が6〜7人集まってタバコを吸ったり携帯で誰かと話している。怖くて足が震え、胸がドキドキする。この奥であの人が待っているので逃げるわけにはいかない。

俺が近づくと髪を金髪に染め、ピアスを着けている1人が俺に気づいた。いかにもガラの悪そうな3年だ。俺の事を値踏みするように睨む。

「デメエ ここに何の用だ？」

「加藤、こいつ何モンだ？」

「おっこいつ2年坊じゃねーか？ 俺達に喧嘩でも売ろうってのかよ」

「ざけんなよ！！」

「カマミたいなツラしやがって、いー度胸してんじゃねーか」

3人にさっそく絡まれたよ。怖い。怖いが竜也さんや悪魔と比べればまだマシだ！！ と思うようにする。

「あっあの……そ、その……じつ実は大門さんに呼ばれましたので……」

途端に静かになって全員が俺を睨む。

「ふざけんなよ！！ あの人がお前なんか呼ぶわけねーだろ！！」
「しめちまえよ、こんな奴」

もう駄目！！ 絶体絶命！！

「おいおい、何、2年坊いじめて喜んでるんだ」
「沼田！！」

グループのリーダーである沼田秀人が現れた。俺に絡んでいた3年は不満そうに離れた。

「俺達はそこのチンピラとは違う。そうだろ加藤、中田？」

「けどよう、ヒデちゃん。こいつ俺達の前であの人に呼ばれたなんてフザケタことぬかすからつい腹が立ってよう」

「そうだが、俺もあの人からジカに声を掛けられた事ねえのに、それがこんなカマみてーのがよー！！」

この2人は相当不満そうだけど何でか分からないよ……

「深町って言ったな？ 奥の倉庫で豊が待っているぜ。早く行きな
ー！！」

「マジかよ……」

「なんであの人、こんなカマみたいな奴を……信じられねえよ」

グループの連中は信じられないと言った顔で俺を見ている。震える足を押さえながら倉庫に入ると。あの人がいた。

大門 豊

その名は他校にまで届いている。身長190で高校生と言うより若き格闘家という風格がある。精悍な顔つきに眼光が鋭い。あの沼田でさえも一目置いている。

渋谷のセンター街でのストリートファイトで負け知らず、暴走族を叩きのめしたとか、暴力団が主催する闇の賭け試合で優勝したとか、広域暴力団の事務所に出入りしているとか、携帯のサイトとかでも色々噂されている。確かに徒党を組んで暴れる粗暴で野卑なチ

ンピラとは格が違う。

一匹狼で誰とも組まず、あの沼田グループも校内ではトラブルを起こさないのは、この人がいるからだと思う。その人が目の前にいる。

「あの2年の深町涼太ですが、何かお話があるとか言われて来ました……」

俺がオドオドと言うと意外にも温厚な笑みを浮かべていた。

「お前が深町か？ いきなりここに呼ばれてさぞ驚いただろう。普通なら俺がお前の教室に行くべきだが……それだと他の生徒達にいらん関心と呼ぶのでここに来て貰った訳だ」

そりやそうだ。この人が俺達の教室に来たら大騒ぎになるよ。

「話つてのはな、お前が一昨日、浦木さんと出会った件と翌日に裏歌舞伎町にある如月商会に行った事だ」

「そっそれは……」

「別にお前がサボったのを責めているわけじゃない。何があったのかお前の口から直に聞きたいだけだ。俺の言ってる事が分かるだろう？」

もしかして謝礼もらったのがバレた？

「分かりました。実はですね……」

浦木さんと出会ってから如月商会の事までを話した。俺が話している間は口を挿まず聞いてくれる。話し終わると腕を組んで目を閉じていた。

「そうか、お前があの人の遺志を継いだのか……」

精悍な表情が一瞬、悲しそうな顔になった。

「あの、浦木さんとは知り合いですか？」

「命の恩人だ。俺は喧嘩では負け知らずだが、所詮ガキ同士との喧嘩だ。半年前、道玄坂にある工事中のビルで悪魔に襲われた時は恐怖に陥ったよ。浦木さんが助けてくれなかったら今、ここにいないだろう」

「……」

「すまん、話を続けてくれ」

俺は偽刑事に拉致されて工場まで行ってからの事を話し出した。

大門さんが関心を引いたのはCOMPと悪魔召喚プログラムだ。

「その場はまどかさんがいたから解決したのも当然だな。ところでお前はデビルサマナーになった訳だがこれからも続けるのか？ それとも怖くなってやめるのか？ どちらだ」

大門さんは真剣な目で俺を見つめる。俺が浦木さんの遺志を継ぐのか試しているみたいだ。

「本音を言えば悪魔と対峙するのは怖いです。逃げたい。だ、ただ抗う術があるのに背を向けるのは何か嫌です。それに悪魔召喚プログラムや悪魔達についてもっと詳しく知りたいですから」

「ふ、怖気ついてやめますって言うと思ったが……お前も悪魔の魅力に惹かれた愚か者か。まっ俺も人の事は悪く言えんがな」

俺の肩をポンと叩いた。

「今日は、わざわざ来てくれて済まなかったな。ここに来るまで連中に絡まれて怖かったか、いや悪魔と対峙したお前なら何とも思わないか……その女みたいな顔でも一応度胸はあるみたいだな」
「……」

いえ、怖いですと言いかけた。

「少しは身体を鍛えたほうがいいぞ。ハハツ、俺達は身体が資本だからな」

笑って俺の背中を叩く。

「沼田に一切、手を出さなっって言ってるから帰りは心配するな」

「は、はい、有り難うございます」

「悪魔に気をつけて帰れよ」

大門さんは倉庫に入った。グループの3年達が俺を睨んでいたが、何も言わず通してくれたので、無事に体育館裏から出て自分の教室に向かった。

この時間の校舎は暗く人影がほとんど無い為、異界に迷い込んだみたいだ。カバンを取って昇降口に向かった。

校舎を出ると日は暮れていたが、俺は肩の重荷が取れたみたいでホッとした。歩く足取りも軽く何だか幸せな気分だ。

校門の脇に倉橋と武原が待っていてくれたので二人に感謝した。黒井日菜子も立っていて俺の方を見ていた。何が入っているのか分からない大きいバッグを持っている。

俺達4人は無言で歩く。重たい雰囲気です1人になりたいよ。

「じゃ俺たちはここで別れるよ。じゃな」

「おいおい、まだ途中じゃねーか」

「いいから来いよタケ。邪魔しちゃ悪いだろ」

倉橋は武原の腕を引っ張って離れる。倉橋がニヤツとしたのを見逃さなかった。

「お、おう、また明日な」

「あの2人、私達に気を使ってくれたみたいね」

「ああ。そ、そうだな」

「駅まで一緒に帰りましょう」

女子生徒と二人で帰るなんて姉さん以外初めてなので俺は緊張した。

「で、大門さんとは何を話したの？」

興味津々な目で見てくれるよ。

「秘密」

「ケチね、まっ、いいけど」

俺と黒井は無言で歩いていく。共通の話題が無いけど、あの事を訊くのに絶好のタイミングだ。

「そういえば黒井さん、昨日は学校を休まなかった？」

「きちんと届けを出して休んだわよ。ズル休みして歌舞伎町に行った深町君を見たわ」

「えっ！？ どうして分かったの？」

「それくらい分かるわ。浦木さんの件で如月商会に行ったのでしょ？ 私は仕事の報告でまどかさんのところに行ったんだから」
「まさかっ!!」

黒井が浦木さんとまどかさんを知っているなんて夢にも思わなかったよ。

2人で歩いているのを、他の生徒に見られないかとヒヤヒヤだけと黒井は全く気にしていない。

「仕事ってどんな？ 社員になれるわけないし……」

「当たり前じゃないの、学生が正社員になれないわ。私の場合はアルバイトよ」

「バイト？ もしかして」

占いかもしれない。クールな黒井がハンバーガーショップやコンビニで笑顔を振りまいて働いている姿が想像できない。

「何か失礼な事考えているみたいだけど『悪魔退治』よ」

「えっ嘘っ!？ まさか？」

「そのまさかよ。まだバイトの身分だから依頼を直で請け負えないから、まどかさん達のサポートがメインになるわね。深町君はデビルサマナーになったみたいだけど私は魔術師よ」

ニツコリ笑う。学校では絶対に見せない笑顔だ。俺は一瞬ドキっとした。

「魔術師ってまどかさんみたいなの……あれが出来るの？」

「あの人と比べると未熟だけど術に使う道具と衣装は持ち歩いているわ」

持ち物検査の時はどーすんだと思った。

「一つ訊きたい事があるのだけど……」

「ん？ 何かしら」

「黒井さんが『この世界』に入ったきっかけは何だろうと思ったんだ」

途端に表情が変わった。学校で見るいつもの顔だ。

「……」

「い、嫌なら別にいいんだ。無理にでも訊きたい訳じゃないし……」

「……」

すっかり地雷を踏んだみたいだ。話題変えなきゃ。黒井は歩くのを止めて俺を見つめる。神秘的な瞳に吸い込まれそうになった。

「いつか話すわ…… ったら」

「えっ何？」

「べつ別に何でもないわ、その内にね……」

用賀駅まで来た。あいつの家は二子玉川駅の近くにあるマンションだ。

「あっそうだ。私の携帯の番号とメアドを教えるから深町君のものを教えて」

「えっいいけど、何で？」

黒井は溜息をついた。

「女の方から教えてって言われるのが嫌なの？ ならいいわ」

拗ねたらしく駆け足で駅に向かうのを引き止めた。

「わ、分かった。教えるよ」

赤外線通信でデータをお互いに送受信する。そしたらCOMPの番号とメアドも教える羽目になった。

何か少しずつ外堀を埋められているみたいだけど気のせいかな。

「これで、いつでも……そして……ふふ」

「あの、もしもし？ 黒井日菜子さん、邪念が駄々漏れしているみたいですけど……」

含み笑いをしている黒井にドン引きになった。やっぱりこいつ変わってるよ。

「は、話は変わるけど、深町君は浦木さんの遺志を継いでデビルサマナーとして、この東京に暗躍する悪魔を退治する決意は間違い無いわね」

真剣な目だ。いいかげんな返答次第で俺を見限るかもしれない。

「そう、だ。けど俺なんか竜也さん達に比べればまだまだヒヨツ子だけど地道に経験値を積んでレベルアップするしかない」

「はあ、何かゲーマーらしい物言いだけど……ま、いいわ。仲間としてお互いに頑張りましょう」

黒井は手を差し出した。俺は迷わず握手する。

「また学校で逢いましょう」

「ああ、また明日」

手を振ると地下への階段を下りて行った。俺はコンビニは寄らず家へ向かう。どうやらデビルサマナーとしての道を歩まざるをえないのかもしれない。

「まっそのうちなんとかなるでしょ」

COMPを見るとメールが届いていた。

1件目はスティーブンから

> 悪魔召喚プログラムを使いこなしているみたいだね。悪魔との会話で意味不明な言葉で話すモノもいて交渉が出来ないと思う。そんな時は、このジャイブトークンを使えば問題は解決する。

2件目はヒロコさんから

> いつ来院しやがるのか緊急即メールを送るがよろし。とつとと首輪つけて拉致する覚悟おk？

3件目は如月商会から

> 昨日は、私達に協力してくれてありがとう。竜也と話したのだけど君はサマナーとしての素質があるわ。もしよければウチで働く気があるかしら。強制では無いので決心がついたら連絡してね。

4件目はレッドマンさんから

> 連絡遅れましたが、悪魔召喚プログラムは昔、DDS・NETでもダウンロード出来ましたがウィルスまじりとかで問題になり今は出来ない筈です。平崎市に住んでいたヴォイスさんがそれを使って悪魔退治をしたとか生まれ変わったとか不思議な事を言ってますが、悪魔を召喚するなんて現実には有り得ない夢物語です。参考

にならなくて申し訳ありません。

5件目はA T - L O Wさんから

> オッス、まつたけごはん。俺が調べた所、悪魔召喚プログラムは非常に性格の悪いプログラマーがウィルスを仕込んだ物だから絶対に実行するなよ。いいか絶対にだぞ。悪魔を召喚するなんて……そんな事あつてたまるか……ふざけんな。いや、お前に言つたんじゃないから気にしないでくれ。もし手に入れたのなら削除しろよ。じゃまた。

第8話 業魔殿

日曜日の午後。俺は、履歴書を持って裏歌舞伎町にある如月商会に向かった。

異界？にある裏歌舞伎町には、まだ直接行けないのでまどかさんと待ち合わせしてからだ。

日中の裏歌舞伎町は、相変わらず人影は無いけど熱い視線がビシバシ感じる。

「最後の確認になるけど本当にいいのね？」

「はい」

「じゃあ誓約書を読んで了承できたらサインして」

ペンを受け取ると署名欄に自分の名前を記入した。誓約書の内容は仕事中的事故や怪我について如月商会は、一切の責任を負わないと言う事だ。希望すれば独自の団体保険に加入出来るらしい。万一死亡しても保険金が支払われるので当然加入する事にした。当然、保険料は給料から天引きになる。

退魔師と呼ばれる人達は、仕事を直に請けられるが今の俺はアルバイト扱いなので直には請けられない。

給料は日本円だが、希望すればマッパで受け取れると言う。マッパから円の両替はレートによって変動するが手数料がゼロなので円よりお得だ。

「当商会は深町君を歓迎するわ」

「よろしく願います」

俺は深々と頭を下げた。

実は随分悩んだのだ。ゲームの主人公と違って、安易に決める話

ではないからだ。

全てを忘れてしまえば日常生活に戻れる。が、問題は、ダークサマナーの山田一郎の存在だ。あの変態サディストがいる限り自分の命と童貞が脅かされるからだ。

小心者でヘタレの俺としては、この業界に深入りしたくないが……

如月商会は、輸入雑貨品を扱う会社だけど、裏では警察では手に負えない『悪魔絡み』の事件を調査解決する会社で、まどかさんは共同経営者だ。社長は竜也さんだけど別の肩書きを持つ忙しい立場なので実質まどかさんが仕切っている。同じ名字なので結婚しているのかと思ったけど、まどかさんは2歳年上の従姉弟で幼馴染だと言う。社員は竜也さんとまどかさんを除いて5人だ。

「俺は、本家の事務所に顔を出すからこのガキの面倒を頼む」
「行つてらっしゃい」

竜也さんは黒皮のコートを着ると事務所から出て行つた。

「本家の事務所つて如月家のですか？」
「ん？ 違うわよ。竜也には八代目佐竹組若頭補佐、初代如月会会長の肩書きを持っているのよ」
「エッ！？ マジ？」

俺は固まった。佐竹組は、東日本最大の広域暴力団、関東羽黒組の二次団体でバリバリの武闘派としてニュースでもその名前は時々出てくる。先週も六本木で藤堂組系の組織と派手なドンパチをやらかしたのはネットでも覚えている。一瞬、背筋がゾツとした。

「まさかあの人……モノホンだったとは……じゃここは？」

まどかさんは、首を振り肩をすくめる。

「深町君が言いたい事は充分に分かるわよ。ウチは、佐竹組や如月会と一切関係無いわ」

「そ、そうなんですか？」

「当たり前でしょ」

それを聞いてホツとした。まどかさんは立ち上がるとコートを着て俺を見る。

「それじゃあ、これから出かけるわよ」

「えっ？ どこにですか？」

「最初に私達退魔師が必要とする装備やアイテムを売っている店よ」

退魔師の装備は、家に代々受け継がれている刀とか弓矢を想像するけど、それは一部の古い家系で最近の退魔師は、退魔組織から借りるか買っしか無いらしい。

外に出ると人影が無い大通りに向かう途中に目的の店がある。純和風の平屋で大きな看板に達筆な字で『山羊屋』と書かれ、異国情緒が漂うこの街では浮いた感じがする。

「ここよ」

店内は薄暗くお香の匂いがする。見ると用途不明のセーラー服や刀・斧・ハンドガン・自動小銃が壁に飾られている。怪しさ大爆発の店だ。これじゃ銃刀法に引っ掛かるよ。

「いらっしやいませ。これは如月様、毎度ご贖いして頂き感謝しております。はい」

「うわっ!!」

店の奥から店員がモミ手しながら出て来たけど、その姿を見てドン引きになった。貧弱な小男で奇怪なガスマスクを被っている。半袖のシャツから出ている腕はこつこつして毛むくじゃらだ。こつこいつ人間じゃねえ。

「この人は店長よ」

「山羊屋裏歌舞伎町支店の八木原と申します。お見知り置き願います」

差し出された名刺を受け取る。声からして年配者らしいが若くも聞こえるがよく分からない。

「よ、よろしく……」

「山羊屋は24時間年中無休です。何卒ご負担願います」

「深町君行くわよ」

「は、はい」

「またのご来店をお待ちしております」

店を出ると用意してあった車に乗ると狭い道を走り出した。はは、何か夢に出てきそうだ。

「まどかさん、これからどこへ向かうのですか？」

「ビーシンフル号、業魔殿よ」

業魔殿……どこかで聞いた名前だ。もしかしてお台場に停泊している水上ホテルの事かな。

「今、話題になっている水上ホテルの事ですか？」

「そうよ。よく知っているわね」

「DDS・NETでも話題になっていましたから」

そう、そこで働いているメイドが可愛くてネット内の『嫁にした
いメイド』ランクの1位にランキングされているからだ。それとホ
テル内にあるレストランで出されるフランス料理は、超絶品で国内
で1・2位を争うらしい。業魔殿は以前、日本海側にある天海市に
停泊していたが最近になってお台場に来て話題になった。

「でも、そんなホテルとまどかさん達の仕事に関係あるのですか？」

ホテルと悪魔退治、どう考えても繋がらない。まどかさんは巧み
に運転して他の車を追い越す。日曜なので交通量は少なく快適だ。

「大いに関係あるわ。特にデビルサマナーになりたての深町君にと
ってね。詳しい事は、私より彼から聞いたほうがいいわ」

「はあ」

「それともう一つは、例の山田が使っていた携帯のデータをサルベ
ージする為よ」

ナオミが壊した携帯のデータを復旧しようと試みたが巧妙なセキ
ユリテイトラップが仕掛けられていて困難らしい。うっかりトラッ
プにハマると全データが削除されてしまう。そこで専門家に依頼す
る事になったとの事だ。

何気に外の街並みを見ているとJR飯田橋駅に向かっていた。新
宿からお台場に向かうには首都高速を使うか下道なら四谷、赤坂、
六本木、芝浦と抜けたほうが早いのでは？とナビを見て思う。

「業魔殿に行く前に寄りたい所があるのよ。その場所は深町君にも
是非見てもらいたいわけ」

「その場所って」
「……」

まどかさんは答える気は無いようだ。

狭い通りを抜けて目的地に着いた。見回しても塀があるだけで建物は無い。広さからしてマンションの建設予定地なのかもしれない。周辺はビルが密集して建っているの、そこだけがポツカリ開いている感じた。

まどかさんが車から降りると俺も後に続き、門らしい場所に来ると彼女は指を示した。

「ここよ」

「ゲッ！！ なっ何なんですかここは？」

マンションの建設予定地だったら更地のはずだが、そこは巨大な穴が見える。真っ暗で底が見えない。

「こっこれは……」

異様な光景で何とコメントすればいいのか分からないよ。

「軽子坂高校跡地。原因不明の衝撃と共に学校が消失したのよ」

「消失って……でかい校舎が無くなるなんて、そんな……有り得ないですよ爆破されたとか……」

まどかさんの顔は、真剣で冗談を言っているとは思えないけど。

「爆破されたのなら無数の破片が飛び散って周囲の建物に大きな被害を与えているし、死傷者が大量に出ているわ。当時の資料にはこれらの被害の報告が無かったのよ。しかも起きたのは平日の夕方」

「先生と生徒達はもしかして……」
「現在も行方不明よ」

軽子坂高校消失事件。1990年代後半だと当時、俺は生まれていないが、カルト教団によるテロとか騒がれていたらしい。

恐ろしい話だ。巨大な穴を見ると、これに似た話のマンガを思い出した。かなり古いマンガだ。確か……あれは、小学校だったけ？　そしてあれもか？

「当時のクスノハの見解によると何者かの強力な術によって異世界に跳ばされたとされているわ」

やったのが悪魔でなく人間だったらそいつは、とんでもない極悪人だ。

「そのやった奴は捕まえていないのですか？」

「これだけの大掛かりだと外部からは無理なのよ。その術者も一緒に跳ばされたらしいと報告されているわ」

「大勢の人を巻き込むなんて許せないですね」

「そうね。巨大な穴を塞ぐには消えた学校を戻すしか無いわ。この世界に関わるからには一度見てもらいたかったのよ」

まどかさんは俺の肩をポンと軽く叩くと車に戻るのので後に続いた。

「あんな穴が開いてたら、一般人がうつかり迷い込んで落ちたら大変じゃないですか？」

「あの場所には、人払いの結界が二重に張られているから一般人は入れないわ。ウチやクスノハでも綻びが無いと定期的に巡回しているから大丈夫よ」

「そうですね。あの穴を見ていたら大魔王ルシファーに率いられた

悪魔の大軍団が現れるのかと心配になりましたよ」

俺の何とも言えない顔を見てまどかさんは、声を出して笑った。

「それこそ無用な心配よ。悪魔がこちら側に出るには莫大なマグネタイトが必要になるから、そう簡単には現れないわ」

「そっそうですか……」

何か非常に気になるが、まどかさんがそう言うのであれば納得するしかない。

「それとクズノハとは、何ですか？」

まどかさんは、よくぞ訊いてくれましたと言う顔をした。

クズノハ……葛葉とは平安時代以前から続く国内で最大規模の退魔組織で、如月家は枝分かれた分家の一つらしい。他には九鬼、日下、神代、京極、結城家がある。フリーの退魔師は別にして、一般の退魔師は各家と密接な関係があり、時の朝廷、幕府から今の政財界に大きな影響力を持っている。

「例えて言うなら能楽師の家みたいに先祖代々受け継がれているのよ」

「なるほど、まどかさん達も幼い頃から修行した訳ですね」

「うーん、私達はちよつと違うわね。私はマジシャンを目指していたし竜也はあの気性だから家を飛び出して暴力団組長になって暴れていたけど、クズノハからの要請で仕方なくこちら側に戻ったのよ」

クズノハからの要請は実質の命令と同じく断る事が出来ない。退魔師の業界？は、広く狭いので慢性の人材不足に陥っている。学校をつくって人材の養成をする余裕も無い。広告を出して募集するの

は問題外で、精々素質がある人を見つけたらスカウトするしかないのが実情だと、まどかさんは言う。

そんな実情は、小説やアニメでも描写されているが、まさしく因果な稼業だ。

まどかさんが運転する車は、芝浦からレインボーブリッジを渡ってお台場に来た。二人だけだから休日のドライブみたいだ。

「着いたわ。あそこに見えるのが業魔殿よ」

「あれが……実際に見ると凄いや」

目の前にテレビやネットでも話題になっている業魔殿が見える。巨大な客船を改装して出来た業魔殿の迫力に圧倒されるよ。有料の専用駐車場に車を止めてからから歩いていると、家族連れやカップルの見物人が多く写真を撮ったりしている。

「日曜だから人が多いので混んでいますね」

「そうね、業魔殿は特別に予約しないと入れないのよ」
「なるほど」

業魔殿の入り口には大勢の人が集まっているが、中に入れないので見ているだけだ。

まどかさんは構わず進むので俺も後に続く。スーツ姿のまどかさんと俺に多くの視線が背中を突き刺すがちょっとした優越感を味わえるよ。

「すっ 凄い!!」

広間は吹き抜けになっている。高い天井には巨大なシャンデリアが吊るされて淡い光を照らしている。内装は豪華で床の絨毯はフカ

フ力で靴が埋まってしまうほどだ。壁にはよく分からない絵画が飾ってある。奥に緩い円を描くような二つの階段が見える。おのぼりさんみたくキヨロキヨロしていると、いつの間にか1人のメイドが現れた。

「お久し振りでございます、如月まどか様。お待ちしておりました」
「久しぶりねメアリ。で、彼が」

「深町涼太様ですね、伺っております」

メアリは俺を見ると深々と挨拶をするので俺も慌てて挨拶をした。

「よ、よろしくです。メアリさん」
「メアリ、とお呼び下さい。私に、さん付けは無用です」
「は、はいっ」

言葉は丁寧だけど有無を言わせぬ迫力がある。

俺の前に本物のメイド衣装に身を包んだメアリ本人が立っている。肌は、白く黒髪ショートヘアに神秘的な顔立ちは無機質な人形みたいだ。その両目は赤みを帯びた瞳で俺を見つめている。なんだか吸い込まれそうだ。アキバの通りで風俗店のビラを配っているメイドもどきと大違いだよ全く。

突然、声が響いた。

「COMPを手にした若きサマナーよ。業魔殿へヨーソロ」

国籍年齢不詳の男が現れた。男の服装が異様で例えるなら海賊船の船長だ。赤地に金の刺繍が施された襟付きのマントにパイプを手にしている。船長の帽子を深く被り銀髪の前髪が右目を隠している。メアリと同じく赤味を帯びた瞳は鋭い。色白の肌で、髭を生やしている。ゆっくり階段を降りて俺達の前まで来た。

「久し振りね、ヴィクトル」

「うむ、如月まどか。人喰い電車事件以来だな」

ヴィクトルと呼ばれた男は、表情を変えずに頷くと俺に顔を向けた。異様な迫力に吞まれる。

「では、改めて名乗らせていただく。我が名は、ヴィクトル。悪魔合体を生業とする者だ」

「悪魔合体って……」

一瞬、悪魔が変形、ドッキングするイメージが浮かんだ。

「悪魔と悪魔を合体させてより強い悪魔を作り出す邪法だ。ここで話すより我が聖域でもある魔の工房へご案内しよう」

ヴィクトルが指を鳴らすと階段が落ちて地下へ続く道を開けた。どんな仕掛けになっているのか分からないよ。ヴィクトルが先頭で次にまどかさん、俺と最後はメアリさんが続いて地下に降りた。

地下にある工房はまさしく背徳と魔の工房だ。例えるなら昔のB級SF映画に出てくるマッドサイエンティストの研究所だ。設備は最新鋭の電子機器と言うより今では珍しい真空管が使われ、無数のアナログメーターがレトロチックな雰囲気を出している。奥に人が入れそうな巨大な円筒形のシリンダーが7本ある。透明ガラスで内部に青みを帯びた液体が満たされ泡だっている。中央には魔法陣が描かれた円形の台座がある。非現実的な迫力に圧倒されてただ見ているだけだ。確実に言えるのは、通報されたらアウトって事だ。

「ここで我輩は悪魔合体の研究を行っている。お主に合体理論を

説明しても理解出来ぬだろう」

そりゃそうだ。理解できたら天才だよ全く。

「ヴィクトル、これが例のCOMPよ。巧みなプロテクトとトラップが仕掛けられてウチやクズノハでも手に負えないのよ」

まどかさんは例の携帯をヴィクトルに渡した。

「これは、山田一郎のCOMPだな。なるほど彼からも破棄の連絡が届いている。この依頼は、確かに引き受けた。そう時間もかからないだろう」

「よろしくお願いします」

まどかさんは深々と頭を下げる。

「それと深町涼太よ。お主のCOMPを見せてくれぬか？」

「は、はい」

拒否する理由も無いので俺は、コードを外しケースから取り出すと渡した。ヴィクトルは測定器に接続して調べている。

「ほう、ベースはサイバーズの最新型をカスタマイズしているな。悪魔召喚プログラムは……」

ふふ最新版か……そうかお主がな……」

俺を見ると意味有り気な含み笑いをしてちょっと怖いよ。

「COMPに入っている仲魔は、幽鬼と屍鬼に悪霊か……これでは合体は無理だな」

「無理つて……」

「悪魔合体は言葉通り二体の悪魔を一つより強い悪魔を生み出す邪法だが悪魔には相性があり相性が悪いと合体素材の仲魔より能力……レベルが低い悪魔……スライムが出来てしまうのだ。最悪の組み合わせだと合体は不可能になる」

「つまり合体させたけりやもつとたくさんの悪魔を仲魔にしろつて事ですか？」

「察しが早いな」

うつ簡単に言ってくれるよこの人は、全く。

？当然、合体すれば数が減る

？己の力量より強い悪魔は作れない。悪魔は自分より弱い者には従わないので逆に殺されてしまう。

？仲魔にいる悪魔は作れない。

？幽鬼などダーク系の悪魔を使うとダーク悪魔しかできない。

「これは基本で他にはスキルの継承や三身合体や、特殊な合体があるが一度に全て覚える必要は無い」

悪魔合体って奥が深いですね。よく分かりました。

「それと如月まどか。お主からの依頼を引き受ける代わりに、我輩の頼みを引き受けてはもらえぬか？」

「どのような内容でしょうか？」

無理難題を要求されるかと思ったのか、まどかさんはかなり警戒している。

「難しい話では無いから警戒しないでもらいたい。あるモノを手に

入れて欲しいのだ。我輩は、新たな合体秘術を日々研究しているの
でこの場から離れられない。それを入手して完成すればサマナー達
の新たな力になるだろう。お主達が損になる話ではないと思うがな」

まどかさんはヴィクトルを見ていたが……

「分かりました。お引き受けしましょう。それで手に入れるモノと
は何ですか？」

「モノ言わぬ土くれの人形、ドリーカドモンだ」

「あれは確かDr. スリルの物で彼は今、日本にいないはずですが
……」

「最後の1体は、奴の秘密研究所に保管されているのだ。研究所は
現在、無人だがサマナー嫌いの奴は悪魔を大量に放っていて一般人
では近寄る事も適わぬ。そこで」

「デビルサマナーの力が必要なのですね。ウチに新人が入りました
ので任せますわ」

新人ってまさか俺？ ジョウダンデスヨネマドカサン……

まどかさんは、さわやかな笑顔で俺の肩を叩く。

「デビルサマナー深町涼太の初仕事よ。頑張つてね」

「そ、そんな……無理ですよ」

俺が情けない声で抗議しても無視してくれるよ。まどかさん。

「で、研究所の場所と悪魔の種類とトラップがあるか分かるかしら
？」

「メアリの報告によると研究所は世田谷区内にあるが、建物と敷地
は、異界化しており悪魔が存在している。数が多いが高レベルはい
ない。むしろトラップの方が厄介だろう」

「私が確認したところ放たれている悪魔は多いですが、今の深町様でも対応可能です。地下研究室は結界に覆われて入れませんでした」
「難易度は低いが万が一と言う事もある。装備を整えて行くのが良からう。研究所のデータはCOMPのメモリーに入れて置く」
「で、出発は、いつですか？」

時計を見ると16時を過ぎている。

マサカコレカラムカウトハイワナイデスヨネ？

「もちろん、これから向かうわよ」

ヒロ子さんからメールが届いています。

> 最後通告！！ 深町涼太。本日19時までに来い！！ ヒロ子

さんはプンスカなんだぞ！！

分かってるのか！！ もし来なかったら強制拉致を執行する。以上！！

第9話 依頼・前編

時計を見ると18時を過ぎていた。Dr・スリルの研究所は、砧公園の近くにある。公園は都内でも有数の広さを誇る。

夕闇に包まれた敷地は雑木林が高い塀に囲われて不気味だ。住宅地から離れているので人通りは少なく時折、車の音がかすかに聞こえるだけだ。

今の姿を他人に見られたくない。

塀に沿って歩いていると、淡い街灯の光が俺の影を揺らしている。周囲は全く静かでブーツの音が響くだけだ。やがて正門の前に出た。表札の類は見当たらないがメアリのデータによると間違い無い。ゴシック調の頑丈そうな扉を両手で押すと軋む音を立てて開いた。闇の中で魔物達が俺を待ち構えているようで怖いよ全く。

「このまま進んだら死亡フラグバツチシでバッドエンド直行になりそうだよ。怖いし……家に帰って風呂に入りたい……でも」

竜也さんからは『フケたりヘタ打ったら即刻クビでアケミに引き渡してやる』と脅され、まどかさんは『こんな簡単な依頼は滅多に無いわよ』男の娘でしょ。ガンバ』と背中を思い切り叩かれたよ全く。怖さでガクガクと震える足で敷地内へ入った。

途端に空気が変わったのを肌で感じた。重苦しくてネットリとした空気が冷や汗が肌を伝ってくる。

ヘッドバイザーを装備して悪魔召喚プログラムを起動すると索敵・暗視モードに切り替えた。

当然、通話状態は圏外になっている。

エネミーソナーは、危険度のランクを人型のアイコンで4段階に色別されている。

青：悪魔がない

緑：自分より弱い悪魔

黄：自分と同等の悪魔

赤：自分より強い悪魔

アイコンも青は動かないが緑黄赤の順になると激しく動くらしいが、今は緑色でゆっくり回転している。門から建物へは砂利道が続いているが、手入れがされていないのか枯葉で覆いつくさていた。

DEGITAL DEVIL SUMMON SYSTEM OK
MAG BATTERY OK
CONDITION OK
SUMMON OK
GO

召喚魔法陣が青白く輝き、屍鬼ボディコニアンのナオミが実体化すると続いて幽鬼ガキも召喚した。

「ヤッホー！！ お久しぶりだねって……なんで女の格好しているワケ？」

「ウガガ……ンナ？ウガ？」

ナオミは不思議そうな顔で俺を見てガツキーは首をかしげている。言うな、それ以上言わないでくれ……俺だって死ぬほど恥ずかしいんだよ。こっこれは怖い童也さんの業務命令だから仕方なくだ……けっ決して好き好んで……キモい女装マニアじゃ……

ナオミとガツキーに大笑いされると思ってた頭を抱え座り込んだ。

「何で座り込んでるの？　もしかしてお腹が痛いワケ？」

「ウガガ？」

「ナオミ……俺の格好見て変と思わないのかよ？」

「変って？　よく似合ってた素敵なのワケ」

「素敵って……俺が……女の服着てるんだぞ」

「似合えばいいワケ。そりゃダツサイ格好だったら笑っちゃうけどね」。ガツキーもそう思うでしょ」

「ウガ？」

ガツキーお前もか……って首捻っているから分かってないな、こいつ……

「涼太くんが着てるの黒蝶ドレスなワケ！！　よく手に入れたね。

マジもんのゲキレアよ！！」

「そんなにレアなのか？」

「マジで超ウルトラスーパーデラックスゲキレアよ」、

今の姿を倉橋や武原には死んでも見せられないよ。

頭は銀色に輝くシャギーが入ったセミロングのフェアリーウィッグにつばの広いウィッチハットを被っている。

身を包む漆黒のロングドレスは濡れたような光沢感があり胸元が大きく開き、襟が羽のように伸びていて肩と背中を大きく露出している。スカート部分の丈は踝まで長いがフロント部分に大きくスリットが入っているので歩きやすい。

首には髑髏と逆十字架をデザインした首輪のようなチョーカーを巻きつけている。足は太腿まで覆うブーツを履いている。両腕は二の腕の付け根まで覆っているロンググローブだ。全身黒尽くめで色

白の肌とよく似合う。

頭：ウィッチハット・フェアリーウィッグ

首：デモンズチョーカー

体：黒蝶ドレス

足：デモンズブーツ

材質は分からないけど肌にフィットして着心地は軽く快感だけどスカートは、久しぶりなのでストッキングを履いていても頼りない。こりやマジでヤバイ、何か目覚めそうでゾクゾクしてくるよ……

このドレスを着る羽目になったのは、用意してくれたサバイバーベストより魔法防御と物理防御が優れているのと、俺の素性を隠す為だ。まあ確かに女の格好をしているとは思わないだろうけど……

黒井や大門さんに他の社員がいなくて良かった。

竜也さんは腹を抱えて大笑いし、まどかさんは必死に笑いを抑えているのがハッキリ分るよ全く。

フェアリーウィッグを被り、濃い目の化粧した俺は、鏡を見ると死んだ姉さんが写っている。

姉さんとは双子の姉弟だから俺が女装すれば似るのが当たり前だ。漆黒のロングドレスに身を包み化粧した俺を見て、二人が啞然としたのが逆にクスツと笑えるよ。そして今の俺の身体は……やめとこ。

武器は、ゲームの主人公みたいにいきなり銃や刀を扱えないし、宝の持ち腐れになるのが目に見える。そこで竜也さんが護身用にと改造した釘打ち機。通称ニードル・ガンを用意してくれた。遠距離攻撃は無理だが、接近戦では絶大な威力を発揮すると言われ、持ってきたのだ。釘の入ったカートリッジはセットすると最低でも100本打てるらしい。

消費アイテムは逃亡用のくらしの玉を多めに10個と、ダメー

ジ回復用の傷薬と魔石に解毒剤のディスプレイを各5個もらった。これは特別サービスと言われまどかさから補助用として、さそり鞭を借りた。改造釘打ち機と鞭を手にした俺は、危険な雰囲気を漂わせるダークサマナーに見えるだろう。

突然、ヘッドバイザーに『DANGER』の赤文字が現れた。リーダーに赤い点が6個表示される。

「ナオミ！！ ガッキー！！」
「来るワケ！！」

ナオミは爪を伸ばすと構える。前方と背後から獣のような唸り声が聞こえた。吐き気を催す腐敗臭が漂ってきた。暗闇からシェパードやドーベルマンの大型犬が現れた。よく見ると耳が千切れていた顔半分が欠けていて目玉が出ている。どいつも酷い泡みたい涎を垂らして俺達を見ている。

「ゲッ！！ こっこいつら……」
「ウガガ、サ、マナーキ、ケン」

ガッキーもかなり警戒している。グロくて正視出来ない。デビルアナライズしなくても良く分かる。

「こいつら、マッドドックだよ！！ ゾンビドックと違って頭がパ―だから涼太くんが話しても無駄なワケ」

どこが違うんだよ！！ どこが！！ あの淀んだ目は、俺達を晩飯だとしていやがる。間合いを詰めて一気に襲い掛かるつもりだ。ナオミとガッキーは、先手を討ってマッドドックに飛び掛る。鋭い爪で引き裂くと情けない悲鳴を上げて倒れた。アッという間に4

体のマッドドックを倒したよ。

「ナオミ、強いじゃないか。うわっ！！　くっ来るな、キ、キモイぞ！！」

飛び掛ってきた1体に腰を抜かしたが、釘打ち機の先端を押し付け引き金を引いた。

パシッパシッと乾いた音を立てて釘が打ち込むとマッドドックは、悲鳴を上げて転げ回り、やがて動かなくなった。さすが特別に清められた釘は威力ある。

「はあはあはあ……」

心臓の激しい鼓動と身体の震えが止まらない。冷や汗が肌を伝わって不快だ。

「涼太くん、大丈夫なワケ？」

「ウガガゲン、キガ？」

ガッキーとナオミが来て俺は立ち上がるが足はまだ震えている。必死で1体倒したのに比べて、2人は5体倒したので我ながらちょっと情け無いよ。

「さっさと先に進まないと新手が来るワケ」

「そ、そうだな。立ち止まっていたらヤバイな」

研究所まで約20メートル。一気に走るかと思ったらアラームが鳴った。

「ゲッ！！　今度は20体以上かよ！！　マジヤバじゃん」

くらしの玉を握り締めて俺達は、研究所まで走った。普通の犬に比べて動作が鈍いので余裕で入り口まで辿り着いた。研究所は、蔦の絡まった古めかしい洋館でなくて、三階建の全面ガラス張りで未来的な建物だ。その建物も照明がついていない今は不気味だ。

入り口は開いていたが、マッドドック達が入らないようにロックした。ドアは強化ガラスなので簡単には破れないだろう。ロビーらしくソファと受付のカウンターがあるだけだ。使われなくなって日数が経つのか結構埃が溜まっている。COMPの索敵・暗視モードがなかったら身動きが取れないだろう。

Dr.スリルの秘密研究室は地下三階より下にある為、専用のエレベーターを使わなければならない。最初に地下三階の機械制御室に行ってエレベーターの電源を入れる必要がある。俺には機械制御の知識は無いがデータによるとコンピュータによる完全制御なのでパスワードがあれば専用の端末から操作出来るらしい。現在は予備電源が作動している。

当然、パスワードはメアリのデータに入っている。ロックを解除してから三階にある所長室の専用エレベータで地下に直行だ。問題は異界化して広くなり悪魔がいるので、移動するのにかなり時間を喰う事だ。

「どうか悪魔が出て来ませんように……」

「このナオミ様がいるからノープロブレムなワケ」

「ウガ」

廊下を歩いていると右手にドアが見えるがロックされている。やがて前方の左手側に階段が見えた。階段の脇に何かが落ちている。よく見ると軍隊で使用する戦闘服みたいで6・7人分が床のあちら

こちらに落ちている。更によく見ると自動小銃が落ちている。手にした自動小銃はズシリと重量感がある。

「スッ凄い！！ ホッ！！ 本物だよ」

緊張と興奮で手に汗でいっぱいだ。一応構えて引き金を引いたがカチンカチンと音がするだけだ。銃の詳しい知識は無いけど安全装置は外れていて全弾発砲済みだ。他の銃も同じだった。

戦闘服のポケットを探っても身分証明書らしき物は無い。おそらくどこかの国の特殊コマンド部隊か、企業に雇われた傭兵部隊かも知れない。

「研究所のお宝を手に入れる為、侵入したけど悪魔に返り討ちにされたワケ」

「でも服だけ残っているのは変だよな」

まさか裸になって逃げるとは思えないし、ゾンビ達に襲われたのなら遺体や血の痕があるはずだ。

エネミーソナーはアイコンがゆっくり動いている。ナオミが警戒しながら階段を降りると俺も後に続いた。降りて、やっぱりと言うか下に続く階段が無い。ナビを見ると通路の突き当りに下り階段がある。もし時間制限があったらゲームオーバーだよ全く。

通路を10メートルも歩くと突然、ヘッドバイザーに『DANG ER』の赤文字が現れた。リーダーに3つの赤点が表れた。

「悪魔が出るワケ！！」

「分かった」

目の前に、アメーバー状の生物が3体現れた。色は水色でグニャグニャ動いてちよつと怖いと言うよりキモい。デビル・アナライズ

を起動して確認する。

悪魔名称：スライム

種 族：外道系、外道

ステータス：呪殺・物理・精神・神経無効、火炎・氷結・魔力に弱い

スライムは雑魚キャラの代名詞と言われているけど、それはゲーム内での話だ。目の前にいるヤツはかなり大きく俺なんか簡単に飲み込んで溶かしてしまいそうだ。試しに話しかけてみたがヘッドバスターには意味不明の文字が現れた。

「まいったな、こりゃマジにヤバイ……ここに入った兵隊達もこいつに溶かされたんだ」

表面がグニャグニャなので表情は判らないが警戒しているようだ。ジャイブ・トークプログラムがあるのを思い出し起動させた。ナオミとガツキーには、会話が決裂した時に戦えるように待機させた。

『ニンゲンエサオ……マエカラシノニオイガスルクエン……』

『ハナシガアル。ナカマニナツテホシイ』

俺の言葉がジャイブ・トークプログラムによって特殊変換されるとスライムに反応があった。

『ホウキサマハサマナーカナラバマセキラヨコセ』

アイテムの入った袋から1個取り出すとスライムに放り投げた。

『サマナーキマエガイイナ。ソウダナアト900マツカラヨコセ』

リモコン操作して900と入力すると満足したようだ。

『イイダロウサイ、ゴニツモンダキサマニトツテアクマトハナンダ？』

いきなり哲学的な質問だ。常識で考えると悪魔は人間にとって恐るべき敵だ。しかし悪魔を召喚、使役するデビルサマナーから見れば必ずしもそうとは言い切れない。現に屍鬼のナオミや幽鬼のガツキーは俺の仲魔だからだ。

『ベストパートナーダ』

『ベストパートナー……トモニアユムトイウコトカ……』

何か思案中みたいだ。

『ヨカロウキサマヲシンジテナカマニナロウ』

『ニンゲンノコトバデアイサツシヨウ』

『ワタシハ、スライム。コンゴトモヨロシク……』

スライムがCOMPに吸い込まれると力が抜けた。

「ふう、成功だ」

「へえ、会話もまともに出来ないあのスライムを仲魔にするなんて、やっぱ涼太くん凄いワケ」

「ウガ、サ、スガサマナー……」

屍鬼と幽鬼であるナオミとガツキーも驚いている。ジャイブトーキンって本当に凄いですね。突き当たりにある階段でスライムが現れ、前に3体後ろに2体で囲まれた。

「きゃあー!!」
「ナオミー!!」

上からスライムが落ちてナオミを包み込んだ。ヤバッ!! このままだと溶かされてしまう。

「何なワケこいつ!! ああぁん!! そっそこはダメエエ……イッちゃう」

スライムに飲み込まれて悶えているナオミは、ちよつとエロイッて見てる場合じゃない。

『ヤメロー!!』

『又ウキサマハサマナーカンドウヤラドウホウヲツレテイルナ……ドウホウニメンジテコノバハミノガシテヤロウシキヨウンガヨカッタナ』

「はあはあ……こんど会ったらイチゴゼリーにして食ってやるワケ!!」

中指を突きたてて捨て台詞を吐いた。粘液で全身グチャグチャになっている。

「涼太くん、魔石頂戴なワケ」
「あ、ああ、ほらよっ」

ナオミに魔石を軽く投げた。その後も、スライムが何度も現れたが会話で切り抜けて地下三階の機械制御室の前に辿り着いた。とにかく精神的に疲れたよ全く。

ドアに鍵穴は無く、カードリーダーも無い。0から9まで表示している数字のボタンが付いている。

「涼太くん開かないワケ」

「セキュリティがかかっているからな。暗証番号を入力しないと開かないよ。で、番号は、9719224#3……と」

ヘッドバイザーに表示されている番号を入力するとカチツと音がしてドアは、抵抗も無く開いた。

『見敵必殺！！ スーパーイナズマキイイック！！』

「うおっ！！ なっ、何だ？」

突然、女の子の叫び声？ と共に顔を蹴飛ばされてのけぞる。次々と殴られたような痛みを感じたがドレスの装備効果？ で大した事は無い。何か羽が唸るような音がして通り過ぎた。

「新手なワケ！！」

ナオミとガッキーは構える。どうやら相手は虫みたいに小さいヤツだ。素早い動きなので釘打ち機の狙いをつけられないよ。

『とどめよ！！ 必殺パワー！！ スーパージオダイン！！』

「ウギヤアアア！！」

ガッキーが直撃を受けて倒れた。

「ガッキー！！ クツ、コ、コイツすばしっこいワケ！！」

いきなり閃光が走ったがほんの数秒、偏光フィルターの作動が遅れた為、俺はヘッドバイザーを外して顔を押さえて、たまらず叫ん

だ。

「目があ！！ 目がああ！！」

激しい閃光で目が見えない。おまけに履き慣れないブーツなので
もろに転んでしまった。

『オーラ斬りでやっちゃえ！！ メン、メン、メーメン！！』

「痛い、痛い、やめろ！！ 俺たちは敵じゃない。話せば分かる。
頼む、やめてくれ！！」

俺の声にソイツは飛び回るのをやめて目の前に止まる。4枚の虫
の羽を生やした小人で俺の手のひらに乗りそうだ。外見は鎧みたい
なのを着てヘルメットを被り、右手に剣を持っている。その姿はフ
アンタジー小説に出てくる妖精なのかもしれない。

『へえ、アンタ。アタシの言葉が分かるの？ もしかしてデビルサ
マナー？』

「そうだ。俺はアンタの敵じゃない」

コイツは値踏みするような目で見ていやがる。ナオミは爪を伸ば
して今にも襲い掛かりそうだ。

『ふーん、クズノハでもなさそうだし、見ない顔ね。もしかして新
人？ それなら後ろにいる頭の悪そうな屍鬼をとっと引っ込めて
くれない？ 話はそれからよ』

ナオミは、馬鹿にされ、怒り心頭で爪をギチギチさせて怖いよ全
く。ガッキーは昏倒しているので俺に選択の余地は無い。

「ナオミ。この場は堪えてくれ。なっ頼む!!」

「だけど涼太くんがアイツに誘惑されそうで心配なワケ……」

「俺なら大丈夫だ。そうだ今度デートしよう。な、頼む」

言ってから己の迂闊さを呪った。ナオミは、ニンマリと薄く笑う。

「今の言葉、確かに聞いたワケ。嘘ついたら涼太くんでも絶対に許さないワケ」

俺の言葉に納得すると自分からCOMPに戻ったよ。

『さて、お邪魔虫は消えたし交渉の続きをしましょう。アタシの名前は妖精のチャム・ファウ。アンタの名前は?』

「俺は深町涼太。高校2年生で一応サマナーだ」

『フカマチリヨウタね。んー何か言いにくいからリヨウと呼ぶわ。で、この建物に入り込んだ理由を説明しなさい』

腕を組んで俺を見ている。ナリが小さい癖に態度がデカイぜ。このおチビちゃん。

『何かアタシの事、舐めてるみたいだけど、次にそんな事思ったらきつつい電撃食らわすからね』

ゲッ!! なんて俺の考えバレたんだ?

『厚化粧してもリヨウの顔に出てるから分かるわよ。で明瞭簡潔に述べよ。嘘ついたら電撃よ』

コイツに隠す理由は無いのでヴィクトルから依頼の件を全て話した。

『ふーん、なるほどね。ドリーカドモンを欲しがるのは、あのおっ
さんか邪教の館の爺さんくらいよ。まっ、リヨウの顔は嘘について
いないから信用するわ』

ウンウンと腕を組んで頷いている。本当、コイツ態度がデカイ。

『そこで物は相談だけど、アタシの依頼を受けてくれるなら一時的
に仲魔になってあげる。どうよ？』

第10話 依頼・中編（前書き）

エリート・ピクシーは悪魔合体で生まれたピクシーで能力がアップしています。以前契約していたデビルサマナーはアニメマニアだったのかも知れません。

第10話 依頼・中編

『そこで物は相談だけど、アタシの依頼を受けてくれるなら一時的に仲魔になってあげる。どうよ？』

妖精である自称チャム・ファウ？ にどうよと言われた。

「先に依頼の内容を話せよ。話はそれからだ」
『んー確かにそうね。分かったわ』

話さないと俺が応じないのが分かると肩をすくめた。

チャム・ファウの依頼とは、この研究所のどこかに捕らわれている仲間の救出だそうだ。

現在、妖精達は代々木公園内に人間界へ悪戯？する拠点を築いている最中だが、仲間の1人が偵察中に行方不明になった。当初、他の悪魔に殺されたのだと思われたが、近所の地霊達によると、関西弁を話す漫才師みたいな人間に捕まったらしい。コネを使つてこの研究所を見つけたが、異界化して大量の悪魔がいるので並のピクシィでは近づけない。高位の妖精はマグネタイトの確保が不十分な現在、代々木公園から一步も動けないとの事だ。

『そこで、経験、場数を踏んだエリート・ピクシーであるこのアタシが派遣されたのよ。ここまでの話は理解出来たかしら？』
「なんとなく理解出来た」

チャム・ファウは小さい身体をフルに生かして、空調の換気ダクトを抜けて各部屋を調べたが仲間は見つからない。後は地下の秘密研究室だがエレベーターが動かないと結界が解除出来ない。困って

いたところに俺達が現れたのだ。

『で、どうよ。アタシの依頼を受けるの？ 受けないの？』

よほど困っていたのか強気の口調と違って目は潤んでいる。そんな顔をされたら断れないじゃないかよ全く。自分でも呆れるくらいのお人好しだと自覚している。それにこの妖精は、可愛いかなりのアニメ好きと見た。俺は溜息をつくと肩をすくめた。

↓？ 受ける

？ 受けない

？この場で戦う

「分かったよ。依頼は引き受ける」

『やったー！！ 嬉しいな』

嬉しいのか飛び回ると俺の頬にキスした。よせよ照れるじゃないか。

『エヘヘ、お礼のキスよ。では改めまして、アタシは妖精のエリート・ピクシーであるチャム・ファウよ。短い期間だけどよろしくね』

俺達も少しでも戦力が欲しいからまあいいか。

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ。で、成功の報酬は？ タダ働きは勘弁な」

これはサマナーとして当然の事だ。要求しても罰は当たらないよ。

「うん、報酬は人間界へ遊びに来ている女王ティーターニア様が、直

々に下賜されるから楽しみにしてね」

「ティーターニアって言ったら『真夏の夜の夢』に出てくる妖精女王の名前じゃないか!!」

そんな大物の名前が出てくるとは思わなかったよ全く。これで報酬が楽しみだ。

「もしもだけど、その捕まっている仲間がすでに研究材料にされ、ホルマリン漬けとかにされていた場合はどうするんだ？」

「その場合はアタシ達妖精、魂の故郷バイストンウエルじゃなくてフェアリーランドに戻るだけよ。ま、霊体のダメージが大きいからすぐ人間界へ悪戯しには来れないけどね。帰還した連絡は受けていないから、こちらで実体を保っているわ」

なるほどね、俺の知らない事ばかりだよ全く。未知の世界を覗いた感じた。

「あつ!! いったけない、ガキの回復するの忘れていたわ」

ガッキー哀れなヤツ。俺もすっかり忘れていたよ。チャム・ファウから暖かい光が出るとガッキーは回復したが怒って暴れた。

「ゴメンゴメン、そんなに怒らないでよ。リヨウの仲魔になったからアンタとはドーリョーってわけ。短期間だけど一緒にがんばろうね。チュッ!!」

「ウガ」

投げキッスで納得したみたいだ。安い、安過ぎるぞガッキー。

「それでリヨウ、これからどうするの？」

「地下の秘密研究室に行く為には、ここで専用エレベーターのロックを解除しないと、所長室に行っても無駄だからな」

機械制御室は主電源が停止中で、わずかな非常灯がついているだけだ。ヘッドバイザーが無いと暗い。今は予備電源でセキュリティが動いている。このままだと解除出来ないので主電源を復旧させるしか無い。それにはパスワードを打ち込む必要がある。

「じゃ、早くそのパスワードってヤツを打ち込んでよ。ほらっ早く！！」

俺は中央にあるコンソールデスクの椅子に座り、モニターを見るとパスワードの入力画面が現れている。COMPのデータにあるパスワードを打ち込む。チャム・ファウが急かすが、こんな時は慌てたら負けなのよ。うっかり間違えたらセキュリティ・ロックがかかってしまう。

ここまで調べたメアリさんはタダ者ではない。もしかしてメイドは仮の姿で実はスーパーハッカーなのかもしれない。

『パスワード認証、システム・オールグリーン、主電源を待機モードから復帰します』

「やった成功だ」

低く唸る音と共に部屋が明るくなって俺は、直通エレベーターのロックを解除した。

「問題は、ここから三階までは異界化してかなり距離がある。地下はスライムだけだから会話で戦闘は回避出来るけど、チャム・ファウ。上の階はどんな悪魔がいるんだ？」

「うーんとね、犬と白い服を着た屍鬼がいるけどあいつら雑魚だから、あつそうだリリムがいたから気をつけてね」

夜魔リリム。アナライズ・データを見ると魔法攻撃、特にステータス異常を引き起こす攻撃を得意とする女悪魔だ。今の俺達には中ボスクラスの敵だ。

「アタシの電撃もアイツには効かないから厄介なの。氷結が弱点だけど、アタシはブフを持っていないし、リヨウの仲魔には期待してないから、遭遇したら会話で回避するか逃げるしかないわね」

ブフとは、氷結属性の攻撃魔法で決まると凍結するので危険だ。他にもアギ（火炎）、ジオ（電撃）、ザン（衝撃）があるとの事だ。

俺達は機械制御室を出ると三階に向かった。一階に上がるまでスライムの群れと遭遇したが会話で回避する。運が良いとチャクラドロップや魔石をくれたりする。

二階に上がると腐臭が漂い、ゾンビ達が低い唸り声を上げてノロノロと俺達に向かってくる。血と肉片で汚れた白衣を着たゾンビは、ここの所員だったのかもしれない。

「哀れなゾンビに……永遠の安らぎを」

一瞬だけ黙祷した。少し前の俺だったらキモいよと言って怯えただろう。今はチャム・ファウ達がいるから恐怖感は多少薄れている。

彼女の作戦はギリギリまで引きつけるとマハ・ジオンガ（電撃属性の範囲魔法）で一掃し、残ったヤツを俺達が片付ける。

「必殺パワー!!! サンダーブレーク!!!」

チャム・ファウが叫ぶと右手の人差し指から発生した雷の嵐が、ゾンビ達に大ダメージを与えると、俺とナオミ、ガッキーで感電して動けないゾンビの後始末する。ナオミは不満で文句を言う。

「妖精なんかの言いなりになるのは、何かムカつくワケ」

鋭い爪でゾンビを切り刻み喉を食い千切る。俺はゾンビに釘打ち機でとどめをさす。

「負担が減ったんだから文句言つなよ。クッ！！ この野郎！！」
「ウガ！！」

書類棚の影に潜んでいたゾンビが俺に襲い掛かってきたが、ガッキーの攻撃であっさり倒れた。

「サンキュー！！ 助かったよ」
「リョウ、キリがないから一気に三階に行くよ！！」
「了解、それでも食らえ！！」

くらましの玉が炸裂すると光に包まれ、俺達は一気に通路を走って階段を上がると三階に来た。

「うっ！！ これは？」

通路には大量のゾンビが倒れて血で染まっていた。腐臭が漂い、肉片が飛び散り、内臓がはみ出ていたりする。頭が割れて脳が出ていたり顔が半分無いのとした。あまりにも無残な姿と臭いに吐き気がこみ上げて口を押さえた。

「ちょ、ちょっとリヨウ。どうしたの？ 顔色悪いよ」

チャム・ファウが心配してくれるが、我慢出来ず胃の中の物を吐いてしまった。

「食べるにしても、もう少し上品に食べればいいワケ」

ナオミが背中をさすってくれてありがたいが、それちょっと違うぞ。

「もう大丈夫……先を急ごう。それにしてもどうなっているんだ？」
「こいつら共食いしたみたいね。でも変だわ、屍鬼はそんな事しないけど」

考えても仕方ないので進む。通路や開いている部屋を見るとゾンビは共食いで倒れている。その後は襲われず所長室の前に来た。入ろうとするとチャム・ファウが俺の耳を引っ張る。こらっ痛いぞ。

「ちょっと待って、中に人の気配がするよ」

「まさか、リリムがいるのか？」

「違うよ。リリムだったら強力な魔力を感じるから。部屋にいるのは人間よ」

「コイツの言ってるのは間違い無いワケ。それも1人」

研究所は無人のはずだけど、もしかしてデータ目当ての賊？ かもしれない。こっちは俺を入れて4人で、数ではこちらが有利だ。どんなヤツなのか分からないのでかなり緊張する。

ドアをゆっくり開けて部屋に入ると立ち止まってしまった。

「ようこそ、お嬢さん達、待っていたわ」

女が1人、机に腰掛けて腕を組み、俺達をにこやかな顔で見ている。

立ち上がるとゆっくり近寄ってくる。年齢は20代後半か30代前半みたいだ。ウェーブのかかった茶色に染めたセミロングの髪形でかなりの美人だ。顔立ちは整っていて口元にほくろがある。着ているのは、身体にピッタリとフィットした光沢感のある黒のジャンプスーツで腰には太いベルトを巻いている。フロントファスナーを首元まで閉めて豊かな胸が苦しそうだ。

「そ、それ以上、近寄るな!!」

俺は釘打ち機を構えると、ガツキー達も油断無く身構える。女は戦う意思が無いのを示す為、両手を上げて立ち止る。

「私はあなた達の敵じゃないわ。話くらいさせてよ」

「嘘よ、絶対この女何か企んでいるワケ」

ナオミがヒソヒソと言う。こんな場所にいるのが怪しい。

「アンタの名前とここに来た目的は何だ？」

「私はフリージャーナリストの『エンジェル』。『この業界』ではその名で通っているわ。ここに来たのは、マッド・サイエンティストのDr・スリルが行なった人体実験の物的証拠の入手よ」

「どうやって三階まできたのよ。アタシが来たときはアンタはいなかったわよ」

チャム・ファウが油断無く尋ねる。

「上からよ。上」

俺達は顔を見合わせた。

「グライダーよ。エンジン付きのグライダーで屋上に降りてからここに来たのよ。でも運が良かったわ。あなた達がエレベーターの口ツクを解除してくれたおかげで、機械室に行く手間が省けたから感謝するわ」

上からって、アンタどこかの怪盗かよ。無謀って言うか異界化している研究所へよく無事に降りれたな。

「私からも質問してもらおうわ。素敵なドレスを着ている『お嬢さん』はデビルサマナーね。一緒にいるのは仲魔の妖精ピクシーと幽鬼ガキに屍鬼リビング・デッドかしら？ 顔に似合わずいい趣味しているわね」

「なっ何でそれを……」

まさか、この女もデビルサマナーかよ？

「クスッ、『蛇の道は蛇よ』この業界にいと色々コネがあつてね、表では手に入らない情報も集まってくるのよ。お嬢さんの名前と目的は？」

ここで本名を名乗るのは絶対にヤバイ。幸い、俺を女と誤っているから適当な名前を名乗るか。

「リョーコだ。この世界ではリョーコで通っている」

「リョーコ……ね。私の情報にその名は無いわ。もしかして新顔か

しら？」

「それはアンタの想像にまかせる。依頼でここにあるモノを手に入る為、来ただけだ」

女の笑みが深くなった。俺達にゆっくり近寄る。

「どうやら利害が一致しているみたいだから『私に』協力して下さるかしら？」

「もし断つたら……」

「ふふ、その前にあのゾンビ達が共食いした理由が分かるかしら」「そんなの知らないよ」

「本当に素敵なドレスね……羨ましいわ。触らせてもらえるかしら？」

「リヨウ！ 騙されないで！！」

チャム・ファウが女の企みに気がついたが俺の反応が遅かった。一瞬に背後に回られると左腕を捻られ、喉にナイフが突きつけられて身動きが取れない。うっかり釘打ち機を床に落としてしまった。

「形勢逆転ね、おっとピクシーちゃん。魔法を使ったらこの子の喉をかき切るわよ」

「クツ！！ 卑怯者！！」

『ハッイ、屍鬼ちゃん。動いちゃダメ・ヨッ』

「キャッ！！ 何なのアンタ？ 離すワケなの！！」

いつの間にか蝙蝠みたいな羽を持ち、白いレオタード姿のリリムが現れて、ナオミの背後に回って左腕を捻り上げた。

「クソッ！！ 離せよ！！ こいつ！！」

「あらあら、お嬢さんが男みたいな口を叩くと下品ですわよ。うふふ」

こんな女に一杯食わされて悔しいよ。畜生。

「リリーちゃんご苦勞様。言う事を素直に聞いていればこんな目に遭わなかったのにね」

「お、俺達を殺すつもりか？」

「私が殺し屋ならとくに喉をかき斬ってるわよ」

「リリムなんか連れているなんて、アンタやっぱりデビルサマナーなのね！！」

チャム・ファウが叫ぶとニツコリ笑う。

「前にも言ったけど、私はサマナーじゃないわ。リリーちゃんは知り合いのサマナーに頼んで、借りているのよ。ゾンビ達が共食いたのは、この子のテンタラフーと言う魔法のおかげよ」

「テンタラフーって何だ？」

「敵全体にダメージと混乱を与える精神魔法。それなら納得できるワケ」

「さて、話の続きだけどお嬢さんの依頼主と内容を教えてくださいさるわね？」

耳に息を吹きかけるな。ゾクゾクするよ全く。俺に選択の余地は無い。

「依頼主は業魔殿のヴィクトルからで内容は、ドリーカドモンを手に入れる事と、チャム・ファウの仲間の救出だ」

「ホテル業魔殿……あの国籍年齢経歴不詳の男か。なるほどね」

女が俺の腕を離すとリリムもナオミの腕を離した。

「この部屋のどこかに隠されている専用エレベーターに乗って、私達と同行してもらうわ」

見えるのは所長の大きな机に来客用のソファとテーブルだけで壁際の書類棚には何も無い。

「ここに隠し扉のスイッチがあるからこれを引けば現れるわ」

書類棚左下の角にスイッチがある。それを押してから書類棚を押すとエレベーターのドアが現れた。

第11話 依頼・後編

エンジェルと名乗る女の言葉に俺達は顔を見合わせた。

「どうしたの？」

「こんな場合は、2人だけで行くかと思ったから意外だなと思ったので」

「あのDr・スリルの研究室に簡単に入れると思っていたら甘いわよ。サマナー嫌いの男が何か罠を用意しているわ」

エンジェルは肩をすくめた。フロントジッパーを腰まで下げると胸の谷間がはつきり見える。かなりの巨乳で思わず目が点になったよ。

「ふう、この方が楽だわ。あたしが生き残りの所員から聞いた話では、特殊な悪魔が結界を張っているのよ。悪魔の種族はその男でも分からなかったけどね」

「じゃあ、その悪魔を倒さないと研究室に入れないのかよ……」

「あたしとリリーちゃんだけではさすがに厳しいわ。それにお嬢さん達だけでもまず無理ね」

「それで行けと言うのか……ちょっと仲魔と相談させてもらえないか？」

「ええ、いいわ。言っておくけど他に選択肢は無いわよ」

この女、かなり胡散臭い。チャム・ファウも耳元で囁く。

「その悪魔を倒すまでは味方ね。問題はその後よ」

「同感。あの女、何か企んでいるワケ」

「でも大丈夫よ。アンタ達では無理だけどあの女、アタシを普通の

ピクシーと思っているからうまく出し抜けるわよ。それにアタシには切り札があるしね」

「切り札？　どんなワケ？」

俺も非常に気になるが、ここは場数を踏んでいるチャム・ファウを信用するしか無い。

「うふふ、アイツを驚かすまでは内緒。アタシが仲魔になったからリヨウは幸運よ」

相談の結果を女に話した。

「今のところはアンタを信用する事にした」

「ふふ、そう言うと思ったわ。よろしくね」

手を差し出してきたので俺は握手をする。女の手にしてはやけにタコがあるよこの人。

「で、アンタは他に武器は持っていないのか？」

「心配は無用よ。ほらこのとおり」

机の影からバッグを出して中からショットガンを取り出した。この女、何者だよ。

「では地下の研究室へ行きましょう」

リリムが先頭に女、俺達の順に乗る。女がボタンを押すとチンと音がしてドアが閉じる。エレベーターはゆっくりと降下し始める。地下に着くまで時間が長く感じた。

「言い忘れたけど到着したらこのエレベーターは、悪魔を倒すまで動かないからね」

「なっ何だって！！ ふざけんなよ！！」

さすがの俺も腹が立つたが、今更、どうにもならないので拳をグツと握り締めるしかない。

やがて到着してドアが開いたので俺達は降りた。ここはホールらしく奥にドアが見える。空気が冷たく、何か殺気みたいなのを肌を感じる。エネミーソーナーは赤色で激しく動いている。

女の言う通り閉じたエレベーターのドアは開かない。

「リョウ、あのドアの向こうに悪魔が待ち構えているよ」

「ああ、分かっているよ」

「あなた達、覚悟を決めて行くわよ！！」

エンジェルはショットガンを構えるとドアを開けて入ったので俺達も後に続いた。

秘密研究室は広く、最新鋭の電子機器設備で埋め尽くされていた。奥の方に円筒形のカプセルらしき物が見える。エンジェルはベルトに付けていたポーチからデジタルカメラを取り出して撮り始めた。

「凄いわ、後は目的のディスクを手に入れるだけだわ」

突然、見えない壁が現れて俺達を遮った。どこからか女の声が響いた。

『ホホホ、餌に釣られて愚かな獲物が妾の糧になる為に来たよのう。ホホホ』

凄まじい魔力が一点に集中して俺達の前に悪魔が1体実体化した。

「ゲッ！！　こ、こいつは！！　怪人蜘蛛女かよ……」

「こ、こいつ何なワケ？」

「リヨウ！！　そこに隠れて、早く！！」

上半身は全裸で人間の若い女と同じだが下半身は10メートル近くある巨大な斑蜘蛛だ。股間の部分に口があって鋭い牙が見える。足をM字に開いたみたいに足がクネクネと動いてキモいよ。途端に周囲がゆらめいたかと思うと蜘蛛の巣が張り巡らされていた。これでは迂闊に動けない。

黒色の前髪が長いので目が見えない。

「妾は、『女郎蜘蛛』。スリル殿との契約でこの場を守護するモノじゃ」

「私はエンジェル。アンタを倒せば解決する事よ」

エンジェルがショットガンを構えて気楽に言う。

「ホホホ、強気な事よのう。妾を上にいる屍鬼と同じと思ったら大間違いじゃ。ここまで来たのはお主達が初めてじゃ。褒美にうおっ！！」

言い終わらぬ内に女がショットガンを発砲すると、リリムが唄いだしたが蜘蛛女に変化は無かった。

「そ、そんな効かないなんて……」

「愚か者！！　この妾にそんな豆鉄砲と子守唄が効くと思ったか！！　蜘蛛の網を食らうがよい」

エンジェルの顔が強張った。チャム・ファウの予想によると、リ

リムの子守唄で眠らせてから永眠の誘いでトドメを差すつもりが、その目論見は潰された。蜘蛛本体の口から粘着性のある糸が吐き出され、避けようとしたが網に捕らえられ、抵抗するが引き摺られた。リムが必死に助けようとするが蜘蛛女の足に弾き飛ばされ、身体が糸に絡みついて動けない。

「しまった!!」

『ホホホ、まずはお主から喰らうてやる。覚悟するのじゃ!!』

エンジェルは撃とうとしたが蜘蛛の足に弾かれ、ショットガンは踏み潰された。見殺しには出来ない。ナオミとガッキーは襲いかかったがダメージを与えられない。

『雑魚は引つ込んでおれ!!』

「キャッ!!」

「ウガ!!」

このままだとやられる。俺が隠れている場所からは、距離があるので釘打ち機が全く役に立たない。うかつに近寄ると蜘蛛の吐き出す糸と足にやられてしまう。

「もうっ!! あのリリム、何でジオンガを使わないのよ?」

俺の左肩にいるチャム・ファウがイライラしている。ナオミとガッキーは攻撃するがダメージを与えられない。幸い2人には眼中にないみたいだ。

蜘蛛女は俺を後回しにするつもりだ。突如、俺の身体が温かさに包まれた。どうやら俺以外も包まれたようだ。見るとリリムが何か唱えている。

「これは回復魔法のメ・ディア！！　まさか？　リヨウ！！　あの子をアナライズして早く！！」

「わ、分かったよ」

訳分らず俺はリリムをデビルアナライズした。

「それであの子のスキルにジオンガはあったの？」

「いや、無いよ。スキルは子守唄、永眠の誘い、マリンカリン、テントラフー、メ・ディア、ラク・カジャにスク・カジャとブーラだったよ」

俺の言葉にチャム・ファウはやっぱりと言う顔をした。

「あのリリムを使役しているサマナーは何考えているのよ！！　もう信じられないっ！！」

『ホホホ、下等な妖魔の分際で妾に楯突くとは愚か者よのう！！　氷漬けになるがよい！！』

蜘蛛女の上げた右手に氷の塊みたいなのが現れると、動けないリリムに叩き付けた。

「キヤアアア！！」

「リ、リリーちゃん！！」

リリムは氷漬けになると蜘蛛女の足で粉々に砕かれた。あまりの凄まじさにエンジェルは呆然としている。そして蜘蛛女の前まで引き摺られた。エンジェルの顔は恐怖のあまり引きつっている。

「お、お願いだからあ……　かか勘弁しよう……」

『ホホホ、恐怖で怯える人間は真に愉快。妾の糧になるがよい。ホ

ホホホ」

「嫌！！ 嫌嫌！！ 嫌嫌嫌嫌！！ たっ助けて！！」

蜘蛛本体が大きな口を開けると女の左足に噛み付いた。

「ギヤアアアアアア！！」

断末魔の叫び声と女を噛み砕き咀嚼する音が響いた。

おい、嘘だろ……そんな……生きながら食われるなんて……そんな、これは夢だろ……なあ

あまりの惨さに気が遠くなりかけた。肉を喰らい骨を噛み砕く音が吐き気を起こさせた。見てしまったら気が狂ってしまつよ……

「リョウ！！ しっかりして！！ このままだと次はリョウの番だよ」

「だ、駄目だ！！ おっ俺も食われちまうよ……うっ……助けてよ姉ちゃん！！」

もう吐き気と半泣きでどうにもならない。

『ホホホ、恐怖で味付けされた人間は美味よのう。ホホホ黒衣の女、次はお主じゃ。コソコソ隠れても匂いで分かる。楽しみに待つがよい。ホホホ』

蜘蛛女は高笑いをする。と巨体を俺の隠れている方へゆっくり動かし。その動作がキモい。

「リョウ！！ アンタおとなしくアイツに食われたいの！！ ナオ

ミヤガツキーが必死になって戦っているのにアンタは泣きべそかいているだけなの？」

チャム・ファウのビンタと叱咤が俺に落ち着きを少しだけ取り戻させた

「そ、そうだよな。でもどうすりやアイツに勝てるんだよ」

「リヨウはアタシが死なせないよ！！　とにかくアイツの行動を封じればリヨウ達にも勝機があるよ」

「でも、どうやって？」

「アタシが囹になって動きを封じるからその隙に皆で戦うのよ。でもガツキー達を回復させるのが先だからね」

「わ、分かった。なんとかやってみるよ」

チャム・ファウは俺の肩から離れて蜘蛛女に向かった。

「コラッ！！　その変態女郎蜘蛛！！　弱い者いじめはやめなさい！！」

「なんじゃ？　ふん、ただのピクシーか。ホホホ、下等な妖精の分際で妾に楯突くとは、力の差が分からぬと見えるのう。コソコソ隠れている黒衣の女の仲魔らしいが、妾にも慈悲はあるぞえ。見逃してやるからとつと失せるがよい」

「変態蜘蛛女。アタシの外見だけで判断したアンタは負けよ！！」

勝利を宣言するように指を突きつける。

『なんじゃと！！　生意気な小娘め、まずお前から食ってやる！！』
「バーカ、アンタみたいなウスノロの間抜けなんかに捕まらないわよーだ。アツカンベーのベロベロバー！！」

挑発された蜘蛛女は両手を振り回し糸を吐きかけるが、サイズ補正なのか捕まえる事が出来ない。俺はチャンスを待っただけだ。チャム・ファウは回避しながら両手の人差し指を蜘蛛女に向けた。

「その身に刻め！！ 必殺パワー！！ サンダーブレイク！！」

『ギヤアアア！！ かつ身体が痺れて動けない……な、何故じゃ？ ピクシー如きがジオダインなど最上級魔法を使えるのじゃ？』

「今だ！！ これでも食らえ！！」

俺は飛び出して釘打ち機を構えると清められた釘をひたすら打ち込む。チャム・ファウの言う通り、反撃して来ない。ナオミとガツキーは鋭い爪で引き裂き食らいつく。

『黒衣の女、屍鬼めエ、なめるなあああ！！』

「こいつはお釣りだ」

蜘蛛女が襲い掛かって来たが、咄嗟にくらましの玉を投げつけた。

『おおおお！！ 目が、目があ、目がああああ！！ おのれ！！ 小賢しいメスザルめ！！』

「ピイクシイイイ……ビイイーム！！ フルツパワー！！」
『ウギヤアア！！』

チャム・ファウの電撃魔法と俺達の攻撃は、一種のハメ技みたいなもので蜘蛛女の体力を徐々に削り取る。

『何故じゃ！！ 何故、妾が攻撃出来ぬのじゃ？ おのれ！！ 小賢しい妖精めが……貴様さえいなければ……今頃……口惜しや……』
「ふふん、あいつかなり弱ってきたワケ。いい気味」
「ザマミロ」

俺が見ても蜘蛛女がかなり弱っているのが分かる。釘打ち機で60本以上打ち込んだからな。

「リヨウー!! 油断しないで!!」

『黒衣の女!! ブフーラをその身に受けるがよい』
「しまっ!! 冷てえー!!」

うつかり直撃を受けたが凍結はしなかった。例えるならバケツでいきなり水を掛けられた程度だ。

さすが黒蝶ドレスだ何とも無いぜ、助かった。

「リヨウー!! そろそろトドメを差すよ」

「わかった」

「涼太くん。餓鬼玉を使うワケ!!」

「サマナツカエ」

俺は感電して動けない蜘蛛女の本体の口に放り込んだ。すぐには変化が現れない。

『お主、何を飲ませたのじゃ?』

「ただの飴玉だよ」

その時、蜘蛛女に異変が起こった。身をよじらせて苦しみだしたのだ。

『おおっ!! かつ身体が……身体の中で何かが……暴れる……おっ
つおのれ!!』

蜘蛛女は苦悶の表情を浮かべ、巨体が激しく痙攣している。やっ

ぱり外側が頑丈でも内側は脆い。

「蜘蛛女！！ これでダウンよ。必殺！！ エレクトリックガー発射
！！」

『ウギアアア！！』

チャム・ファウのジオダインで動かなくなった。

『む、無念じゃ、妾がこんな……輩に倒されようとは…… スリル殿、
契約を守れず申し訳……』

蜘蛛女の身体が溶けるように崩れだして消滅し、それと同時に周
囲も元の研究室に戻った。

「勝ったのか……俺達……本当に……」

信じられない夢みたいだよ。俺はその場にヘナヘナと座り込んだ。

「ふふん、このアタシがいたから当然よ」

「やったワケ！！」

「ウリリイ！！ カッタ」

ナオミが抱きついてきた。勝てたのは嬉しいが、エンジェルを見
殺しにしたので手放しでは喜べない。

「リョウ、過ぎた事を考えても仕方無いよ。あの女はアタシ達も始
末する気でいたからこれで良かったと思うしかないわよ。クヨクヨ
するよりほら、スマイル、スマイル」

「妖精の言う通り。全滅するよりましなワケ」

そうかもしれない。もし俺が強かったら『助けられたかも』と思うと何かやりきれなくなるよ全く。

しばらくは、あの女の顔が夢に出てきそうだ。

「そうするよ。チャムがいたから俺達は勝てたんだ。その、ありがとう」

俺は深々と頭を下げた。もし彼女がいなかったら俺達は今頃、蜘蛛女の腹の中だろう。

「ちょっとそこまでしなくても、アタシもリヨウがいなかったら、ここまで来れないからお互い様よ」

そう言ってくれると少し気持ちが楽になるよ。ふと蜘蛛女がいた場所に光る物が1個落ちていた。

拾って手にすると宝石みたいだ。本物の宝石なんて初めて見るよ。さらに良く見るとカード？も落ちていた。

「凄い、アメジストなワケ」

「リヨウ、運がいいわね。宝石は悪魔との交渉で必要になるから、売らないで持っているといいよ」

「へえ、そうなんだ。知らなかったよ」

チャム・ファウの話では悪魔との交渉や仲魔へのギフトの他に、ある店では宝石と引き換えに特殊なアイテムと交換するのに必要になるらしい。実はチャム・ファウにお礼にとあげるつもりだったのだ。

しかし貴重な呪殺攻撃アイテムの餓鬼玉をここで使ったのが惜しい。

「さて、結界も解けたし、この部屋のどこかに仲間が捕らわれているから探すの手伝ってよ」

「もちろんだ。って、こんな時間かよ!!」

時計を見ると22時半を過ぎていた。本当、時間が経つのが早い。明日、学校があるんだよ。

研究室は広いが仲間のピクシーはすぐ見つかった。手術台の上に大きな鳥籠が置いてあり、その中にいた。鍵を壊すとピクシーは飛び出してチャム・ファウに抱き付き大喜びで飛び回った。

チャム・ファウの依頼はクリアした。後はヴィクトルの依頼の物を手に入れるだけだ。二手に別れて探すがそれらしい物が見つからない。

「リョウ!! 見つけたよ」

「あつても、データの画像とは違うな……」

円筒のガラスケースは泡立つ青色の液体で満たされ、『人形らしいモノ』が浮いている。

良く見ると人形と言うより少女みたいだ。全裸で身体のおちこちにチューブが差し込まれていた。死んで標本になっているより、眠っているようだ。他を捜していたナオミも見つからないと言う。

「手ぶらで戻るより、この少女?を連れてヴィクトルに調べてもらうしかない」

問題はどうやってガラスケースを開けるかだ。叩いてみると分厚い強化ガラスで簡単には割れない。

端末からではパスワードの入力が必要でCOMPを使って解析す

るのは時間が掛かる。

「ふふん、あの程度のガラスなら壊すのは簡単よ」

「いやな予感がするけど……他に方法が無いし頼むよ」

チャム・ファウの指先から稲妻が走ると音を立てて簡単に割れて青い液体が床にこぼれた。

突然、警報音が鳴り響いた。同時に照明が落ちて非常灯に切り替わった。

「なんなワケ？」

「ま、まさか……！」

『緊急事態の発生により、エレベーターを封鎖しました。ラボラトリを焼却後永久封鎖します』

「とっ閉じ込められた……！」

俺達はホールに向かったがドアが開かない。ジオダインで壊して出たがエレベーターのボタンを押しても開かないよ。これがトラップか？ ど、どうしよう。

「うわっ……！ 閉じ込められちゃったよ」

『5分後に焼却開始します』カウントダウンが始まった。

「絶対絶命なワケ……！」

「ウガ、ナムサン……！」

俺達は慌てまくりだがチャム・ファウは落ち着いていた。

「リヨウ、アンタ達落ち着きなさいよ」

「こつこれが落ち着けるかよ！！俺達焼け死んじゃうよ」

「リヨウは幸運よ。アタシがいるから」

「そんな事言っただって、どこかのアニメキャラみたいに瞬間移動が出来るのなら別だけど……」

「ふふ、出来るって言ったらどうする？」

希望が見えた。一瞬、チャム・ファウが小さな女神に見えたよ。

「このアタシはトラポートと言うスキルがあるのよ。結果が解除されたから脱出出来るわ。ただし、アタシの知らない場所へ転移は無理よ」

「脱出出来ればどこでもかまわないよ。あっそうだ、チャム・ファウは業魔殿を知っているか？」

「もちろんよ。アタシは合体で生まれたから知っているわ。あの無口で無愛想な造魔がいるホテルでしょ」

本当にビギナーズ・ラッキーだ。これでチャム・ファウに頭が上がりえない全く。

「代々木公園に戻りたいけどまっいいわ。あの人形？も一緒にここから脱出するわよ」

「無理言つてすまない。ありがとう」

謎の少女を抱き上げると俺達は研究室から無事に脱出した。瞬間移動した時の感覚は、例えるなら高層ビルのエレベーターで急上昇してから急に下降する感覚に似ている。

目の前は業魔殿の広間だ。遅い時間なので間接照明の淡い光が周囲を照らしている。

『リヨウ、着いたよ。懐かしいわ、ここに来るのは何年振りかしら』
「チャム、ありがとう。その……」

『リヨウの言いたい事は分かるよ。このまま仲魔でいてくれて事でしょ。アタシもリヨウ達が入ったから一緒にいたいけど、それだとリヨウがアタシに頼りっぱなしになって成長しないから将来、苦労するわ』

うつ!! 正論なので言い返せないよ全く。

「地道に経験を積んでレベルアップしろってか……先が長いよなあ」
『悪魔は【己より弱き者】の仲魔にはならないからね。今回は特殊な例外よ。リヨウは素質があるから、アタシが以前契約していたサマナーより強くなるよ。大変だけど頑張ってね』

チャムは俺の唇にキスをすると仲間と一緒に消えた。とたんに寂しさに襲われた。

「騒がしいヤツだったけど、いなくなると何か寂しいワケ」

「そうだよな。ナオミ、ガッキーお疲れ様。今日は助かったよ」

「お疲れ様」

「ウガ」

2人を帰還させて、マグネタイトの残量はギリギリだった。いつの間にメアリさんがローソクの光で揺れる燭台を手にして立っていた。

「ご無事に戻られましたね。ヴィクトル様がお待ちしております」

メールが4件届いています。

黒井日菜子様から

> 初依頼は達成出来たかしら。会って直接話したい事があるの。
じゃまた学校でね。

倉橋一也様から

> 涼、如月さんと同じ仕事場でのバイトが羨ましいぜ。あの人、美人でスタイルが良くて俺のマジ好みなんだ。タケのやつには内緒だぞ。忘年会があつたら俺も誘えよ、なマジで。それとタケから冬コミの話があつても断つたほうがいいぞ。俺は家族で田舎に帰るから参加は無理だけど、お前はマジで女装のコスプレさせられるぞ。前のアレが大好評だったらしくてよ。俺は警告したからな。それかな病院には行ったのか？ヒロ子さんの怖さは知っているだろ。

武原直之様から

> よう、バイトは大変だったか？ 給料もらったら俺達に奢れよ。ところで大事な話なんだが周さんのサークルが今度の冬コミに当選してな、年末なのかメンバーの何人かが仕事や転勤とかで参加出来ないらしい。そこで俺が助っ人で手伝う事になった。で、お前にも手伝って欲しいんだ。佐藤や倉橋達には断られたんだ……あいつら……って仕方がないよな。詳しい事は電話で話すよりも学校でな。

天馬ヒロ子様から

> 近い昔、心優しい白衣の女王、ヒロ子は、壊したいほどかわい
い王子様がお城に訪問するのを待っていました。けれど待っても来
やがりません。そこで手紙を出しましたが生意気にも無視しやがつ
たようです。そこでヒロ子女王はバッチグーなアイデアがオツムに
点灯しました。来ないなら自分が漆黒の馬車でとっとと強制連行す
れば即解決じゃねと。そして逃げないように王子様の目と耳を潰し、

四肢を切断して首輪を着けました。それから王子様はヒロ子女王の激しい攻めを受ける日が続くのです。めでたしめでたし。

第12話 報酬

「ご無事に戻られましたね。ヴィクトル様がお待ちしております」
「俺達が来たのが良く分かったね」

俺の問いにはメアリさんは答えず、地下への階段に向かったの
後に続く。俺が抱いている少女は眠っているが時々何か呟いている。
俺、炉離じゃないけどかわいいよ。

「業魔殿へヨーソロ。無事に戻ったな。その人形は？」

2人は俺の服装に何も言わない。変だと思わないのかよ全く。ヴ
ィクトルに研究所で起きた事を報告した。

「申し訳ありません。結界に阻まれて悪魔には気づきませんでした」
メアリさんは俺に謝罪した。まあ何とか戻れたから気にしていな
いですよ。

「ふむ、ドリーカドモンは無かったか。その人形……少女からは人
ならざる気を感じる。ふふ、土塊の人形よりも興味深い」

眠っている全裸の少女を見つめて含み笑いするヴィクトルに思わ
ずドン引きになるよ。

「お主に苦勞をかけたな。その少女とカードは我輩がじっくりと調
べよう。まどかから伝言を預かっている。今日はそのまま帰宅して
かまわないとの事だ。今回は特別に車を手配してある」
「直帰ですね」

「その少女とカードを預かります」

俺は眠っている少女とカードをメアリさんに渡すと彼女は、慣れた手つきで奇怪な形のメスや用途不明の器具が置いてある手術台？に寝かせた。大丈夫かな。ま、まさか解剖してホルマリン漬けとかしないよね。

「完璧とは言えないが依頼を達成したのでお主に報酬を与えよう」

やった！！ 何が貰えるのかな。期待してヴィクトルを見た。

「一つは、例の山田一郎が使っていた携帯電話型COMPのメモリにある悪魔をお主に与える。これは如月竜也からの要望でもあるのだ。奴曰く『碌な仲魔がいないガキに俺様からのプレゼントだ』とな」

「はは、あの人らしい物言いですね……」

鼻で笑うしかないよ全く。竜也さんからすれば大した価値が無いのかも知れない。

「お主に与える悪魔だが、COMPの破損が予想以上に酷く、渡せるのは2体だけだ。幽鬼オキウムシはすぐ召喚使役できるが、もう1体の鬼女リヤナンシーは今のお主では扱えぬだろう」

「それは俺が弱いから……つまりレベルが低いからですか？」

「その通りだ。『悪魔は己より弱き者には従わない』使役するには、お主が『主』として相応しい強さになるか、不安定でデメリットの多いダーク合体でリヤナンシーのスキルを仲魔に継承させるしかない」

ヴィクトルは鋭い目で俺を見ている。これは悩む。あの研究室で

弱さを思い知ったから少しでも戦力になる方を選ぶべきだ。

「ではオキクムシを召喚するから仲魔にするがよい」

ヴィクトルが制御盤を操作すると魔法陣が描かれた台座に魔力が集中して悪魔が実体化した。

長い黒髪で上半身が裸で後ろ手に縛られ、妖艶な雰囲気がある女性で下半身が醜い芋虫の悪魔だ。

「ああ、わたしは幽鬼『オキクムシ』ああ……かわいい主に乳を飲ませたい。今後ともよろしくお願い致しますわ……」

なんか濡れたような艶のある声と潤んだ瞳で見つめられ背中がゾクゾクするよ。オキクムシは光になってCOMPに吸い込まれた。

「ダーク合体の特徴は、ダーク悪魔とそうでない悪魔を合体させると、お互い反発して不安定な合体結果となる」

不安定と言われてもピンと来ない。

「例えば、リヤナンシーとダーク悪魔を合体させるとお互いの拒絶反応が起こり、ランダムの結果によって高確率でスライムが生まれてしまう。低確率の場合だと、どちらかの悪魔がランク・アップかランク・ダウンしてしまう。ここまでは理解できたかな」

「その……ランク・アップとダウンは同じ種族で、と言う事ですか……リヤナンシーは鬼女だから他の鬼女になるのか……その場合はスキルは引き継がれ、アップの場合は仲魔になるのかな？」

「ふむ、いい質問だな。ダーク合体はある意味、人為的に事故を起こさせるのと同じだから引き継がない。スライムの場合だけはスキ

ル枠の分ランダムで継承する。ランクアップした悪魔は仲魔として使役できる。アップと言っても極端にレベルが上がる分けではないからな」

「そのスライムが同族を除くダーク悪魔と合体する場合、スライムは完全に吸収され、した側の悪魔はダメージを受けていた状態なら完全回復し、スライムのスキルをランダムで一つ継承する」

悪魔合体って本当に奥が深いですね……少しだけ分かりました。俺は腕を組んで考える。

「こりやマジでリスクが大きいな。このままCOMPに移したら召喚できないし……悩むよ」

元々あのオッサンの悪魔だ。不満足な結果になっても惜しくは無いと、考えよう。ヴィクトルは俺を見ている。

「決めた。リヤナンシーをダーク合体させるよ」
「承知した。今回だけ特別にもう1体のダーク悪魔は我輩が用意しよう」

ヴィクトルは怪しげな装置を操作すると、円形の魔法陣が描かれた台座に、腰まで届く金髪に胸元が大きく開いた黒のドレスを着たリヤナンシーが実体化した。もう1体はガキだ。

『このベリーナイスな美貌とスタイルを誇る私が、汚らわしいガキと合体なんて……とてもおぞましいですわ』
『ウガガ、オレウ、レシイ』

リヤナンシーはこの合体がかなり不満そうだが、ヴィクトルは無

視して何か呪文を唱え、制御盤？のレバーを操作すると、台座にいる2体の悪魔は宙に浮かび、ゆっくりと横に回転を始めた。そしてスピードが少しずつ速くなり、やがて目に止まらない猛スピードで回転する。そして台座の中心に寄って原型を留めない1個のドス黒い肉塊になった。それから何か脈打つ鼓動が耳に響く。

「悪魔合体……2体の悪魔を粘度細工みたいに、こうグチャグチャとこねくり回し、別の悪魔にする。なんて背徳的だ……」

茫然と見ているだけだ。回転を終えた肉塊は伸縮し『ドクンツドクン』と音が大きく聞こえる。

そして肉塊は音を立てて弾けると一瞬、閃光に包まれた。

「うおっまぶし!!」

目を開けると、腰まで届く長い銀髪に純白の着物姿をした女悪魔がいた。前髪は眉毛の上で切り揃え、顔立ちは人形の如く無機質で切れ長の目に赤い人形の瞳が冷たいよ。

「私は、鬼女『雪女郎』よ。今後ともよろしくね、坊や。身も心も凍らせてあげる……」

えっえっ？ これってまさか？ 『失敗』それとも『超当たり』なの？ ヴィクトルは軽い驚きの表情を浮かべている。メアリさんは相変わらず無表情だけど。

「これは所謂『競馬で穴馬が的中した』のと同じだな……ふ、ふははは、このようなケースは我輩も久しぶりだ。ふははは」

何が面白いのか笑い続けている。まあ、あれだ。ビギナーズラッ

クと言うやつだ。新たな仲魔が2体増えたからこれで満足だ。

「マグネタイトと120マツカに山羊屋の福引券10枚だ。10枚で1回引けるから暇な時にやってみるといいだろう」

「ありがとうございます」

時計を見ると23時を過ぎていた。お台場から自宅へ帰るには、りんかい線でJR渋谷駅に出るか、大井町駅で東急大井町線乗り換え、二子玉川駅に出る必要がある。りんかい線は料金がメチャ高いんだよ全く。

「悪魔合体は奥が深い。業魔殿は全てのサマナーの為に開いている。お主も初仕事で疲れたろう。今日は早く眠るべきだ」

「着替えを用意してありますので、部屋へご案内致します」

「最後に一つ、デビルサマナーとして必要な事は強い仲魔や強力な装備、アイテムの他にコネだ。よく憶えておくがよい。ボンボーヤシ」

俺はメアリさんの後について工房を出るとホテルの一室に入った。ベッドの上に俺の服、床にスニーカーが置いてあった。軽くシャワーを浴びてメイクを落とすとスッキリした。自分の服に着替えるとドレスと他を用意してくれたバッグに入れ、デモンズブーツはかさばるのもう一つのバッグに入れた。

着替え終わるとリョーコから深町涼太に戻った。やっぱり普段着が最高だよ全く。武器だけはメアリさんに預かってもらっ事にした。

「確かにお預かり致しました。鞭の扱いは心得ております」

さそり鞭を手に振り回す無表情のメアリさんを想像するとかかなり怖い。

「深町様のドレス姿は良くお似合いですよ。さすがあの方の血を受け継ぐのですね」

「えっ！！ 誰ですか？」

気になるけど、それ以上答えるつもりは無いみたいだ。

業魔殿の正面入り口に流線型の黒い大型車が止まっていた。良く見ると何とロールス・ロイスだよ凄い。俺はドアが開いている後部座席に座るとメアリさんがドアを閉じると静かに動き出した。車内は広くて座り心地も格別だ。生まれて初めて最高級の外車に乗って緊張するよ全く。

外を見るとお台場と芝浦の夜景がとても幻想的だ。

あつ、運転手は俺の住所を知っているのだろうか？ 運転席とはガラスの仕切りがあるので開けて運転手を見た。帽子を被った後姿なのでよく分からない。

「あゝ自分ちの住所なんですが……」

「存じております。東京都世田谷区玉川台2丁目……ですね」

年配のオッサンだと思ったが意外にも若い女の声だ。日曜の夜なので道路は流れて快適だ。外の流れる夜景を見ているとウトウトと眠ってしまった。

「……よ。深町様、ご自宅へ着きましたよ」

「えっ！！」

俺はハッとすると、間近に笑みを浮かべている運転手がいた。男装の麗人、宝塚の向日葵組みたいな人だ。カッと熱くなってしまう。反対側のドアに後退りした。

「死んだように眠っていましたよ。よほど疲れていたようですね」
「すみません」

慌てて降りると家の前だ。運転手がトランクルームからバッグを降ろしてくれると受け取った。

「ありがとうございます」

「いえいえ、これが私の仕事ですから。では良い夢を、それでは失礼致します。」

運転手は深々と一礼し、車に乗るとゆっくり走り出した。俺は手を振ってから玄関を開けて家に入った。居間で親父とお袋が深刻な顔で話している。テレビはついていない。

「ただいま。疲れたよ」

2人は驚いたような顔で俺を見た。

「りよつ涼太！！ アルバイトで夜遅くまで残業お疲れ様」
「如月さんて優しいそうな声ね。涼ちゃんを褒めていたわよ」

ああ、まどかさんはね。竜也さんはメチャ怖いよ。

「しかし、アルバイトでこんな時間になるなんて……正社員並みだな」

そりゃそうだ。普通のバイトとは違うからな。

「急な仕事が入ったので遅くなったんだ。特別に家まで送ってくれたから助かったよ」

「そうだったの良かったわね。明日は学校だからお風呂に入ってすぐ寝なさい」

「うん……そうするよ」

二階に上がろうとした時。あつ運転手の名前を訊くのを忘れちゃった。

「実は、お前に大事な話があつてな。佐々木さんがお前の身体があの事故で、助かる為に普通で無い事になったのを気にしておられてな。その、聖華学園へ特別転入の話が来ているのだ。費用は会からの全額負担だから、そう悪い話とは思わないが……」

「べつ別に今、ここで決めなくていいから……ね、よく考えて」

「疲れているから、風呂に入って寝るよ……」

「そ、そうね。明日は学校もあるし……お休みなさい」

自分の部屋に戻るとベッドに寝転んだ。クタクタだしダルいよ……ごめんね、パトラッシュ。

いつもならこの時間はパソコンを立ち上げてDDS・NETやニコリ動画でMADムービーやゲームのスーパープレイを見ているが、今はそんな気にはなれない。

覚悟はしていたけどデビルサマナーの仕事は超マジでヤバイ。無事に戻れたのが不思議だよ。

COMPにメールが届いていた。

倉橋からはバイトの件だ。まだかさんに一目惚れなんてお前とは釣り合わないよ。忘年会はバイトの身分だから分らない。こんな俺の心配をしてくれるのは今では家族親戚以外では2人だけだ。

武原からは12月に開催される冬コミ参加の件だけど、真冬に水着姿をした露出系の女装コスプレはマジで勘弁してくれよ、な。夏コミで1回限りだからって言うから嫌々引き受けたんだぞ。

黒井さんは俺の初仕事についてだった。あと話って何だろう。愛の告白じゃないのは分かっている。ヒロ子さんの……見ないで全部削除した。見たら軽くトラウマになりそうだ。

聖華学園……か、どこかで聞いた名前だけと思い出せない……ま、いいか。

風呂から出ると、パジャマに着替えてベッドに入るとすぐ睡魔に襲われた。

『ギヤアアアアア！！』

恨みの視線、視線。

『ナゼタスケテクレナイノヨオマエモシネエー！！』

翌朝。

目覚まし時計のアラーム音で目が覚めると、大きなあくびを掻いて起きるが、身体が妙にダルいのだ。

「ヤベツ、風邪でもひいたかな？」

特に寒気とか熱は無い。とにかく顔を洗う為、部屋を出て1階の洗面所に向かった。

「お、おはよう涼ちゃん。食事は出来ているから早く食べてね」
「ああ」

台所のテーブルにはバタートースト、ベーコンエッグ、味噌汁、レタスサラダにヨーグルトが並んでいた。俺は置いてあった朝刊に目を向けた。液晶テレビはJHK朝のニュースが映っている。

親父は『痛勤電車』が嫌なのと職場が遠いので早くから出ている。

「目黒区大岡山で猛獣による死者かよ。物騒だなー」

「都内で猛獣に襲われたなんて信じられないわ」

「どうせ、どこかの馬鹿な金持ちが内緒で飼っていたのが逃げただよ」

滅多にないが、ワニが下水道で発見されたとか、動物園から逃げ出した猿が暴れたとか、地方で熊が家の中に入って来て騒動になった事件を思い出した。三面記事はいじめによる連続自殺事件や、クビになった派遣労働者が、品川駅の広場で突然錯乱し、止めに入った警官と乱闘になったとかを大きく取り上げていた。明るい話題はないのかよ全く。

食事を終えてお茶を飲み干すと、自分の部屋に戻って制服に着替え、髪を整えると学校に行く用意をしたがCOMPは絶対に手放せない。

「ハイテク・デビルサマナー。COMPが無いとただの人、か」

自嘲気に言うと携帯COMPをポケットに入れ、ヘッドバイザーを胸のポケットに、カバンを手にとって部屋を出ると階段を降りた。

「行つてきまゝす」

「行つてらっしゃい。気をつけてね」

お袋の声に送られて家を出た。

「ううッ 寒くなつたな」

11月もあと数日で終わりだ。吐く息はまだ白くない。COMP

でお気に入りのゲーム音楽を聴きながら早めに学校へ向かった。晴れた青空の下を歩いていると、昨日の研究所、業魔殿の出来事が夢みたいだ。

ありふれた日常の生活は、失ってから初めてありがたいと感じるのだ。

俺もあの事故に遭うまでは当然だと思っていたから……

コンクリートの塀に沿った道を歩いていると登校する生徒の数が増えてきた。

私立光陵高校は、区内でも有数の進学校で、その周囲は馬事公苑、陸上自衛隊の用賀駐屯地や国立の衛生試験所、海上自衛隊東京音楽隊の建物に囲まれている。全て合わせた広大な土地は戦前、陸軍の衛生材料廠が置かれていて、その地下には秘密の研究施設があるという噂がある。

教室に入ると窓側で倉橋が佐藤や岩田達と話している。佐藤と岩田は1年の時、倉橋と同じクラスで武原とも親しくなった。当時、事故で入院していた俺は2人ほど親しくなれていない。中学の友達は公立の高校や、他の私立に進学したのでこの学校で友達と呼べるのは、倉橋と武原だけだ。今の俺は転校して来て半年にならない転校生みたいな存在。本来なら1年生で復学するはずだが、事情があるので学校側の特別な計らいで2年になれたのだ。などと考えていたらポンと肩を叩かれた。

「よっ、いつもより早いな。何、黄昏ているんだよ。黒井ならまだ来ていないぜ」

武原が曇った眼鏡でニヤニヤしている。

「バカ！！ 違っつて言っただろが。今までのブランクと今後の事だよ」

「そ、そりゃ仕方が無いよ。生きていられただけでもありがたいんじゃない？」

「タケにだけは言われたくねーよ全く」

「で、冬コミのコスプレを引き受けてくれよな、な、頼むよ。この通りだ」

武原、拝むようなポーズをして俺を見るなよ。こっちは悩み事で頭がパンクしそうなんだから。

「周さんも『深町氏は男役女役をこなせるいいレイヤーになる』って褒めていたし。批評に辛辣なあの人が言うなんて珍しいよ。エミさんが喧嘩して、サークルを辞めてからコスプレする奴がいないんだ。無理を言っているのは分かっている」

「タケさんよ、まさかと思うが安受け合いして『あの深町なら俺が言えば引き受けるよ』なんてふざけた事言っただろーな」

いいレイヤーになるって言われてもちっとも嬉しくない。今の俺は竜也さんモード全開だ。

「ダ、ダンナナニッテンデスカソソナコトワタシイワナイアルヨ ヒトコトモ」

嘘付け、視線がメチャ泳いでいるぞ。もし俺が短気で粗暴な性格だったら、胸倉を掴んで締め上げているよ。俺は溜息をついた。

「それで、俺が断固拒否したらどーなるんだ？」

「そ、そしたら俺、周さんから冷たい目で見られちまう。あの人、

結構キツイところがあるんだ……」

「つまり立場が無くなるわけだ。」

武原がコクコク頷く。俺も呆れるくらいのお人好しだな。オーケー
ーただしタダでは引き受けないぞ。

「周さんがこの条件を飲めるなら引き受けるよ。水着姿の露出系と病んだ変態系は絶対不可。コスプレするキャラと衣装を事前に説明する事。バイト代として一万円と、打ち上げの飲み会とカラオケ代を無料だ。それと周さんの知り合いでオカルト、特に悪魔関係が詳しい人を紹介してくれる事。これが最低条件だ」

「わ、分かったよ。当たり前だけど厳しいなあ。今、メールするよ」

武原が俺の目の前でメールを打つと即、返信が来た。おっ早い。

「えっと『深町氏の条件は理解した。バイト代として1万5千円。

交通費その他、掛かる金額は当会が負担する。コスプレのキャラと衣装の画像は添付した。オカルト、悪魔関係に詳しい人を紹介については、理由を直接伺いたいので希望日時を連絡されたし』か、このオカルトって何なんだよ？」

「そ、それはだな……」

説明しようとした時、担任の羽生先生が来たので、皆、慌てて席に着いた。

「起立、礼、着席」

朝のホームルームが始まった。来月の行事の説明が終わると俺を呼んだ。

「深町、お前に話がある。放課後、職員室に来てくれないか」
「わかりました」

来たか。アレの件かも知れない。

突然、教室のドアが乱暴に開いた。

第13話 病院

『ねえ、涼ちゃんはあたしの事、愛している？』

『なっなんで、いきなり、何言ってるんだよ？』

『あたしの目を見て！！』

『そ、そりや双子の姉弟だから嫌いじゃないよ……』

『嫌いじゃないって……あたしの事、愛していないの？』

『くっ苦しいよ姉ちゃん！！そっそこだけはやめて！！』

『さあ、答えなさい』

『ア、アイ、シテイマスヨオネーサマ』

『ああ、良かった！！もし嫌われていたら……』

『んな大げさな！！』

『でも涼ちゃんは他に好きな女の子が出来て、その子とセックスするのね』

『えっ』

『ねーちゃんだって、男と付き合っているんだろ？』

『あたしは涼ちゃん以外の人間は興味無い。涼ちゃんがいてくれたらそれで満足なの……』

『でも、涼ちゃんに彼女が出来たら……あたし、その子を……ふふふ』

『……』

『あたしは涼と未来永劫深く激しく愛し、身も心も一つになれるなら……』

『ね、ねーちゃん……マジで、んな事考えてんのかよ？』

『忘れないでね、あたしは涼ちゃん、涼ちゃんはあたしと2人で1人なのよ』

『んな事言っちゃってわかんねえよ！！』

『あはははははは、冗談よ、冗談！！ほんと、涼ちゃんをからかうと楽しいわ』

『ざけんなよ、クソ姉貴!!』

『だ・れ・が・ク・ソ・姉貴なのかしら？ 生意気な事を言う口は、この口かしら』

『ひゃい、ひゃい、ご、ごめんひゃい美人で素敵なお姉さま!!』

『よろしい』

『今日の夕食はあたしが作るから楽しみにしていてね』

いつの間にか巨大な劇場の座席に座っていた。周囲は静かで薄暗く他に誰もいない。

「ここは誰？ 私はどこ？ 確か学校……」

ぼんやりしていると突然、スポットライトがステージを照らすと、ハイテク車椅子に座った赤いスーツ姿の男が現れた。眼鏡を掛けて知的な雰囲気があり学者みたいだ。髪色からして日本人では無い。どこかで見たような気がする。

『深町涼太君、私はSteven。憶えているかね?』

「ステイブン？ あの映画監督かな？」

『君は寝ボケているのかね？ まあいいだろう。ヴィクトルの依頼もクリアして上出来だよ』

ステイブンを少し一瞬、イラッとしたみたいだ。あっ思い出した。夢に出て来た学者だ。ゲームの出来事じゃなかったんだ。おK、してから悪魔召喚プログラムがメールで送られてきたんだっけ。

「あの、質問があります」

『私にかね？ 答えられる範囲でなら応じよう』

？ここはどこ？

？あなたは何者？

？悪魔召喚プログラムを送った理由

？悪魔全書とは？ 名前が読めない悪魔

？銀座の爆破テロ事件

胸の中で何かが蠢く。この人ならあの事件の裏側を知っているかもしれない。

突然、周囲の風景が変わった。劇場から無限に広がる大宇宙……無数の輝く星々や銀河が広がっていた。

『？ここは普遍的意識の世界。『魔界』とは別世界で、簡単に言うなら意識と無意識の狭間。全ての生命の精神が繋がっている場所、もしくは心の海と思ってほしい。人の意識はここから生まれ、そして帰る全人類共通の故郷……』

確かに無数の星々を見ていると大宇宙の一部になったみたいで、心が安らぐよ全く。

『？私はSteven、東京は狙われている……』

「それなんてエイジ？」

『これは滑ったかな、私は物理学者として極秘の研究に携わっていた。それは永年の夢だった瞬間物質移送システムのターミナル設計開発である』

「まさか！！ 映画『泣かないでフライマン』に出てくる瞬間物質移送ポッドですね……って、それかなりヤバクね？」

ステイブンは苦虫を噛み潰したような顔で俺を見る。まさか。

『想定外の事故が発生、私は蠅男にはならなかったが、二度と歩けない身体になった……』

「……」

『？の悪魔召喚プログラムを送った理由は、1980年代、ある高校生が開発した悪魔召喚プログラムで魔王ロキを召喚、大量の死傷者を出す事件を起こしたのだ。その影響なのか魔界との境界線がゆらいで、【人ならざるモノ……悪魔】が急激に現れた。私は来るべき時に備えての警告と、せめての手助けになればと、改良した悪魔召喚プログラムを、メールで送付とDDS-NEET内で配布したのだが、活用した者はほとんどいなかった……』

ロキって北欧神話に出てくるトリックスターみたいな奴だっけ？

「で、その高校生が原因かよ……スゲー迷惑な話だよ全く。もしかしてその人は中島って人？」

『中島朱実はずノハが派遣した退魔師チームによって、恋人と共に処理されてしまった』

「そりや自業自得だよ。後、そんなメールが届いたら性質の悪い悪戯かウイルスと思って削除しちゃうよ」

ステイブンはさらに苦悩に満ちた顔をしたので、それ以上言えなかった。

『ある人物の助言で、見込みのある者に夢と言う形で接触し、戦う意思を示す者に悪魔召喚プログラムを送る事にした。君の召喚リストにある悪霊の名前が読めないのは、予想外のバグで文字化けしている為だ。何者かの介入なのか……原因は私も分からない。文字が赤いのは高位の悪魔な為、君の力量では召喚出来ないだけだ』

なるほどね。それとも特定のフラグを立てる必要があるのかな？

『悪魔全書とは、登録した仲魔の由来、ステータスが載っている図鑑でもある。さらにマツカとマグネタイトを支払えば、登録した悪魔を召喚出来るのだが、邪教の館の主殿に話を通さないと使えない。詳しい事は彼に尋ねてほしい』

邪教の館って、名前からしてなんかカルトでヤバそうだよ。

『邪教の館は、業魔殿と同じく悪魔合体を行なう施設で、都内にもあるが全国各地に存在する。？あの自爆テロ事件。日曜の銀座歩行者天国で起きた原因不明の爆発事故……私の情報によると背後に大掛かりな組織が関わっているらしいが詳細は不明だ……』

俺の心に蠢く何かを抑えているとステイブンは、哀れむような目で俺を見る。

「そう……ですか……」

目をそらしても、心に蠢く何かを抑えるのが辛くなってくる。ステイブンは一瞬、嘲るような顔をしたが気のせいかな。

『今の君はその件に関わらない方が身の為だ。もし犯人がいたとしても返り討ちに遭うのが関の山だ。今は地道に経験を重ね、……量を上げるのが先だ』

「……」

『今は焦る必要が無い。デビルサマナーとして活動して名を馳せれば、先方から……って来る筈だ』

いつの間にか劇場に戻って俺は座っていた。

『話を最初に戻るが、君は本来、別の……補……に入れる機会を何……入で失った。前が……スの聖でもなければ理を曲げ……いでも無い。』

ノイズが発生したのか姿がブレだし、声が聞き取れなくなってきた。

『古武術を……格闘家でもなく。銃器を扱うスペシャリストでもない普通の学生だ』

現実になんな学生がいてたまるか。あ、いるかも知れない。
『そんな君を援護してくれる……と……える警……入……注、最後に……る』

「もしもし、もしもし！！もしもし！！」

途端に意識が途絶えた。

目を開けると知らない天井が見えた。

「あれ？……どうして？」

慌てて身体を起こして周囲を見ると壁、床が白い。家具や調度品の類が見当たらない。清潔で無機質な雰囲気漂う、どうやら病室みたいだ。俺はベッドに寝かされていたらしい。朝のダルさも今は無い。

「懐かしいのと変な夢を同時に見たようだよ。何でここにいるんだろっ？　ってうわっ！！　えっえ、俺、素っ裸？」

下着も何も身に着けていない状態だ。着替えが置いてないか病室の中を捜すがベッドはクッションだで、身体を包む物が無いと何か頼りなくて情けない。

「お、俺の着ていた服はどこいったんだよ。こつCOMPが無い！
！　　うわー最悪だ！！」

股間を手で隠して室内をウロウロする。おっ落ち着け、こんな時はクールになるんだ。3回深呼吸すると少し落ち着いた。で、どうしてこうなったか考えよう。

「俺、朝の教室で……あぁっ！！　そっそっだヒロ子さんが乱入して騒ぎになってそれから……」

脳内再生。

突然、ドアが乱暴に開いて白衣姿のヒロ子さんが入って来たのだ。右手には黒皮の鞭が握られている。当然、教室は大騒ぎだ。「あの人誰？」「保健の先生かしら？」とか「すっすっパツキン美人じゃん！！」とか口々に叫んでいる。羽生先生はヒロ子さんに詰め寄った。

「ちょっとアンタ誰ですか？　関係者以外が勝手に入って来ては困るんだ。すぐ出て……うぐっ！！」

ヒロ子さんの腕を掴んだ先生は、当身を食らってその場に蹲った。教室は騒ぎになり、何人かが外に逃げ出したら突然倒れた。鞭を振り回して思い切り床を叩き、こちらを睨んでいる。

ヤバッ！！ 彼女の目当ては俺だ。

ドアに殺到した連中はバタバタと倒れた。ハリウッドセレブ顔負けの美貌とスタイルに誰も手を出せない。彼女の顔は怒りに燃える鬼だ。に、逃げなきゃ……俺はドアに向かって走ったが彼女の方が素早かった。

ヒロ子さんは胸倉を掴んで顔を近づけた。嗜虐心で満ち溢れたとつても素敵な笑顔だが、青い目は笑っていない。女臭と香水の混ざった匂いで鼻にツンとする。

「はっ！！ 離せよ！！ 俺が何したっていうんだよ！！」

「とても壊したい王子ちゃま、優しい白衣の女王さまがお迎えに来たでちゅよ」

彼女の瞳が輝くと俺の意識が途絶えた。

ヒロ子さんが、まさか教室に乱入するとは思わなかったよ全く。

今頃、大騒動になって警察が来ているだろうなあ……。

衝撃のクラス！！ 鞭を持った白衣の金髪女性が乱入、男子生徒を拉致監禁！！

「すると、ここはあのチョビヒゲの病院かよ。でもこんな病室は無かったよな」

ベッドの脇にあるナース・コールのボタンを押してみるが返事が無い。俺は一瞬、最悪の想像をしてしまった。

バイオハザードが発生して、部屋の外に未知のウイルスに侵された感染者達が、徘徊しているのだと……苦難の末脱出して目に映る光景は、感染者が暴れまわる街だった。なんてどこかの映画のオチ

は勘弁だよ。

着る物を捜すがベッドの頭の下に白い紙袋があった。開けるとピンク色の服らしき物が入っていた。

ベッドの上に出してから服を広げて目が点になった。

「こ、これを着ろつてのかよー!」

それはとても鮮やかなショッキングピンク色のジャージだった。

「これは一種の羞恥プレーなんですね。もう僕には理解出来ないです」

選択の余地は無い。

素っ裸で動くよりこれを着て他の服を探すしかない。しかし着るのに若干、心の抵抗がある。逆に考えるんだ、ドレスや水着を着るより遥かにマシだ、と。サイズは問題無い。着てからスリッパを履き、ドアに向かうと音も無く開いた。顔を出して通路を見るが誰もいない。もしオートロック式だと通路に出たら病室には戻れない。

室内を丁寧に捜すが、何も出て来ないので仕方なく病室を出た。閉じたドアはやはり開かない。

通路は一面白色に覆われて地上か地下なのか分からない。病室を出て右の通路を歩く。人影は全く無い。監視カメラで見られているのかもしれない。バイオハザードだと照明も非常灯になり、隔壁が降りているだろう。

通路を進む途中にあるドアは開かない。やがて十字路が見えた。COMPが無いので、選択次第ではバッドエンドになりそうだよ。

「どうしよう……ええい左だ」

左へ曲がってしばらく進む。周囲は静寂に包まれ不気味だが、照

明があるのでまだマシだよ。その先にエレベーターが見えてきた。急いで向かうと人影が現れ、見ると看護師みたいだ。

顔は黒いショートヘアで眼帯とマスクをしている。首にネックギプスをしていて両手・両足は義手、義足なのか両手で松葉杖を突きながらカチャカチャ音を立てて俺に近づいて来た。そのぎこちない動作は不気味で痛い。

一言で表すなら『痛いナースコスプレ』だ。これだけは絶対に分かる、看護師では無い。それに友好的雰囲気は零だ。

「ヤバイ、逃げなきゃ、逃げなきゃ」

来た道を引き返した。十字路を真っ直ぐに走った。突然、後ろから声が響いた。

『コラー!! その純情可憐なボーイ』『お待ちになって旦那様』『このッ!! スカポンタン!!』『人の顔見て逃げんじやないわよ!!!』

意外、アニメ声だよ。不気味な雰囲気と、どこかで聞いた甲高い声がミスマツチだ。

「待てと言われておとなしく待つ奴がいるかよ。この不気味女」

正面右手に梯子が上に伸びて開いたハッチが見える。よじ登ると木造の廊下に出た。

「1階か……あっ見覚えがあるぞ。チョビヒゲ……先生の病院か」

下の方からカチャカチャと音が響いてくる。ヤバ!! あの不気味ちゃん? 意外に足が速い。出口に向かって走ったが変だ。天馬

先生の個人病院はそれほど広くは無い。これだけ走れば、受付と待合室が見えるのに果てしない廊下だけだ。それに、この病院はあんな女いたっけ？

「もしかして閉鎖空間……異界化なのか？」

異界化。現世の一部が、魔界の一部と融合する現象。空間・電磁場に強い影響をおよぼす為、無線通信が不可能になり、周囲が迷路のようになってしまい悪魔が徘徊していると、まどかさんが教えてくれた。予感が正しければマジでヤバイ！！武器が無い、COMPも無い今の俺は無力。悪魔と遭遇したらアウトだ。背後から力チャカ音が届いたので走り出したが、目の前にアメンバー状のスライムが1体現れ、背後にもう1体が逃げ道を塞ぐ。

うわっ 超絶体絶命。

スライムは、仲魔にしているが、COMPが無い今はどうなるかわからない。スライムは身体の一部を触手状に伸ばし、俺の身体をペタペタ弄る。俺はドキドキして動けない。しばらくするとスライムは消えた。

へなへなと座り込んだ。手元にCOMPが無くても、仲魔にしていれば見逃してくれるみたいだ。

あの研究所で仲魔にしていなかったら、この場で消化されていただろう。

『見いつけたああああ……』

振り向くと不気味ちゃんが俺を見ていた。慌てて逃げようとしたが、身体が痺れて動けない。

『シバブー』『直撃を受けたら』『フハハハハハハ！』『無駄無駄無駄アアアア！』

こいつの喋り方は言葉をつなぎ合わせたみたいだ。腰に手を当てていた不気味ちゃんは力チャ力チャとゆっくり近寄ってきた。駄目だ動けない。

俺の目の前に来た。眼帯とマスクで表情が分からない。ただ冷たく見つめているだけだ。

俺の前にしゃがみこむと右手を掴む。ヒンヤリとした冷たさが伝わる。間近の義手義足の少女は痛々しく見ていられない。一瞬、目を逸らした時、力チャツと金属音がして見ると手錠が掛けられていた。

「おいっ！！ ふざけんな。これを外せよ！！」

幸い口だけは動かせる。不気味ちゃんは冷たい目で見つめるだけだ。ムカツときて突き飛ばそうとしたが、まだ痺れて動けない。

『Shut up!!』『You take someone to where the Doctor』『Do you understand?』

いきなり英語で言われても聞き取れないよ全く。それもどこかで聞いた渋いオッサン声。

「身体が痺れて動けないんだよ……ってあれっ？」

いつの間にか痺れが無くなっていった。ノロノロと立ち上がると、不気味ちゃんは力チャ力チャ音を立てて歩き出した。手錠でつながれているので俺も後に続くしかなかった。

不気味ちゃんは今俺に背を向けて歩いている。
今なら首か腕を捻り上げ脅し、鍵を奪って逃げられんじゃね？

『ミーに不埒な真似をしたら』『真空回し膝蹴りが炸裂！』『あ
んど、お前はもう死んでいる』

ゲッ！！ 見抜かれている。外見で侮るとヤバイよこの不気味
ちゃん。

目の前にドアが現れ、不気味ちゃんが慎重にノックをすると聞き
覚えのある声が響いた。

彼女の後に続いて俺も中に入った。

目の前に白衣を着た貧相な小男が立っていた。その右横に白衣に
マスク姿のヒロ子さんが腕を組んで睨んでいる。背の高さが極端に
違うので違和感があり過ぎる。

この2人は、俺の関わり合いたくない人物の脳内リストのベスト
5位と4位だ。

「久しぶりだね。涼太くん」

「天馬先生も……相変わらずで……」

「君い！！我輩を博士と呼びたまえと言ったではないか！！」

顔に似合わず甲高い声で喚く。男は短く刈り上げた髪型で丸い黒
縁の眼鏡を掛けていて特徴と言えるチョビヒゲを生やしている。見
た目が某総統にそっくりだ。ムカムカと殺意が湧いてくる。

「……であるからして、おい、我輩の話を聞いているのか？」

「聞いていますよ。天馬博士。ちよっと脳内で処刑していたので……」

……」

「ふん、君の妄想癖は姉上譲りだな。いい加減に妄想と現実の区別をしたまえ」

アンタに言われたかねーよ。このクソチヨビヒゲ。いつぺん死んでミルか？

「君に施した処置で我輩に対して殺意を抱いているのは分かる。しかし命の恩人に対しては敬意を払うべきではないかな。なあヒロ子くん？」

ヒロ子さんに同意を求めたが無視して俺達の前に来ると殺意の籠った目で右手を上げた。

ヤベー！！ 殴られる！！ 親父にも殴られたことは無いのに……

が、平手打ちを食らったのは不気味ちゃんだ。続いて膝蹴りを受けた。

「卑しい変態メス奴隷の分際で何、手錠を掛けていやがる。とつとと外せよコラー死ねってヤツ」

『即、解除いたしますわ』『ああっ女王様！！ 醜くて卑しいこのメスブタにお仕置きを……』

外してくれたけど、もうヤダ……この人たちの会話は心を汚されるよ全く。

「どこまで話したかな……ああ、命の恩人には敬意を払うべきだったな、君が『深町涼太』としてこの世界に存在出来るのは我輩の超心霊医療と生体医工学の賜物だと、それも思えば今は、無き小夜子さんの惜しみない資金援助があつてだな……」

天馬博士の演説もどきを上の空で聞いている。

命の恩人……確かにそうかもしれない。以前と変わらない身体で生き返っていたのなら、偉大な医学者として尊敬しただろう。しかし俺の身体は……

「永遠に偉大な博士さま、とっとと座ってお茶でも飲むべきじゃないかこん畜生って感じ」

「おお、そうだったな。零、頼むよ」

『おK、把握致しましたであります』

零と呼ばれた不気味ちゃんは、頭を下げると退出し俺達は来客用のソファに座った。

「我輩に何度も話させるのかね？ 君は『あの日死んだ』のだよ。肉体が四散して、どれが姉上か弟か解らなかったのだ。幸運にも君は、突然の死を理解していなかったので深町涼太として認識させることが出来たのだよ」

俺は黙って聞いている。ヒロ子さんは腕を組み、足を組んで目を閉じているって、この人寝ているよ。

「君が現在この場にいるのは、ご両親の熱意とヒロ子クンの脅迫、亡き小夜子さんのおかげだと忘れちゃいかんよ。2人の悲しみは我輩から見ても辛かった……2人の子供を一瞬で失ったのだからな」
『お待たせ致しましたでございます』

零が淹れたてのコーヒーをカップ3人分、お盆で運んで来ると手際良くテーブルに並べた。ソファには座らず、従者の如く背後に控えている。

「泣きながら我輩にすがりつくのだよ『どんな手段でもいいから生き返らせてください』とな。それで我輩がこう言った『譲渡と2人の肉片で1人分しか再生出来ない』と言うと、それでも構いませんと了承したのだよ。ただ誤算だったのが、眠りから覚めるのに1年半近く過ぎた事と、姉上が覚醒しない事だな」

「それで、博士は報酬を要求したのですか？」

当然、莫大な費用が掛かっているはずだ。

博士はコーヒーを一気に飲み干すと真剣な顔で俺を見る。

「我輩が学生の頃から援助してくれた小夜子さんは、肉親以上の恩人でもある。こんな我輩でも受けた恩は忘れんよ。それ以上の理由はない」

小夜子さんとは俺の祖母で中学生の時、心不全でこの世を去った。葬儀の時一番悲しんだのは博士だけだったのは覚えている。あまりの激しさに周囲がドン引きしていたからな。

「博士、無駄話とはつとと終わらせ、可憐なヒロ子さんの本題に入りやがれっという感じ」

「うげああ!!」

退屈して眠そうなヒロ子さんは博士に肘打ちを食らわせた。

「すつすまんなヒロ子クン……で、何故、彼女のメールを無視したのだね？ 君にコケにされたと怒り狂って宿めるのに、我輩が全裸で激しい鞭責めを受けたのだよ」

「……」

「君の生体維持・認識データ更新なので、調整槽に入っても半日か

からないと両親にも話してある。どうしてだね？」

「それは……どうも病院が苦手なので……その、スミマセンデシタ」

2人に謝る。自分でも下手な言い訳だった。アンタ達と関わり合いたくないからとは言えないよ。

「君の身体は我々の所有であることを忘れちゃいかんよ。二度こんな無視はしないと約束すれば、我輩からは言うことが無いが……ヒロ子くんは、君にペナルティを課しないと納得しないのだよ」

「純情可憐な王子サマを鞭打ち100回か、四肢切断して人犬を激しく希望」

恐ろしさで震え上がった。ヒロ子さんの眼は冷酷無慈悲な女王サマで俺を見ている。

「小夜子さんの孫に惨い事はしたくない。君はデビルサマナーになった事は、我輩としても実に喜ばしい、貴重なデータが取れるからな。そこで君のサポートとして『ドール』を貸与する。これならヒロ子くんも納得するだろう」

「ヒロ子さんともいゝ子だから今回は我慢……24時間年中無休で王子サマを視姦できるからとっても満足♪でも次に破ったら絶対可憐に許すべからず」

ハイヒールを鳴らして院長室から出て行くと俺と博士は溜息をついた。

「ドールとは、人造人間の名称で、コードネーム『OLGA03』。元々は、とある企業からの依頼で身障者、老人の介護・支援を目的の為なのだが、製造費用と運用コストの面で企業側と折り合わなくなり量産計画が見送られのを、我輩が悪魔召喚システムを搭載し、

対悪魔戦用人造人間に改良した」

「人造人間なんて映画や小説、アニメ、ゲームの中に出てくるだけだと思ってましたよ」

「ロボット工学やサイバネティクスを含む最先端技術の分野は、君が思っている以上に進んでいるのだよ。アメリカでも人型とは、かけ離れた介護・支援ロボットは実用化されているのだ。その一部は軍事目的もあるのだが、我輩達の共同開発したドールを廃棄するのは惜しい。我輩が費用は全て受け持つと話して預かった、どうだね見たいだろう？」

「ええ、是非」

博士の『どや顔』気に食わないが、興味はあるよ。

「では一緒に来たまえ。零、後片付けを頼む」

『合点承知でありんす』

院長室を出て廊下を進むとエレベーターが見え、俺達は地下3階に降りると通路を歩く。

「廊下が異界化していたのは何が原因ツスカ？」

「我輩の研究成果を狙う不届き者がおつてな、アポもとらずに訪問するので、零が異界化させて閉じ込めたのだよ」

「まさか、その人達って……」

「外資系の製薬会社に雇われた傭兵部隊やある国の工作員。招かれざる客人は皆、スライムの餌だよ」

事も無げに言うので突っ込めないよ全く。物理無効のスライムは銃や格闘戦では倒せない。

「でも病院の地下にこんな施設があるなんて……今まで知らなかつ

た」

「ここは80年代後半、ある宗教団体が、来るべき戦争に備えて造られた核シェルターだよ。9割方完成間近になって、資金不足と組織の内部抗争で、半ば放棄されたのを我輩達が安値で買い叩き、秘密研究施設にしたのだ」

「都内に核つて、本気で信じていたんですか？」

「あの頃は、本気で信じている者が多かったのだよ。件の団体も核戦争後に、自分達の王国を築く夢を見ていたカルト狂だったからな」

博士は肩をすくめて溜息をついた。マジかよ、ここで生き残つてもストレスとかで病みそうだよ。

十字路を左に曲がって進むと突き当たりにドアが見えた。

第13話 病院（後書き）

「まどか、あのガキの身元は洗っただろうな？」

「はい、これが書類」

「どうせ、女みたいなツラした平凡なガキだろうが……おい、これは……」

「その通りよ、竜也。あの子、覚醒したら化けるわよ」

「ふん、どうやら楽しませてくれそうだな」

「……」

第14話 襲撃

十字路を左に曲がって進むと突き当たりにドアが見えた。

「ここに『彼女』が眠っているのだ」

博士の後に続いて部屋に入った。

部屋の照明は落とされ、壁と床にある大小の様々なメーターの明かりが明滅し、幻想的な雰囲気醸し出している。よく見ると部屋はそれほど広くはない。中央に手術台みたいなベッドが設置され、その上に『何か』が横たわり、白いカバーが覆ってある。

「見たまえ、これが彼女だ」

「あぁっ!!」

博士がカバーを外すとそこに一人の少女？ が眠っていた。

「ええええ!! お、俺？ ね、ね、ネーさん!!」

顔は姉さんと瓜二つで髪は金髪、身体は人型だが生身の人間じゃない。胴体部分は、黒いメタリック調のレオタードを着て、臍がある場所に円形のメーターが付いている。涼肩、両腕、両足の間接部分は人造人間その物だ。頭にはカチューシャらしき物と耳の部分はヘッドホンみたいな物がついている。

「彼女はOLGA03。外見は19歳、身長165cm、体重98kg。表面的には人間とほぼ同様の外観に、金色の長髪と赤色の瞳を持つ女性型の人造人間である。人間とのコミュニケーションの円滑化の為に、いくつかのヒューマンインターフェースを実装、その

一環として『擬似人格OS』を搭載、人語を理解し、応答することができる。その行動や態度の基本は『任務、論理、効率、服従、良心』に支配されている」

「模擬人格OSって？」

「彼女は、この研究施設のSuperBrain『OLGA2772』そのものだが、現在の技術では人の脳サイズに出来ない為、ネットワーク回線を通じて情報の伝達を行なう訳だ」

「それって、彼女本体がクライアントソフトで、OLGA2772がメインサーバーみたいな物ですか？」

「いい例えだよ。もしリンクが断たれても彼女の頭脳は、そこらのスーパーコンピューターよりも高性能だからな。大きな違いはデータの記憶量と、擬似人格の一部機能が制限されるだけだから問題は無い」

「……」

「驚いて声も出んか、顔は君の姉上に似せて、髪と身体はヒロ子クンを参考にしている。『女体にメーター』と言う永年の夢を実現したのだ！！ ふははは、どうだ凄かろう？」

「ええ、全く凄いですよ……『身体にメーター』なんてセンスは、俺のような凡人には理解出来ませんよ」

賞賛より開いた口が塞がらないって感じ。これだけは絶対に言える、博士はメーターフェチだ。

「腹にメーターがあると強度の面で弱点になるんじゃないですかね？」

「君い、これは男の浪漫だよ。まあ、元が介護・支援用だからな。身体強度が戦闘用に比べ、低いのは否定せんよ。それに別途で開発した戦闘用ボディースーツがあるから問題にならんさ」

「それで、動力源は……」

思わず博士の後ろに下がる。ま、まさか熱核反応炉じゃないだろうな。

「最新型のマグネタイトバッテリーを搭載している」

「えっ!! それってCOMPに使われている物ですか?」

「そうだ、容量も君のCOMPとは比べものにならないよ。消費するCPも悪魔の半分に抑えてある」

「CPって?」

「抗体ポイントの略称だ。悪魔がこの世界で実体化、維持する際に必要な生体マグネタイトの必要量だよ」

そういえば、ナオミが前にそんな説明をしてくれたっけ?

「もし想定外のアクシデントで暴走したら……」

彼女の強力なパワーは生身の人間では止められないだろう。博士はニヤツと笑う。

「そうならない為に『良心回路』と『絶対服従回路』を内臓しているのだよ。この分野はロボット工学の世界的権威でもある光明寺博士の協力を受けたからな。仮に暴走しても回路が作動し、全機能がシャットダウンする。そうなると外部からの入力がない限り、自力で再起動は出来ん」

「そ、それなら安心ですね」

「驚くのはまだ早いぞ。これだけならば唯のハイテク自動人形だが、決定的な違いは『ソウル』を体内に宿している」

「ソウルって……魂ですか?」

「その通りだ。この部分だけは、あの欧州の魔王と呼ばれたご老人の協力がなければ不可能だった」

欧州の魔王って……誰だよ。

「それって擬似人格とソウルを持った二重人格じゃないですか？」

「君いッ！！ 擬似人格と自らの意思を持つソウルとは比べ物にならないよ」

「……」

「苦労したのは総重量を150kg以下に押さえるのと、駆動部分にかかる負荷を軽減する為、補助動力を組み込む事だった。そして彼女の身体には最新の悪魔召喚プログラム・システムが内臓され、所謂『人型COMP』でもある。まさに科学と魔術が融合した異形科学の申し子だ」

異形科学……ああ！！ COMPで思い出した。

「博士！！ 俺の制服とCOMPを返してくださいよ！！」

「ああ、その件だが……その……」

突然、部屋が赤い光に包まれ、アラームが鳴り響いた。博士は白衣のポケットから携帯電話？を取り出した。

「どうした？ ヒロ子くん！！」

『偉大な天才博士！！ 性懲りも無く招かれざる客人が来やがったので、とつととお戻り下さい！！』

部屋のどこかにスピーカーがあるのか、ドスの効いたヒロ子さんの声が響いた。もう、この人に日本語を教えたのは誰だよ。

「またかね？ 零に異界化させて拠点防衛用のスライムを放出させたまえ」

『合点承知の介でございますだ。それと涼太と駄弁ってんじゃねーよ』

博士はポリポリと頭を掻いた。

「やれやれ、また我輩のファンがアポも取らず来たか。人気者はツライよ」

「それって違うと思うけど……」

「我輩達も管制司令室に行くぞ」

「あ、はっはい」

管制司令室。その名の通り、元核シェルターでもある地下研究施設の中枢を司る部屋で、巨大なモニターパネルが壁の三面に貼られ、見ただけでは分からない設備が満載している。ヒロ子さんは制御盤がある椅子に座っている。

マジで特撮やアニメに出てくる研究所の管制室だよ。

「招かれざる客人は何人かね？」

「武装した兵士が10体、後1体は、生意気にもスーツ姿ってヤツ」

「ふむ、そいつが指揮官か。あの人数でここを攻めるのは無謀だと言っのに。いつもの通り、零に処理させたまえ」

「ところがギッチョンチョン、拠点防衛用スライムがカチンカチンのアイスになったですだ」

ヒロ子さんは楽しそうだよ。俺はただ見ているだけ。監視カメラの映像は兵隊が、小型のボンベを手に行っている。

「ほほう、液体窒素ボンベか。脳筋の彼らにも学習能力があるみたいだ。こちらで試作の屍鬼隊を出したまえ」

「博士、屍鬼隊って何ですか？」

「以前に零が処理した兵隊の死体を特殊加工したゾンビ・ソルジャーだよ。まあ見たまえ」

メインモニターには完全武装し、奇怪なガスマスクを着けた兵隊12人が、異界化した廊下を自動小銃を構えて走っている。

「まっこれで『偉大な首領様！』』『ぜっ全滅？ 3分も持たずに12体の』『超ゲキヤバですう』『」

「どうした零？」

『ご来店頂いたお客様』『あれはボス悪魔よ！！』『憎いサマナーでっという』

「ほほう、サマナーもいるのか。零だけだと、ちとばかり厳しいか？』

モニターには黒焦げの死体が見える。紅蓮の炎に包まれた双頭の顔を持つ巨大な獣がゆっくり進み、その後ろを完全武装の兵隊とサングラスを掛けたスーツ姿の男が見える。

「あれはオルトロス！！あの魔獣を召喚出来るサマナーがいたとは……い、いかん！！零だけでは危険だ。ヒロ子くん！！」

「オルトロスって確かギリシャ神話に出てくる魔獣じゃないかよ」

ヒロ子さんは暢気に爪にマニキュアを塗っているよ。別のモニターに映っている洒落たスーツ姿の男がサングラスを外した。こいつ見覚えがある、ま、まさか！！

「ああッ！！あいつは！！」

思わず大声でモニターに指を指す。

「どうした？ 涼太くん」

「あのサマナーは山田一郎ですよ！！ まさかあのキモい変態が来ているなんて……」

ヒロ子さんは、塗るのをやめてモニターを睨んでいる。こっ怖い。

「あの『山田一郎』くんかね？ 彼の力量ならオルトロスを召喚するのも可能だろう。アトラックめ、彼を雇ったのか……い、いかん！！ 零が倒されたら異界が解けてしまう！！ しかし彼はここが『中立』だと知っているはずだが……予備の壺太郎と式子も出すか」

冷静なチヨビヒゲがうるたえているのはいい気味だ。

「無駄。あのヤロー、ヒロ子さんの涼太を狙って糞生意気。今度こそあたり前田のクラッカーにしてやる」

「うわっ指をポキポキ鳴らしているよ、この人。あたり前田のクラッカーって何？」

「ヒロ子くんなら一郎くんと互角に対抗できるが、念の為サポートに零をつけるか」

「いらない、涼太を連れて行く」

「じよ、冗談でしょ？ あいつ、まどかさんに頭を撃たれても平気だったバケモノですよ！！」

リアルで頭を撃たれて平気な人間なんていない。

「うゝむ、涼太くんの身体能力と力量では、ヒロ子くんの足手まといにしかならんか」

ハッキリ言うなあこのチヨビヒゲ。事実だから仕方ないけど。博士は腕を組んで考え中だ。

「涼太ならあのロボツ娘を起動出来る。すると愉快的珍データが取れる、かもよ」

「おおっ！！ その手があつたな、早速だが君にも手伝ってもらうぞ」

すみません。あなた達が納得しても僕は？です。

「すぐに君の調整槽へ入ってもらうよ」

「え、チヨツ、ちよつと待ってください」

手を引っ張られ、調整槽のある部屋に来た。円筒形のガラスケースが左右の壁に並んでいる。

「早く脱ぎたまえ。今更、恥ずかしがる訳ではあるまいに」

諦めて目を閉じ、ピンクのジャージを脱ぎ捨て円形の台座の上に立つ。ヒロコさんが俺の身体に電極のコードを付け終わると、カプセルが下りて来た。下から透明の液体が溢れ出して冷たいよ。たちまちにカプセルの半分に届き、俺の顔までに達した。

「ウグッ！！ くっ 苦しいよ」

意識が途絶えた。

ココハドコ？ カラダナイ……

マツクラ、ナニモミエナイ……

アナタハダレ？

ワタシハダレ？

アナタハワタシ、ワタシハアナタ、フタリデヒトリ、ヒトリデフタリ

リンクセツゾクカンリヨウマデオマチクダサイ

セツゾクカンリヨウ、ステータス・メタボリズム・チェック……
コンデিশョンオールグリーン。

キドウプログラムヲジツコウシマス。シバラクオマチクダサイ。

途端に視界が明るくなった。どこかで駆動音が響いて腕で支えて起き上がろうとするが動けない。

「ドウなってるんだ。まるで麻痺してイルみたいだよ」

ワタシハオルガゼロスリー。コンゴトモヨロシクオネガイシマス。

ええ、頭の中で艶のある女の声がする。身体を見ると生身の人間じゃない。

「こちらこそヨロシク……って、なな、なんじゃこりゃ？ あの人造人間かヨ」

俺の思考がオルガとリンクしているので、例えば起き上がろうと

すると彼女が身体をコントロールするようだ。

『聞こえるかね？ 涼太くん』

突然視界に博士の画像が現れたよ。思わずヘッドホンみたいなのに触るが外せない。

「聞きたくなくてもバツチリ聞こえますヨ」

『おおっ 無事に起動したな。それでは隣の部屋で装備を受け取ってくれたまえ』

「装備つて？」

『戦闘用のホディースーツだ。今の君は素っ裸同然だぞ。それと会話する時は声に出さなくても通じる』

『りよ、了解デス。ラジャー』

あれっ？ 妙な喋り方だったぞ。隣の部屋に入るとヒロ子さんが待っていたが、白衣姿でなく。メタリック調の黒い着物姿に高い下駄で、蛇の目傘を手にしている。

「アレを装着しろ」

見ると戦闘用ボディースーツは上下一体型で、スキューバ・ダイビングの時に着るウェットスーツに似ている。色はメタリック調で黄色と黒のツートンカラーだ。材質はゴムとも皮でもない未知の素材だ。正面が大きく開いているの為、着るのはストンと収まり自動でフロントが閉まっていく。後は太いベルトを締めて完了だ。

ソウチャクカンリヨウ・パラメーター・ステータスノヘンカンカイシ……シバラクオマチクダサイ……

視界に高速で機械言語が流れている。

ヘンカンシュウリョウ・ナマエノトウロクヲシテクダサイ

名前ってOLGAじゃないのか？

オルガハコードネームデス・トウロクガミカンリョウデストキド
ウデキマセン

まいったな、俺はゲームをやるときでも最初の名前を決めるのに
時間がかかるんだ。

姓は、シロガネ 名は、リョーコ。

トウロクカンリョウシマシタ

名前は以前やったRPGゲームの女主人公だ。

『ふむ、馬子にも衣装じゃなく美しい……』

アンタに言われてもちつとも嬉しくねーよ。両手を見ていると自
分の意識が別の身体にあるなんて夢みたいだ。違和感が全くないよ。
最初からこの身体だったのかと思うくらいだ。

マシントノドウチヨウハモンダイアリマセン。

名称：シロガネ・リョーコ

年齢：19 性別：女 職業：ニート 性格：冷静
LV：14

種族：マシン系電人 悪魔名：OLGA03

属性：N / N
HP：130 MP：42 CP：14
力：15 + 1
魔：1 + 6
体：11 + 1
速：2 + 7
運：2 + 8

すっ 凄い！！ まるでゲームの画面みたいだ。しかしマシン系電
人が悪魔とはね……

『おほん、武器だが……ビームライフルやバスターランチャーは無
いぞ』

それは残念。

『代わりと言うか、標準装備の武器はリボルビングステークがある。
それを使いたまえ』

「それって？ どこかで聞いたような」

『右腕部分のアーマーに内臓されている、小型の釘打ち機だ。他に
も内臓の武器はあるが、詳しくはオルガからレクチャーを受けたま
え』

「ロボッ娘、とつとと逝くぞ」

「行ってくて……ヒロ子さん、その格好で？」

着物姿では動きが鈍いのでは？

「ふふん、着物はヒロ子さんの戦闘服なのよ」

ヒロ子さんの後に続き、部屋を出た。エレベーターに乗り、1階

に出るとエネミーソナーが反応する。網膜に直接表示されるレーダーには赤い点が2個、黄色が10個表示されている。

ダンナサマ、アクマシヨウカンプログラムヲキドウイタシマス。
リストカラナカマヲセレクトサモンネガイマス。

旦那様って……妙に艶のある口調だよ。

いや、先にあのオルトロスをアナライズしてくれ。

デビルアナライズ……カンリョウ、データヲヒョウジイタシマス

悪魔名称：オルトロス

神族：ガイアネス神族

種族：獣族系・魔獣

Lv：28

HP：????? MP：?????

CP：???? 魔貨：???? MAG：????

力：19 魔力：?? 体力：13 速さ：15 運：12

相性：火炎吸収、破魔・??・バッドステータス無効、氷結弱点
バッドステータス耐性：??

属性：N・N 会話タイプ：獣・下位 性格：獰猛 信頼度：?
??

装備：???? アイテム：????

スキル：動物変身、通常攻撃、雄叫び、パニックボイス、毒噛み
つき、炎の壁、ファイアブレス?、デクンダ、???, ???

種族スキル：獣の跳躍

自動効果スキル：火炎高揚、???

月齢対応：???

俺のCOMPだと表示されないパラメーター、Lv・HPデータが網膜に直接表示されている。

コレイジヨウノアナライズハイマノレベルデハフカノウ。コノオルトロスハバランストレタスキルヲショジシテイマス。シエキシテイルサマナーハカナリスグレテイルトハンダンシマス。

「レベル28って今の俺からするとボスクラスじゃないか!! さすが山田のオッサンってところか……? オルトロスには氷結攻撃が有効、ならユキジヨロウだよな」

DEGITAL DEVIL SUMMON SYSTEM OK
MAG BATTERY OK
CONDITION OK
SUMMON OK
GO

召喚魔法陣が青白く輝き、鬼女ユキジヨロウが実体化した。

「せっかく気分よく雪見酒を飲んでいたのに……召喚師殿その姿は、からくり人形……面妖な……しかし中からは我が主の魂を感じますわ」

「実は……」

俺は彼女に今までの事を説明すると訝しそうな顔をしていたが納得したようだ。

「私を召喚したのは賢明な判断ですね。凍てつく吹雪の舞であの獣を打ち倒してご覧にいれましょう」

「うん、頼むよ」

兵隊達はオルトロスを戦車に見立てて背後に控えている。遠・近距離に対応出来る組み合わせでかなり厄介だ。まだ、通路の角にいる俺達に気づいていない。兵隊を拡大で見ると米軍の兵隊と同じヘルメットを被っているが顔は髑髏のように肉が削げ落ち上半身裸で人の顔が見える。

「あいつら……人の皮を剥いで被っているのかよ……クッ!!」

拳をギュツと強く握り締めるが不思議なくらいに動揺はしない。これも同調している効果なのか。

「ヒロ子さんはあのヤローを相手にするから。ここはロボッ娘に任せる」

「むっ 無茶ですよ!! てっ」

ヒロ子さんは俺を抱きしめる。香水がセンサーに反応する。

「今の涼太なら大丈夫。だがオルトロスは無視しろ。今のロボッ娘達には無理だ」

そう言うつと反対側の通路に向かった。

さてどうするか、うかつに近寄るとオルトロスのファイアブレスにやられてしまう。ここはユキジヨロウのブーラで凍結させてからだ。

あれっ? 一瞬、オルトロスの姿が陽炎みたくゆらいだような……

「くっ!! あれでは私の氷結魔法が相殺されてしまいますわ。獣のくせに生意気な」

ユキジヨロウが自分の鋭い爪を噛む。

「ブフーラで打ち消せるが、その後に炎の壁を使われたら意味がないか」

増援を待っているのか、それとも異界化した通路にトラップが仕掛けてあると警戒しているのか、オルトロスは動かない。兵隊達も背後に控えたままだ。これでは手詰まりだよ。

オルガ、武器と言うか攻撃手段は無いのか？

ダンナサマリストヲヒョウジシマスワ

■素手攻撃

：0 ：前1：格闘：打撃：

■リボルビングステーク

：0 ：前1：格闘：突撃：装弾

数20

■鉄拳パンチ

：5HP ：前1：格闘：打撃：左

手のみ有線式ロケットアーム

■暴れまくり

：20HP：前列：力 ：格闘：打

撃：

■正拳突き

：5HP：前1：力 ：格闘：

打撃：クリティカル時は3倍

■回し蹴り

：12HP：前列：力 ：格闘：

打撃：

■放電

：15HP：前1：力 ：格闘：電

撃：

「これって全部接近戦用じゃねーか！！」

これでは近寄る前に兵隊の射的になってしまう。俺には無謀な真似はできない。

オルトロスさえいなければ。

「召喚師殿、どう致します?」

「こちらから仕掛ければファイアブレスと銃撃の的だ。ここは待ちだ」

あいつらから動けばユキジョロウのブーラで炎の壁を打ち消し、俺が電撃波でオルトロスを感じさせて他の仲魔が兵隊を倒せる。もう1体召喚しよう。

幽鬼ガキ、外道スライム、屍鬼ボディコニアン、幽鬼オキクムシの4体しかない。悪霊の???は召喚不可だ。オルトロスには効かないが兵隊にはバッドステータス攻撃が有効かも。

オルガ、あの兵隊をアナライズしてくれ。
イエス、ダンナサマ。アナライズ……カンリョウ、ヒョウジシマス。

悪魔名称：ガイスト兵

神族：無し

種族：邪霊系、屍鬼

Lv：15

HP：150 MP：69

CP：30 魔貨：??? MAG：???
力：??? 魔力：??? 体力：??? 速さ：8 運：5

相性：呪殺無効、???、破魔・火炎弱点

BS耐性：石化無効

属性：D・N 会話タイプ：??? 性格：狡猾 信頼度：0

装備：??? アイテム：???
スキル：???、武器攻撃、射撃攻撃、スーパースhots、制圧

攻撃

種族スキル：逆恨み

自動効果スキル：????

月齢対応：????

呪殺は効かないけどバッドステータスはおKみたいだ。眠らせてから永眠の誘いでトドメをさせる。

「ナオミを召喚だ」

イエス、ダンナサマ、サモンシマス。

「はぁーい、ナオミだよって……涼太くんなの？」

俺は事情を話した。

「なるほど。外見は『木偶人形』でもソウルは涼太くんだから気にしないワケ」

ダンナサマ、オツムノヨワソウナシキヲコッソリバラシテモヨゴザンスカ？

だ、駄目だよ。仲魔同士仲良くしないと。

「ナオミのセクシーダンスで魅了させて同士撃ちをさせるか、ユキジヨロウのドルミナーで眠らせてから永眠の誘いで倒すしかない」

「了解なワケ」

「それしかありませんね。問題はオルトロスです」

「その時は俺が一気に間合いを詰めて放電を食らわすよ」

感電させて行動を封じれば何とかなるさ。
その時、オルトロスが動き出した。鋭い目が俺達を睨みつける。

「ムウ、アルジガアブナイ……オレサマヒキアゲル。アトハオマエ
タチノスキニシロ」

「お、おいオルトロスさんよお、話が違うじゃねーか」

「そうだぜ、アンタ俺達の護衛だろ」

「ふざけんなよ！！　こりや契約違反だぜ」

ガイスト兵達の下卑た大声が聞こえる。オルトロスは無視して来た道を引き返し、一瞬俺達に振り返る。

「オレサマ、アルジダイジ。サマナートナカマヨ、イノチビロイシ
タナ」

「あの獣はどうしたのでしょうか？」

「さあ、よくわかんないワケ」

「今、ヒロ子さんと山田のオッサンが戦っていて、オッサンが不利
になったから助けに行っただろう」

俺達とオルトロスとは力量が違いすぎるが、あのガイスト兵なら対処できる。その後、ヒロ子さんと合流しよう。俺達がゆっくり進むと気づいたようだ。

「おい見ろよ、極上のナオンどもじゃねーか」

「へへ、あのピンクのエロい服着た女、チョー好みだぜ。俺様のモノでじつくりと可愛がってやるぜ」

「どんな悪魔が待ち伏せしていると思ったが……こりやオルトロスがいなくても俺達で楽しめるな」

「ヒヒヒ、すぐには殺さねえ、じつくりとじわじわ齧って生かしたまま皮を剥いでやるっぜ」

「おう、戦場では男の皮ばかりだったからな。女悪魔どもの皮は珍しいぜ。へへ」

「ウヒヤヒヤ、数では俺達が有利だからもったまんねーよ!!」

ガイズト兵達は俺達を取り囲んだ。

「よう、お嬢ちゃん達。俺達に輪姦される為に出て来たとは運が無かったなあ」

「へへ、こっちの白服のスケ、スカしたツラしやがって、素っ裸にして泣き喚かせてやるぜ」

「俺はそっちのエロいダイバースーツを着た女だ。〇〇〇に銃剣を突っ込んで腸を掻っ捌いてやる」

「おい、そいつは俺の獲物だ!! 横取りすんなよ!!」
「うるせえ!! 俺が先だ!!」

リーダーらしいガイズト兵は葉巻を取り出し、オイルライターで火を点けると深々と吸うと、オイルと葉巻独特の匂いが漂う。

「お嬢さん方、最後のお祈りは済ませたかね？」

「へへ、俺達は何れでも慈悲深いんだぜ、楽しむ前に最後のお祈りをするくらいは待ってやるぜ」

「なんたつて俺様達はジェントルマンだからな、ただ食うことしか考えない妖獣や幽鬼の連中とは違うぜ、ギャハハハ!!」

ガイズト兵達は下卑た笑いをする。ナオミが両手を上げて身体をくねらせた。

こいつら最低……モヒカン頭だったら世紀末伝説に出てくる悪党だ。

『召喚師殿、彼奴等、私達を舐めていますね』

『こいつら屍鬼っていうより外道よ、一緒にされると非常に迷惑なワケ』

『うん、確かに外道だよ。今の俺は怒りもしなければ怯えもしない』

「アンタ達こそ、最後のお祈りを済ませたのか？　これから俺達にやられるとも知らずに」

「なん……だと？」

「ふざけやがって！！　おい！！　やっちまえ！！」

自動小銃が火を噴いた。2体が仲間を狙ったのだ。

「ばっ馬鹿野郎！！　あぶねえ！！」

「おいッ！！　何やってんだ！！」

「くそッ　こう近いと銃が使えん！！　同士討ちになっちまう」

「おい、やめろっ！！　味方を撃つなつてのがわからねーのかよ！！」

ナオミのセクシーダンスで魅了したガイスト兵2体が撃ち続けている。

「放電を食らえ！！」

「ウギヤアアアー！！」

絶叫を上げて倒れたところをリボルビングステークでトドメを差した。

「凍りなさい、マハ・ブフーラ！！」

事前にブフーラで炎の壁を打ち消済みで、5体が凍結して動けな

くなる。あと3体だ。

ダンナサマ、シキノサポートニマワリマス

ああ、分かった！！

爪を伸ばして戦っているナオミの背後から銃を棍棒代わりにしているやつがいた。

「ナオミ、危ない！！ 鉄拳パンチ！！」
「ウグウッ！！」

肘から先の射出された左腕は命中しガイスト兵を吹っ飛ばした。

「サンキュー涼太くん！！」

左腕のワイヤーを巻き戻した。自分腕がびよんと伸びたように変な感じ。ナオミは転倒したガイスト兵に鋭い爪で切り刻み、喉元を噛み千切った。

ガイスト兵達は俺達を無視して同士討ちし生き残ったのは4体だ。

「私の唄でお眠りなさい」

「うおッ 眠気が……ちっ畜生……」

「お前ら寝るんじゃないよっ……」

「糞……」

「ほほほ、それでは永遠にさようなら」

眠っている者を完全に即死させるスキル『永眠の誘い』で残りを倒した。

「何かこうも簡単に勝てるとは思わなかったな……」

「悪魔に祈りなんて不要なワケ」

「彼奴等、私をか弱い女と思つて侮つたのが運の尽きですわ。さすがオツムの弱い屍鬼」

「アンタ！！ アタシに喧嘩売つてるワケ？」

「あら、貴女とは言つてませんですわよ、ほほほ」

「コイツ食い殺す絶対！！」

「きゃあ怖い、怖い。助けて召喚師殿」

ユキジヨロウは俺の背中に隠れる。

怖がつてないよ。それ面白がつてると言つんだ。

ダンナサマ、トメナイノデスカ？

「ナオミをからかうのはやめろよ。ユキジヨロウ……」

「私を雪姫と呼び下さいませ」

「ゆ・き？」

「はい、美しい雪の姫、雪姫でございます」

「ギキギ！！」

「あらあら、色ボケした下品な顔が益々、不細工ですわよ」

「ウギヤアアア！！」

逆上して飛び掛つたが、素早く避けた。

「それでは失礼いたしますわ、ほほほ」

おい、勝手に帰還したよ。

ダンナサマモクロウガタエマセンネ、コレカラガタノシミデス

おい、勝手に楽しむな。

「涼太くん！！ アイツを適当に合体させてスライムにするワケ！

！
」

「戦力が乏しい今は彼女も重要な戦力だからそれは無理だよ」

「それは分かっているワケ……でも馬鹿にされて悔しい……」

ナオミは俺に抱きつく。本当、ゾンビでなければエロかわいいんだよな。

「と、とにかくヒロ子さんと合流しよう、な」

ヒロ子さんの実力は分からない。ただ一人で戦うのだから何か策があるのかもしれないが、あの山田一郎は他に仲魔がいるはずだ。

俺とナオミは駆け出した。

第15話 選択

ヒロ子さんの实力は分からない。1人で戦うのだから何か策があるのだろう。あの山田一郎は他に仲魔がいるはずだ。地下施設は異界化しているのでオート・ナビシステムを頼りに追う。

ナオミを山田一郎に見られると怪しまれるので戻した。

「いた！！ あッ！！」

あのオルトロスが倒れていた。その横に無表情のヒロ子さんと笑みを浮かべている山田一郎がいる。

「わたしのオルトロスを倒すとは……さすが『白衣の女王』の異名は伊達じゃないですねえ」

「ブツ殺す前に、ここが『中立』と知っていて奴等に加担しやがる？」

「ふふ、わたしは単なる案内人ですよ。この子が貴女に噛み付いたのは、わたしを守る為ですからねえ。所謂、正当防衛ですよ。もう一つの目的はオルガ02の後継機をこの目で確認する事です。おつと目的は達成出来ました」

2人が俺を見ている。あのオツさんも俺がオルガと同調しているのは知らない筈だ。

「なるほど、顔はあの方に似せて、ボディはヒロ子さんをモデルにするとは博士も良い趣味してますねえ」

「ふん、他に遺言があればとつと言いやがれ！！」

「いえいえ、ここはわたしにとってアウェイ。ホームの貴女と楽し

むのは分が悪過ぎですよ。では、これにて失礼。またお会い致しますしょう」

恭しくお辞儀をすると山田一郎の姿は消えた。

「きつ消えた？」

「トラフリー、転送魔法。逃げ足だけは速いやツだ」

転送魔法って、絶対あいつ人間じゃねえ。

管制司令室に戻ると、博士は腕を組み、ノイローゼになった動物園の熊みたいにウロウロしていたが、俺達を見ると安堵の笑みを浮かべた。

「おおっ！！ 無事だったな、さすがヒロ子クンだ。何とも無い、か。あの彼が彼奴等に加担するとは……抗議文書を送るか？」

「あの、中立って？」

博士は『何故、そんな当たり前の事を訊くのだ？』と言う顔で俺を見た。何かム力つくよ。

「そうか、君は知らなかったか。悪魔に関連する施設内での戦闘行為は一切禁止と、暗黙の内に取り決められているのだ。これはカルト狂の組織も順守している。もし破れば回状が廻り、全ての施設が利用不可能になるからな」

「へえ、そうなんですか、知らなかった」

ヤクザの世界で言う破門や絶縁みたいなものか。

「これで連中もしばらくは大人しくなるだろう」

「あの、ところで同調を解除するにはどうすれば……」

「簡単だよ。君が念じれば戻れる。それより昼食の時間が過ぎてしまったな。別室で食事をしながら君の疑問に答えよう」

言われて網膜に表示されている時計を見ると14時を過ぎている。時間が過ぎるのが早いよ全く。

同調を解除して調整槽から出ると、シャワー室で身体を洗い、用意されていた下着と制服を着ると途端に物凄い空腹感に襲われた。

「そついやオルガと同調していた時は全く気にならなかったな」

「当たり前だのクラッカー。電人はバッテリーから供給される限り、問題はナッシング」

別室は豪華な飾り付けをした応接室で、奥の壁側に大型の液晶のモニターがある。テーブルには豪華なフランス料理？ が用意されていた。

俺と博士、ヒロ子さんは椅子に座るがオルガは俺の背後に立っている。零は後処理の為、この場にいない。

空腹のせいか、慣れないナイフとフォークで遠慮無くガツガツ食べる。ワインは未成年なので遠慮する。飲んだら酔い潰れるのが分かる。

「美味しい。誰が作ったのですか？」

「零だよ。彼女は当研究所の料理長だ。あの業魔殿で修行させたから、腕前は一流レストランのシェフと同等かそれ以上だ」

ヒロ子さんは当然だと言う顔で俺を見た。優雅に食事を摂る姿は雑誌のモデル以上だ。オルガは給仕の代わりを務めている。

「業魔殿か、それなら納得です」

あそのフランス料理は最高だとネットのグルメランキングの上位だからな。

博士とヒロ子さんはグラスに注がれた赤ワインを飲み、先端医学の現状を語り合っている。仕事中に飲酒してヤバイんじゃない？ 俺は食べるのが先で話はそれからだ。

「ご馳走様。凄い美味しかったです」

家族とでもこんな料理を食べる機会は年に数えるほどだ。2人が見ていなければお皿をペロペロと舐めたいよ全く。食後のコーヒをゆつくりと飲み干す。そして俺達は遅い昼食を終えた。

「君も満腹になったみたいだから質疑応答としようかな。先に言っておくが悪魔召喚プログラムとそれに関するシステムは専門外だぞ。それ以外で答えられる範囲に限るからな」

？アトラックとガイスト兵について

？山田一郎とは博士と知り合い？

？ここの地下施設について

？定期更新を怠ると身体にどんな異常が現れるのか？

？零は電人？

？1年以上前の銀座で起きた爆発件の新しい情報

今はこれぐらいかな。

「アトラック・バイオ・ケミカル・ジャパン社は外資系の多国籍企業でM&A……企業買収や合併によりここ最近急成長した。製薬業

界に参入したのは近年だが、その為、環境汚染や違法の投薬試験、闇献金で問題を起こしている。以前、我輩に提携の話があったが、あんなヤクザ企業に協力したら最後、骨までしゃぶり尽くされたあげくお払い箱にされてしまう」

「で、博士は断った」

「ははは、そしたら定期的な嫌がらせを受ける事になったよ」

自嘲気味に笑う博士。あの襲撃は嫌がらせなんて言うレベルじゃないぞ。

「ガイスト兵は連中の呼び名で、ゾンビ・アーミーもしくはゾンビ・ソルジャーとも呼ばれる屍鬼だ。性格は獰猛で残虐、その上、銃を使う知能があるから、集団で襲われるとかなり脅威になる」

「じゃあ製薬会社で造られたゾンビかよ。全く碌な会社じゃないな」

本当、やれやれだよ全く。ヒロ子さんは俺達を見ている。

「オルガと零に調べさせたが国内にある研究施設では造っていない。どこかの『死体再生業者』にでも外部発注したのだろう。死体はもつと医学の発展に使うべきなのだ」

博士、アンタも変だよ。

「山田一郎くんは性格と趣味はまあアレだが、サマナーとしては優秀だ。その彼も駆け出しの頃は良く怪我をしてここを利用していたが、ある大手組織からの勧誘を受けてからは来なくなったな」

「……」

「今の君では彼に勝てないぞ」

「それは分かります。で、あいつは人間ですか？」

博士は不思議そうな顔をして、ヒロ子さんは目を逸らしたよ。

「人間離れをしているが紛れも無く人間だよ。何故そう思うのかね？」

「以前、まどかさんに銃で身体と頭を撃たれても平気でしたよ」

博士は一瞬、眉を顰めた。

「ほほう、何か特別なスキルでも身に着けたのか。是非彼を調べたいな」

「今度、生け捕りにして生体解剖してやる。ノー麻酔だ」

ヒロ子さんもさりと凄い事を言うよ。

「天馬医院は『悪魔退治に携わる者達の回復施設』だ。我が医術で戦闘不能になった悪魔、人間を蘇生回復する。当然、相応の報酬を頂くが君は小夜子さんの孫だ。特別に割引をし、アイテムも独自のルートで調達して格安で分けてあげよう」

「助かります。それと定期更新を怠ると俺の身体は……？」

まさか、身体の構成能力が衰えて崩壊するとか……博士は無言で俺を見ている。

「止めても君の身体が崩壊しスライムになる事は絶対に無い。更新は深町涼太として生体維持・認識の為だからだ」

「それなら……」

「あの爆発で君達の身体は四散し、それを我輩が1つの身体に融合再生したのだ。車に例えるなら2台の事故車を1台に再生したのだ。クローニングや完全造魔だと人格、知識が白紙になるからな。姉上が目覚めなかったのが誤算だったがな」

身体は健全な高校生、でも頭脳は零歳児。うわっ最悪だ……

「今の君は深町涼太であり姉上でもある。つまり『異能者』と『覚醒者』が事故によって1人の『融合体』として目覚めた」

2人で1人か。異能者、覚醒……融合、まるで小説に出る言葉だよ全く……

「で、博士。異能者って何者ですか？」

「サマナー、魔術師、修験者、超能力者、他に色々あるが能力者の事だ。違いは『異能者は能力を1つ』のみ、『覚醒者は2つ』だ。一郎クンとヒロ子クンは覚醒者だ。君が彼に勝てないと言うのは、その能力差があるからだ」

「なるほど、俺はサマナーの能力を持つ異能者で、姉さんも……それなら」

「これらの能力は一般人として生活するのに不要だ。寧ろ『百害あって一利なし』だ。周囲に迷惑をかけるだけでなく『各勢力』から狙われる」

博士はコーヒーマーを一口啜ると溜息をついた。

「各勢力……クズノハや『神宮の森』辺りなら強引な勧誘で済むが、『聖十字メシア教会』や『ガイア派』の狂信者達に見つかれば良くて拉致され洗脳か人体実験、最悪は秘密裏に処理か、おぞましい儀式の生贄にされてしまう。奴等は人の命なんて何とも思っていないぞ」

「……」

口に出して言わないけどアンタだって同類だよ……

「更新が有効な限り、君は深町涼太として普通の生活を送れるが、まさか一郎クンに目を付けられるとは面倒な事になったな。彼は一度狙った相手を逃がさないからな」

「済みません……」

腕を組み唸る博士に謝る。

「まあ過ぎた事を今更言っても仕方が無いしな。それよりも今後だ」「今後ですか？」

「君はデビルサマナーとしてこの魔都東京で悪魔達と戦い、共に生きる覚悟はあるかね？」

ヒロ子さんとオルガは無言で俺を見ている。その顔は無表情だ。

覚悟、か。大門さん、黒井さん、まどかさんからも問われた。

「勿論です。悪魔と共に歩みます。かなり怖いけど」

「それなら結構。怖いのは誰でも同じだよ。それは恥でもない。我輩達も出来る限り、君を支援しようではないか。なあヒロ子クン？」

「涼太が決めたのなら反対はしない。それに涼太の敵はヒロ子さんの敵でもある」

「オルガも旦那様を前から後ろからズツポリサポートします」

「こ、今後とも宜しく……」

2人の笑顔を見ると緊張が解ける。

「返答如何によってはオルガを取り上げるつもりだったが、君に預けよう。ヒロ子クン、COMPを彼に返したまえ」

「……」

うわっ！！ ヤバかった。COMPをヒロ子さんから受け取る。

「ありがとうございます。俺の身体は……」

身体の内から、這い寄るような黒い衝動が湧き上がる。もし身を委ねたら……

「君の身体については選択肢が3つある。たっ頼むからその笑顔は止めてくれ！！」

傲岸不遜な、博士がうるたえている。いい気味だ。

？引き続き定期更新を受ける。

？更新を止める。

？人型の悪魔と合体して悪魔人になる。

悪魔と合体って？ 僕、人間を辞めちゃいますってかよ

「？を続ける間は深町涼太としていられるが、同時に姉上の能力も封じられる。それに更新の間隔が短くなると調整槽に入っている期間が長くなり、最終的には出られなくなる」

「更新が効かなくなるのはいつ頃ですか？」

「君のデーターを見ると年内か年明け早々と言ったところだな」

「……」

「？は深町涼太として維持が出来なくなり一定の周期……月齢の影響で君の場合は新月から満月迄が女、満月から新月迄が男として過ごす事になる」

「そんな……仮に止めたら急激に変化するのですか？」

博士は首を横に振った。

「身体に変化が現れるのは満月時と新月時のみだから次の新月迄は男でいられるぞ。今後の事を考えれば我輩はこちらを勧める。姉上の能力も使えるから覚醒者と同等になれる」

「？悪魔の中には人間に変身する能力を持つ者もいる。君が悪魔と合体して悪魔人に転生し、その能力を使えば人間の男になれる。更に悪魔の能力も身に着けて一石二鳥だ」

「悪魔と合体なんて……無茶な……もし、悪魔に乗っ取られたならヤバイじゃないですか！！」

「それは己より強大な悪魔の場合だ。悪魔の力と引き換えに超越者になる可能性失うからベストな選択とは言えない」

そんな方法を選択肢に出すなよ。

「更新の有効が切れるのは今日から10日後だ。不安定だが新月の直前で更新する手もあるぞ」

「その手があるか。この話は置くとして、零も人造人間ですか？」

「零は違う。彼女はスライムだ」

「ええ？ スライム？」

「彼女は拠点防衛用の特殊なスライムで人間変身と動物変身の能力を持っている。会話は普通に話せるが、まああれは彼女の趣味だ」

声は甲高いアニメ声だけど目つきが不気味でミスマッチだよ。

「最後に1年前の銀座で起きた爆発……自爆テロの件ですが……」

「銀座ガス爆発事件、自爆テロとも言われているが新たな情報は無い」

「そうですね……後は、博士、ヒロ子さんが教室に乱入して大騒ぎになったけど、どうなりました？」

「その点は大丈夫だ。ヒロ子くんが催眠暗示で平常通りにさせたか

ら問題は無い。君は体調不良で早退扱いにしてある」

まだ聞きたい事があつたけど後でいいか。しかし俺の身体……

「今日はどうするかね？ 泊まるなら部屋を用意するが」

「色々と用事があるので帰ります」

「そうか、では上に戻るか。後片付けは零に任せよう」

突然、博士の携帯が鳴り響いた。

「もしもし、零か？ えっ？ 来客？ 我輩にか？ 違う？ 涼太君に？ ふむ人間か、何い、若い新鮮な雌が一匹だと、監視カメラの映像をこちらに回せ」

携帯を切ってから俺を見た。ニタニタしてキモいぞ。

「人間の若い雌が一匹、君に用があるらしく待合室にいるそうだ」
「えっ？ 誰だろう？」

心当たりが無い。京子はここを知らない筈だ。

「おとなしそうな顔をして君もやるじゃないか？ ホテルに行くなら部屋をだなうごおッ！！ ひっ！！ ヒロ子く……」

ヒロ子さんに蹴られて座り込む。

「博士、キモい」

「映像が出るぞ。おお、中々のクール系美少女だ」

「嘘！！ 何で黒井がいるんだよ？」

部屋に備え付けられている液晶のモニターは、待合室の長椅子に座り、何かの本を読んでいる黒井が映っていた。当然、黒色のセーラー服姿だ。

日頃、DDS・NETをご利用頂きありがとうございます。
深町様にメールが3件届いています

> メアリです。以前お預かりしました。装備とカードをお返し致しますので、ご都合の宜しい日時に来て頂けないでしょうか。それと深町様が連れて来られた少女と『カード』についてヴィクトル様から説明がありますのでお待ちしております。

> (、/#。D)：………：ゴルア！！ リヨウ生きている？ 生きているなら早く来てよ、あの時の報酬を渡すからピンポンダッシュでレッツゴーよ。ティターニア様が帰っちゃうから絶対来てよね、(。D)ノ代々木公園に来ればアタシが迎えに行くから。バイバイ、(；D、)ノ

> スティーブンだ。私は多忙なので電話に出られない。質問があるならメールでこのアドレスまで送ってほしい。以上だ。

第15話 選択（後書き）

「はい天馬でございます。彼女の件ですが、こちらから選択肢を提示しましたので……はい、それは分かっております。いえ、オルガがいるので行動は把握しております。はい、もちろん会へ引き渡しますので……は？ その必要は無い？ それでは……いえ、そんな事はありません。はい、勿論でございます。いえ、この若輩者がそんな、いえその時は責任を……あの御方がそこまで……はい、失礼致します」

第16話 尾行（前書き）

人生は選択肢の連続である。

第16話 尾行

「嘘!! 何で黒井がいるんだよ?」

俺が待合室に向かうとオルガも後に続く。

「深町君、身体の具合は大丈夫?」

魔術本? を読んでいた黒井は、俺を見て軽い安堵の顔をした。

「平気だよ。それよりどうしてここに?」

「武原君から、深町君が早退してここにいて聞いたのよ。この女性は何?」

黒井は朝の騒ぎに巻き込まれていなかったな。

「彼女はオルガ、俺の仲間だよ」

2人は胡散臭そうに見合っていたが、オルガから手を差し出した。

「わたしはオルガ。旦那様の観察とサポートをズッポリしてます。今後ともよろしく」

黒井も躊躇いつつ握手した。

「黒井日菜子です。彼とは同級生でバイト仲間。よろしくね」

「オルガは、まだ日本語がイマイチなんだ」

「ふゝん、随分と親しいのね。ま、いいけど」

腕を組み何か言いたそうな目で俺を見る。こいつ何か勘違いしているな。

「ところで深町君、これからの予定は？」

「まあ一応あるけど……別に急ぎじゃないよ」

俺は黒井の横に座った。オルガは横に立っている。

「まどかさんから連絡があつて。逃亡した悪魔が廃工場に逃げ込んだのよ」

「えっ!!」

何だよ、それ。一大事じゃないかよ。

「そのサマナーは使役していた悪魔に殺されたわ」

「そ、それってかなりヤバイんじゃない？ 他に被害者は？」

絶対、警察の手には負えないぞ。でも、仲魔に襲われるのか……そんな事があるのかよ……

「まだ犠牲者は出ていないわ。そのサマナーが殺された場所は、深町君が罔になつて奴等に拉致された電子部品工場の近くよ」

「あそこか!! でもあの場所は竜也さん達が、何か処置した筈だけど？」

「一般人は結界に阻まれて入れないけど悪魔は別よ。そこは如月商会の訓練所として使う為、再度異界化しているの」

「へえ、そうなんだ」

「昨日、深町君に繋がらないので、今朝学校で話すつもりだったのよ。大門さんとは現地で待ち合わせをしているわ」

「実は……」

一応の予定を話すと黒井は腕を組んで難しそうな顔をした。

「この時間だと、どちらかになるわね。大門さんと待ち合わせは18時よ。どちらに行くかは深町君に任せるわ」

どうしよう？

↓？業魔殿に行く。

？代々木公園だよ。

？断ってゲームセンターか本屋に行く。

「だったら業魔殿に向かうよ、武器を預けてあるから。代々木公園だと予定外の時間がかかりそうだから後日にするよ」

「あの業魔殿に行きたかったら私も付き合うわ」

俺達は立ち上がった。

「旦那様、それなら博士に話して車を調達します」

「え、運転出来るんだ？ 頼む、助かるよ」

「おK、頼まりました。入り口の前でスタンバって下さいませ」

オルガは俺達から離れた。黒井はその後姿を見ている。

「彼女、人では無いわね」

「ああ、オルガは電人だよ」

隠す理由は無い。黒井は形の良い眉をひそめた。

「電人？ 魔人や電霊なら聞いた事はあるけど、深町君はマシンオ

ペレーターの素質があつたの？」

「マシンオペレーター？ 何それ？」

「サマナー系でも特殊な部類で、特殊なマシン操作や電霊と呼ばれる悪魔を召喚使役出来るのよ」

「俺、そんな才能は無いよ」

外に出ると、病院の専用駐車場に1台の外車が止まっていた。ガシメタリック色のメルセデス・ベンツだ。窓ガラスと、リアガラスは黒色のフィルムが張られていて車内は見えない。

「これ、先生のベンツじゃないか」

「この車で行くの？」

黒井は驚いている。俺達がドアを開けて後部席に乗ると、右側の運転席にオルガ座っていた。助手席には黒色のコートが置いてある。

「オルガ、場所は分かるか？」

「データーにあるので問題はナッシング。レッツらゴー」

俺達を乗せたベンツはお台場に向かって走り出した。俺は先方に連絡する為、携帯を取り出してメールに添付されていた番号に電話をする。

「深町です。これから向かいます。はい、お願いします」

携帯の通話ボタンを切った。Sクラスの後部座席は広く、本皮のシートは座り心地も良い。エアコンも効いて快適だ。黒井は大門さんへメールを送った。

「まさかベンツで業魔殿に行くとは思わなかったわ」

「はは、俺もそう思ったよ」

平日の道路は混んでいる。カーナビの情報では、首都高速3号線は事故で渋滞中だ。オルガは、レーサー顔負けのテクニックで山の手通りを飛ばす。

「その殺されたサマナーは如月商会の関係者？」

俺が尋ねると黒井は首を横に振る。

「まどかさんの話ではフリーのサマナーよ。0課がある事件の最重要容疑者として追っていたけど、捜査員は召喚した悪魔に返り討ちにされ、3人の内2人は死亡、1人は重傷」

「ひどい……」

捜査1課や4課とかはニュースやドラマで聞いた事があるけど、ゼロ課は初耳だ。

「ゼロ課って？」

「警視庁特別資料室「第0課」悪魔絡みの事件を専門に扱う部署よ」「警察にそんな部署があるんだ」

「如月商会は、有限会社として旧U課の時代から悪魔絡みの下請けをしていたので、急遽依頼が来たのよ。それに0課のメンバーでは、異界化した場所には入れないし、悪魔達に殺されるのがオチよ」

「その悪魔の名前は？」

「そこまでは確認出来なかったみたい。重傷を負った捜査員が言うには、毛むくじやらの大男とだけしか言っていなかったらしいわ。それとハンディCOMPがその悪魔に奪われたと報告されているわ」「えっ壊されたんじゃないのか」

「男を調べたら無かったのよ。私達の仕事は逃亡した悪魔の処理と

COMPの回収よ」

「警察からの依頼か……」

「そうね、正式な依頼と言うより、私達の訓練よ」

訓練か、俺は腕を組む。事前にその悪魔を調べないと思わぬ苦戦を強いられる。

「話を変えるけど、あの2人はこの業界では奇人変人として有名だから、あの病院へ通院していると聞いた時、耳を疑ったわよ」

俺が事情を説明するとかかなり驚いたようだ。俺の身体については黙って置く事にする。

「深町君のお婆様って凄い方なのね。あのヒ……博士の世話をしていたなんて……」

「まあね、親父が学生の時、家に下宿していたらしいし」

俺達が乗っているベントは、色々と裏道を抜けて大井に出た。そこから湾岸線に入ってお台場に向かうが、こちらも交通量は多い。

ベントを有料の専用駐車場に置いてから、俺達は水上ホテルの業魔殿に向かった。オルガの戦闘用ボディスーツはコスプレみたいに目立つので、用意した黒色のロングコートを着る。それでもモデルみたいに非常に目立つ。

「これが豪華客船ビーシンフル号……実際に見ると凄い迫力だわ」
「うん、俺も最初そう思ったよ」

入り口にいる見物人を避けながら中に入ると、上下白色のスーツ

を着た目つきの鋭い男とすれ違った。男は俺達を見ない。
ネットで嫁にしたいメイド？1のメアリさんが待っていた。

「お待ちしておりました。深町様の武器は、このバッグの中にありますので、後でお受け取り下さい。サマナー及びその関係者に限り、専用駐車場は24時間無料です」

「ありがとうございます。この2人は関係者です」

オルガは腕を組んで睨んでいる。アナライズしているのかもしれない。

「工房でヴィクトル様がお待ちしています」

俺達は地下にある工房へ続く隠し階段を降りた。

「業魔殿へヨーソロ」

金の刺繍が施された赤いマントに船長服姿のヴィクトルは異様な迫力がある。前回、マントで気がつかなかったけど、この人松葉杖で身体を支えていたんだ。

「若きサマナーと魔女見習いに、光明寺博士達の最高傑作電人オルガ……ふふ、妙な組み合わせだな」

「く、黒井日菜子と申します。お会いできて大変光栄です」

「オルガ03。今後ともよろしく」

それぞれ挨拶をする。あの冷静な黒井が緊張しているよ。

「急ぎらしいから手短に話すぞ。これは『悪魔カード』だ。女郎蜘蛛のデータがカードの形になっている」

俺はヴィクトルからカードを受け取った。どう見ても女郎蜘蛛が描かれた普通のカードだよ。

「カードの主な使い道は幾つかある」

？ 契約している悪魔との合体素材

？ カード同士の合体素材

？ 魔晶変化武器の合体素材

？ カード系スキルの必要コスト

？ 入手方法

「？ はサマナーと契約済の悪魔とカード合体。仲魔の記憶をすべて引き継ぐ。当然お主より強い悪魔は無理だ。？ カード同士を合体させ別のカードを作成する。上限はお主の力量……レベルから+5までが可能、当然未契約の状態だ。？ と？ は今のお主には関係は無いから省くぞ」

「？ 悪魔を倒してからカードハントするか専門店で購入するしかない」

・ カードハント↓自分のレベル+5の以上の悪魔からも入手可能。
その場合は契約及び使用不可。

・ カード購入↓高レベルのカードは高額になる。

「それと例の少女だが完全造魔だと分かった」

「完全造魔？」

俺達は顔を見合わせた。

「失われた超古代王朝の秘儀によって作成され、人に似せた人工の悪魔だ。錬金術で生み出されたホムンクルスやゴーレムなどと違う点は、合体で悪魔を取り込み、その悪魔の能力を得るという点にある。完全造魔を目覚めさせるのには、特殊なキーコードが必要で、知っているのは奴だけだ。本来なら研究の為、お主の戦力に思っただが……」

もし、あの時エンジェルを助けてていれば、その情報が手に入れたかも知れない。

「悪魔全書についてですが」

「悪魔全書は、必要なマッ力を支払えば登録された悪魔を再度召喚出来るのだ。利用するには邪教の館の主殿と話す必要がある為、早めに訪問する事を勧める」

「都内だと井の頭公園の近くにあるのよ」

黒井が説明してくれた。井の頭公園つて三鷹市の近くだったかな？

「他に質問は？」

「このリストにある悪霊についてですが……ってあれっ？」

ヘッドバイザーを被り悪魔召喚プログラムを起動して、仲魔リストを見ると少し変わっていた。ガキの欄にニコニコマークが表示されている。それと今迄赤色の悪霊が黄色の文字になっていた。文字化けして読めないのは相変わらずだけど。

「それは仲魔からお主に話がある時に表示される。召喚されなくても契約した悪魔は意識はあるのだ」

えっ魔界に戻っているんじゃないかったのか。

「勘違いする者が多いのだが、最新の悪魔召喚プログラムで契約した悪魔は、デジタル・デビルとしてデータ圧縮化しCOMPのメモリに登録される」

「そうだったのか。魔界から召喚していると思っていましたよ」

「魔界から直接召喚するには初期の悪魔召喚プログラムか、従来の大掛かりな召喚儀式になる。己の力量より上の悪魔も召喚出来るが生命の危険が伴う」

それは以前、ナオミから訊いたっけ？

「話が逸れたが、仲魔と会話だけであればディスプレイ召喚で充分だ。当然、マグネタイトは消費しない」

あ、本当だ。ガキにカーソルを合わせるとディスプレイ召喚が表示されている。

『サマナーオ・レヲガツタイシロイマノオレアシデマトイ』
『オレッツ・ヨクナツテイケメンニナリタイタノムサマナー』

初めて出合った時は、SAN値チェックで判定に失敗し、6D10を振ったような状態だったよ。

「黒井さん、時間は？」

「まだ大丈夫よ。もしかして合体でもさせるの？」

「ああ、ヴィクトル、合体させたいんだけど」

「それで、どの悪魔を合体させるのだ？ 今のお主ではあのカードは使えないぞ」

ヘッドバイザーを外してCOMPを渡すと、ヴィクトルはコード

を接続し、キーボードを操作するとモニターに表示された。

現在の仲魔

- LV08 幽鬼、ガキ
- LV11 屍鬼、ナオミ
- LV06 外道、拠点防衛用スライム
- LV10 幽鬼、オキクムシ
- LV16 鬼女、ユキジヨロウ
- LV?? 悪霊、???

■ 詳細を表示させる

「ナオミとユキジヨロウ以外でお願いします」

「ふむ、スライムとダーク悪魔では、スライムが吸収されスキルを1つ継承し完全回復するだけだ。これだとガキとオキクムシの合体だな。ダーク悪魔でも特定の同種族合体だと別の悪魔になるのだ。

例えば……」

■ 非ダーク悪魔×ダーク悪魔〓反発（高確率で1ランクアップかダウン。低確率でスライムか非ダーク悪魔2ランクアップ。事故率が非常に高い）

■ ダーク悪魔×ダーク悪魔〓共食（レベルの高い方が吸収して1ランクアップ。同レベルはランダム。事故率が高い）

■ 幽鬼×幽鬼〓夜魔

■ 屍鬼×屍鬼〓外道

■ 悪霊×悪霊〓幽鬼

■ 外道×外道〓屍鬼（スライム以外の外道）

「他の組み合わせあるが今のお主には関係無いので表示しない。ガキとオキクムシを合体すると……」

キーボードを操作すると、備え付けられたモニターに合体結果が表示された。

■Lv10 夜魔インプ

相性：呪殺無効、耐氷結、電撃弱点

スキル：ザンマ、ドルミナー、スク・ンダ、一分の魔脈、耐呪殺
継承スキル：デスタッチ、デ・クンダ

「継承させるスキルは変更する事が出来る。どうする？」

「うーん、悩むなあ……黒井さん、どうしようか？」

「それぐらい自分で判断しなさいよ……って何これ、ほとんどダーク悪魔じゃないのよ。まさか、ダークサマナーになるつもりじゃないでしょうね？」

黒井の目が怖い。お前、絶対にブツ殺すって感じだよ。

「そ、そんな訳ねーよ。あの竜也さんに殺されちゃうよ」

「分かっているならいいわ。ガキからはデスタッチで、このオキクムシは……かなり強化されているわね。御魂合体でスキル継承をさせたのかしら？ ヴイクトルさん、このディアラマ？ は引き継げないのですか？」

■Lv10 幽鬼オキクムシ

相性：呪殺耐性、電撃弱点

スキル：毒針、ペトラアイ、マハ・ムド？、ディアラマ？、デ・クンダ、追加魔法威力、呪殺無効、人間変身

「ふむ、良い質問だな。成長させたスキルはランク1で1個の扱いだ。ランク？は3個となる。このオキクムシからは1個しか継承出

来ないからディアラマ？は無理だ」

ヴィクトルがニヤリとすると怖い。

「スキル継承は以前よりは改善されたが、『成長進化』させたスキルは今後の研究課題でもある」

「他に回復系のスキルを持っている悪魔は無し、オルガさんは？」

「当然ナッシング」

「ふう、まどかさんの依頼を受けて生きて戻れたのが奇跡なくらいよ」

あの時はチャム・ファウがいたからな。もし仲魔にしていなかったらバッドエンドだった。

「それは所謂ビギナーズラックと言うやつだよ」

「ヴィクトルさん、悪魔カードは売ってくれますか？」

「悪魔カードは取り扱っていない。COMPのメンテナンスとカスタマイズ、ソフトの販売だ」

「そうになると今から邪教の館は時間的に無理。代々木上原にあるベルベートルームも厳しい、トラポートの能力を持つ悪魔はいない。

深町君の悪魔全書はまだ使えないとなると……」

黒井は俺を見つめる。

「今回は悪魔合体を見送った方がいいわ。でも決めるのは深町君よ、どうする？」

「どうするって言われても……この場は経験、場数を踏んでいる黒井さんに従うよ」

選択の余地は無い。

「賢明な判断ね」

「では悪魔合体は中止する。仲魔が増えたら来るが良い」

ヴィクトルからCOMPを受け取った。折角来たから何か聞きたいし、どうしよう。

「あっそうだ、質問があるのですが……」

？サマナーと契約した悪魔が裏切る条件。

？悪魔はCOMPを扱えるのか？

「ほう、お主も鋭い質問をする。サマナーと契約した悪魔は『召喚師と行動を共にする事を承諾』しただけで『完全に忠誠を誓っていない』のだ。悪魔には性格によって違いがある。例えば……」

■ 獰猛 ↓ 物理攻撃を好む。回復、魔法攻撃は嫌う。

■ 狡猾 ↓ 攻撃魔法と補助魔法、回避を好む。回復魔法、物理攻撃は嫌う。

■ 友愛 ↓ 回復魔法と補助魔法、防御を好む。物理、魔法攻撃は嫌がる。

■ 冷静 ↓ 仲魔に判断を任せる。細かい指示は嫌がる。

■ 愚鈍 ↓ 仲魔に判断を任せる。細かい指示は嫌がる。

「サマナーはそれを見極め、的確な指示を与えねばならない。好みに合う指示をすれば忠誠度が上がり、反する指示を続ければ下がる。最後には捨て台詞を残してCOMPから離脱する」

「……」

「最悪は離脱してサマナーを襲う、特にダーク悪魔はな。仲魔は使い捨ての消耗品か、苦楽を共にするパートナーなのか、それはお主

次第だな」

仲魔は消耗品じゃない。生き残る為のパートナーだ。

「悪魔がCOMPを操作可能なのか、セキュリティのロックが解除されていれば可能だ」

嘘！！マジかよ。黒井も驚いている。ヴィクトルはキーボードから入力した。

？人型で知能が非常に高い悪魔。一部の夜魔、堕天使や魔王は扱える。

？人型以外の悪魔でもサマナーを精神制御、洗脳するスキルがあれば間接的に操作は可能。

？サマナー以外で悪魔召喚の素質を持つ人間が、悪魔と合体して悪魔人になる。

「自分から悪魔と合体するなんて……そんな人はいるのですか？」

「少数だが存在する。己に限界を感じ、より強い力を渴望する者、己の死を間近に迎えて新たな活路を見出す者……理由は様々だ。それと己の意に反して合体させられた者も含まれる」

「無理矢理って……ひどい」

「一部のダークサマナー、黒魔導師、死霊術師、魔女が行なっている。現在、そのような愚行は我輩や邪教の主殿達は許可しない」

意外だ、この人マッドな雰囲気あるから。

「もし、合体するとどうなるのですか？」

黒井が質問する。

「不安定な合体で、事故率が非常に高く、スライムになりやすい。己の精神力が強ければ自我が残り悪魔の力が使える。更に悪魔にも人の姿にも変身出来る。逆に強ければ人としての自我が無くなり悪魔は人の能力も使えるのだ」

それは先生も言っていたな。俺と黒井は顔を見合わせた。これは言えるスライムは悲惨だ。

「話は以上だ。ボンボヤージ」

帰りの車内でしばらくは無言だった。

「結果的にはここに来て正解だったわね。私も悪魔人間は予想していなかったわ……」

「で、どうしよう」

男として情けないけど黒井の意見が参考になるよ全く。

「まどかさんからは特に言われていないわ。どう判断するのか私達は試されているし……」

「情報として、そのサマナーの経歴は？」

「名前は今村高次、31歳。大手企業の集栄物産本社に勤務、妻子は無し。前科も無し、交友関係で怪しい者はいない。表向きは真面目なエリートサラリーマン、裏では闇ネットを介して依頼を請負っていたのね」

スマートフォンを操作しながら話してくれるが、これだけだと分からない。

「あつサマナーならヴィクトルに訊けば、男の仲魔とか教えてくれるんじゃないか」

「それは無理よ。とつくに私が訊いているわ。ヴィクトルは全てのサマナーと信頼関係の為、例え死んだダークサマナーでも教えてくれないわ」

「そうか、ペラペラ話したらサマナーから信用されなくなるよな」

「続きだけど今村は、0課が内偵していた秘密クラブの会員よ。10人以上の売春婦を誘ってクラブ内で、変態猟奇プレイを楽しみ惨殺しているわ」

「想像したら胸糞が悪くなる話だ」

「旦那様とお嬢さん、お楽しみ中にソーリー。尾行されています」

「えっ?」「いつから?」

一瞬、キモい山田一郎かと思った。

「業魔殿を出てからです。今、メインモニターに表示させます」

ナビを操作すると画像が変わり、追走している黒色の車が映っている。

「車のナンバーは陸運局にアクセスした結果、該当する車種はナッシング。偽造ナンバーと判断します」

「そ、それなら一旦停車してやり過ごそう」

「了解でござす」

ハザードランプを点滅させてゆっくりと路肩に止め、黒色の車が通り過ぎてから走り出した。

「何で尾行されたんだろう?」

「私は尾行される理由は無いわね。と、なると」

「この車は先生のだから……先生、オルガが俺かも、それと自動車窃盗団かもしれない」

本当に嫌な予感がする。

「オルガさん、良く偽造ナンバーと見抜いたわね」
「それは嬢ちゃん……」

オルガの説明は、運転しながら周囲を走る車のナンバーをサーチして『スーパーブレインオルガ2772』に情報を送信、それから全ての陸運局とレンタカー会社のメインシステムにアクセス、その中で該当しないナンバーはビンゴと言う事だ。同時に所有者と使用者の身許も調べている。

「何か呆れるくらい凄いわ。まさにオーバーテクノロジーの塊よ。深町君、分かっているわよね？」

「ああ、言わずもがな、だ」

オルガを含む天馬先生の研究は、ある種の多国籍企業や軍産複合体にとって、涎が出るほどのシロモノだ。関係ない俺が、その争いに巻き込まれる危険が高い。

「モア・ソーリー。偽造ナンバーの車、3台が後ろから接近中」

「発信機が付けられていたのかも」

「お嬢さん、それはナッシング。嚴重なチェック済でノープロブレム。偉大な天才博士の研究施設は、複数のスパイ衛星から24時間年中無休で視姦中。オルガ2772は衛星ヘジャミングの隙を突かれたと判断します」

「博士の研究を狙っている組織ね。一介のダークサマナーが、スパイ衛星を使つてまで深町君を監視するのは有り得ないわ」

「うゝん、確かに」

「旦那様とお嬢さん、奴等を人気の無い場所に誘き寄せアンド処理するのを提案します」

「ちよつと待つて、それは危険よ。尾行しているのが何人か分かる？」

「1台に2人乗車。全員スーツ姿アンド拳銃を装備中」

6人か、どうするか？

？人気の無い場所で迎え撃つ。

？大門さんと合流する。

？警察署へ逃げる。

第16話 尾行（後書き）

「ヴィクトル様、あの人は生き残れるのでしょうか？」

「ふむ、気になるか？」

「……」

「我輩にも分かん」

「……」

「……」

第17話 変身

6人か、さてどうする？ 今、走っている環七通りは、交通量は多いが順調に流れている。

「オルガさん、尾行は撒けないですか？」

「大門さんと合流した方が有利になるよ」

「旦那様。追っ手を撒く、でおK？」

「あ、ああ、頼む」

「さあ、楽しいカーチェイスの始まりだ。レッツらゴー」

オルガが一気にアクセルを踏み込むと、キックダウンしてベンツは急加速した。前の車はパッシングで煽って譲らせる。

まあ、大型のベンツに煽られたら避けるよ。尾行の車も加速してくると、今度はギリギリまで近寄らせてブレーキを踏んだので、俺達は前のめりになった。

「うわっ！！」「キャッ！！」

後ろの車は追突を避けようとハンドルを切ったが、運悪く他のワゴン車と接触して2台共ガードレールに激突した。一歩間違えれば大惨事だよ。

「オルガさん……」

「大丈夫、問題はナッシング。後2台」

もう1台は、左側に寄って来ると窓ガラスが下る。男の手には、サイレンサー付きの自動拳銃が握られている。

「マジかよ、あいつ撃つのか!!」
「嘘!!」

俺と黒井は伏せたが、ガラスは割れなかった。でも、こっ怖い…
…心臓がドキドキして身体の震えが止まらない。俺達は手を握っていた。

「この特殊仕様のベンツは、ロケット・ランチャーでなければ問題はナッシング」

嬉しそうに言うなよ全く。オルガはベンツを相手の車のフェンダー部分に当てたが、相手も押し返そうとする。排気量、馬力で勝るベンツには勝てなく、路肩に停車しているトラックに追突した。

これで環七通りは渋滞するだろう。

「……」

「後1台でフィニッシュ」

「あのオルガさん……」

うわっ黒井が怒っているよ。握り拳が震えている。

「言いたい事、色々あるけど……2度と貴女が運転する車には乗らないわ」

「ソーリー、後悔はしたら負けだと思う」

「と、とにかく無事だったからいいんじゃない?」

「ふん!!」

足を組んでそっぽを向いた。あいつらもこうなるとは思わなかっただろうな。

幸運にも人を跳ね飛ばしていない事だ。事故の責任はあいつらだ

から、多分……

これだけは絶対言える、カーチェイスは映画で観るべきだ。実体
験すべきではないと……

予想外のアクシデントがあっただけ、あの工場には予定より早く
着きそうだ。

黒井は、不機嫌な顔で外を見ている。外は夕日で染まる駒沢の街
並みが見えるが交通量が少ない。いや走っていない。

「え、あれ？」

気のせいと同じ夕日の風景のようだけど。

「深町君も気がついたみたいね」

「あ、ああ、何か同じ風景のようだけど。オルガ……」
「ソーリー！！　してやられました」

オルガが振り向いたが忌々しそうな顔だ。

「このまま走っても到着しないわ」

「閉鎖空間に閉じ込められました。外部との連絡は遮断されました。
畜生」

「あつ圏外になっている」

携帯もCOMPも通じない。こりゃヤバイ。

「閉鎖空間……結界の一種よ。解除するには、その術者を倒さない
と無理ね」

「術者って残り1台に乗っている奴か？」

「多分そうよ」

前方に1台の車が止まっていた。黒色のグロリアだ。
オルガは、少し離れて止める。グロリアから2人の男？ が降り
て俺達を見ている。

2人共髪は金髪に黒いサングラスで、上下黒色のスーツを着てい
る。

ステレオタイプの怪しい男達だ。

「降りましょう」

「ああ」

「あの2人がサマナーで無ければいいのだけど」

しまった、アイテムが無い。

「黒井さんはアイテムとかは持っている？」

「持っているわよ。その顔だと、どうやら持っていないみたいね」

黒井から少し分けて貰った。

3対2で俺達が有利だけど、あの2人がサマナーだと逆に不利だ。
俺達はベンツから降りる。オルガはコートを脱いだ。当然、俺は改
造釘打ち機を手に行っている。

周囲は駒沢の街並みだが、静止画像みたいに動かない。静寂なの
で不気味だ。

「そこでトマレナサイ。ユー達、よくもペロペロしてくれましたネ」

正面向かって左側の男が言うが、妙な訛りと変な話し方をする。

「貴方達は何者なの？」

「ミー達は、ある組織からの依頼を受けて、ドクター光明寺達の最高傑作であるマシンレディ・オルガ03を頂戴する為、ユー達を追跡しました」

「それなら俺達は、関係無いですよ」

無駄だけど一応、言ってみた。男は大きさに肩を竦めた。

「ユーとガールフレンドは、確かに無関係でス。でも我々を見てしまいました。それは非ッ常に困りマース」

「旦那様とお嬢さんをどうするつもりだ？」

オルガは俺達の前で油断無く身構える。

「申し訳ないけど機密保持の為、私達と同行してもらうわ。大人しくしていれば危害を加えない」

「大丈夫デース。頭にとってもグッドな加工処理を施すだけデース」

こいつから加工処理って聞くと嫌な事しか想像出来ないよ。

もう1人はサングラスで顔がよく分からないが女だ。ハスキーな声で、男より流暢な日本語だ。2人は、ホルスターから自動拳銃を抜いて俺達に銃口を向けた。

「ミー達の車に乗ってクダサイ。ドクターのメルセデスは他の仲間が運転します」

「言う通りにしなさい」

絶対嘘だ。ドラマでもあるパターンだ。安心させて人気の無い場所ですドンだろ。

「深町君、どうする？」

「それは……」

↓？戦う

？わざと捕まり、チャンスを狙う。

？笑ってごまかす

それに今頃、ヒロ子さんも俺達の異変に気付いている筈だ。

「幸い、俺達を一般人だと思っているから、隙を突けは勝てるかもしれない。どうだろう？」

「分かったわ。オルガさんが2人に仕掛けたら、深町君はすぐ悪魔を召喚して」

「わ、分かった」

「あの2人はオルガさんを優先するわよ」

あいつらから見れば、俺達は雑魚キャラだろう。でも緊張して足が震える。失敗したらどうしよう……

「おK、先手を打って、必殺鉄拳パンチをお見舞いするでやんす」

「何、ヒソヒソ話しているの！！ 早く来なさい！！」

うわっ女がイラついているよ。今にも発砲しそうだ。

「その前にアンタ達の名前を教えてよ」

時間稼ぎで黒井が言うと、2人は顔を見合わせた。

「いいでしょう。彼はジョン、ジョン・ドウ。私はジェーン・ドウ
」

思い切り偽名じゃねーかよ。

「サア、乗りなさ…うおっ!!」

オルガはダッシュして間合いを詰めようとするが、ジェーンが早く気付いて発砲し、ジョンも発砲した。オルガは回避しようとしたが、ジェーンの一発が左肩に命中、続くジョンの弾は何とか避けた。耐物理防御力の為、無傷だ。怯まずジョンを狙った。

「唸れ鉄拳!! 必殺パンチ!!」

左腕から放たれた有線式ロケットアームはジョンに当たらず、グロリアのドアをブチ抜いた。凄い、当たれば即死級だよ。オルガはすぐ巻き戻した。

「チッ!!」

「ジョン、あの子達を捕まえるのよ!!」

「イエッサー、ボーイ&ガール、神妙にお縄にшинаナサイ」

ジョンが銃を構えながらこちらに向かってくる。ヤバイ、俺達を人質にするつもりだ。

「N a s a t a n a d a Z a z a s u Z a z a s u Z a z a
s u …… A g i r a o ……」

黒井は、短剣を手にして精神を集中し、何か唱えている。突然、黒井の側に炎の塊が1つ現れると男に向かった。

「アチチチのチ!!」

不意を突かれた為、避けられず命中し、ジヨンは熱さで転げ回る。

「オー、今のは少し効きましたネ。ガールフレンドがウィッチとは思いませんでしたよ」

その隙に俺はヘッドバイザーを被り、COMPを操作する。

『悪魔召喚プログラムを召喚します』

D E G I T A L D E V I L S U M M O N S Y S T E M O K
M A G B A T T E R Y O K
C O N D I T I O N O K
S U M M O N O K
G O

召喚魔法陣が青白く輝き、上半身が後ろ手に縛られた全裸の女で、下半身が醜い芋虫の幽鬼オキクムシが現れた。意外と大きい。

「ああっ……初……逝っちゃいそう……」

身を振じらせて呻く。やっぱりキモイよ。

「じゃあ、オキクムシはマハ・ムドで2人を攻撃だ」

ブツブツ唱えると呪殺魔法陣が現れ、瘴気が2人を包むがなんとも無い。

2人同時攻撃は失敗か？

「オーマイゴッド！！　これはマハ・ムド、彼はサモナーですか？」
「まさか、あの2人がサマナーと魔女だったとは、ジョン！！　戻
って、こっちが不利よ」

「了解デース」

オルガは俺達に合流した。

あの2人は、スーツの懷から1枚のカードを取り出して構えた。
黒井が驚いて2人を見る。

「ま、まさか！！」

「そのまさかよ。銃だけでは、貴方達を相手にするのは不利。いく
わよ変身！！」
「変身」

2人の姿が幻の如く揺らめくと、異形の姿に変わったよ。

女は前に見たリリムに変身した。もう1体は初めて見る。背中に
鳥の翼が2枚ある金髪の女だ。黒のアイマスクをして黒い首輪を嵌
め、服の代わりに黒色の太いベルトで身体を締め付けている。見る
からにアブナイ悪魔だよ。

2体は、こちらの様子を窺っているのか仕掛けて来ない。

「旦那様、ボンデージ姿は『エンジェル』です」

「えっ、こいつら悪魔人間か！！」

黒井が首を横に振る。

「カードを出して変身したから『デビルシフター』かもしれない」
「デビルシフターって何？」

「デビルシフターとは、悪魔にシフトする者。『契約済の悪魔を封

印した変身アイテム』を使用して、その悪魔を召喚、自らの身体に乗り移らせ、その悪魔に変身する能力者でございます」

オルガが説明してくれる。あれか、前にアニメで放映していた憑依師みたいな奴か。

「変身すると『その悪魔の特技、魔法が使える』けど、代償として人間時の能力は使えなくなり、相性も、その悪魔になるのよ」
「すると銃は使えないのか？」

黒井は頷く。

「そうよ、リリムは電撃魔法を使うから、マシン系のオルガさんは分が悪いわ。電撃魔法……ジオンガは感電の追加効果があるから、電撃弱点のオルガさんは行動を封じられてしまう」

「その通りでございます。リリムは電撃無効、氷結弱点、エンジンルは破魔無効、衝撃、呪殺が弱点でございます」

「それとエンジェルは、全体回復魔法のメ・ディアがあるから、先に叩くのよ」

「ああ、分かった」

先にリリムが仕掛けて来た。

「いくわよ、ジオンガ」

「ミーは破魔デス」

稲妻が現れ、オルガは避けられず直撃した。ダメージでよろめき、苦痛の顔でリリムを睨む。感電は免れたみたいだ。

「まだ……まだ終わらない、反撃の鉄拳！！パンチ！！」

有線式ロケットアームは、リリムの腹に命中して吹っ飛ばした。

「ウグ……おのれ、これしきで……」

腹に直撃したダメージが大きいのか、地面に膝を付いて睨んでいる。続いてエンジェルが仕掛けて来たが効果は無い。俺はユキジヨロウを召喚した。

DEGITAL DEVIL SUMMON SYSTEM OK
MAG BATTERY OK
CONDITION OK
SUMMON OK
GO

白い着物姿のユキジヨロウが現れた。

「あら、ネット動画で、殿方による緊縛ぶれいを観賞していましたのに……主殿何用で？」

かなり不機嫌そうだ。何観ていたんだよ。

「戦闘中なんだ。あのリリムを攻撃してくれ」

「お断り致しますわ」

「えっ！？ マジ？」

ここでボイコットかよ。かなりヤバイ！！

「深町君！！」

早くリリムを倒さないと、エンジェルが仕掛けて来る。オキクムシが再度、マハ・ムドで攻撃するが失敗して倒せない。改造釘打ち機で突撃は無謀だ。今の俺は応援しか出来ない。

「ほほほ、冗談ですわ。この一撃で、あの夢魔を倒します。ブフーラ」

氷の塊が現れ、リリムに命中？ と思っただがエンジェルがカバーに入った。

「くっ！！ エンジェルの癖に生意気な！！」

悔しげに爪を噛む。

黒井のアギラオがエンジェルに命中したが、魔法防御力が高いのか、倒せない。

「ミー達を倒すには10年早漏ネ」

「自己修復機能作動」

オルガが自己回復すると同時に、エンジェルもメ・ディアで回復した。今度はエンジェルへ回し蹴りが炸裂した。

「あう！！」

「おのれ、機械人形が！！」

エンジェルは避け損ねて倒れた。リリムのジオンガは、オルガを狙ったが回避に成功した。

「身も心も凍てつきなさい。ブフーラ」

リリムは氷結はしなかったが、かなりのダメージで立ち上がれない。虫の息だ。

「ま、まだよ、これしきで倒れない……」

「これで終わりよ、マハ・ラギ!!」

「ギャアアア」

「やった!!」

リリムが倒れて、後はエンジェルだけだ。俺は黒井から貰ったマハ・ラギストーンを使うが、エンジェルの魔法防御が高い為、ダメージが与えられない。

「ペトラアイで攻撃だ」

オキクムシの眼が妖しい光に輝くとエンジェルは回避出来ず、石化した。最後はオルガの烈風正拳突きで砕け散った。変身が解けて2人が倒れている。

同時に周囲が元に戻った。ここは駒沢公園内にある競技場の近くだ。

「この2人、死んだのかな？」

動かないから気になる。

「死んではいいいわ。こうなると自力では回復出来無いけど」
「旦那様、ぶっ殺しますか？」

？殺す

↓？殺さない

267

いるなら早く来てよ、あの時の報酬を渡すからピンポンダツシュで
レッツゴーよ。ティターニア様がイライラしているから絶対来てよ
ね、（。旦那）ノ代々木公園に来ればアタシが迎えに行くから。メ
ール頂戴ね。バイバーイ、（；、旦那）ノ

第17話 変身（後書き）

「オルガ、この銃は、もしかしてファイブセブン？」

ファブリック・ナショナル

「その通りでございます。ベルギーのFN社が開発したFive -
ファイブセブン

sevenは5・7mm×28弾を使用する自動拳銃でございます。
装弾数は20発。FとNが大文字なのはFN社の駄洒落です。FN
社は、サブマシンガンのP90や分隊支援火器のミニミ軽機関銃、
戦車や装甲車の上などに搭載されるブローニングM2重機関銃など
でも有名な軍用の総合銃器メーカーです」

「弾丸が特殊だっけ？」

「はい。5・7mm×28弾は、軍の後方部隊用にパーソナル・デ
イフェンス・ウェポン（PDW）として開発されたP90用の弾薬
です。小銃弾を小型化したような弾薬で、これをサイドアーム（補
助兵器）として使用可能にしたのがファイブセブンでございます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0431/>

召喚師 屍廻己

2011年11月14日23時46分発行